台　遺　跡

県立学校施設整備事業（館林特別支援学校改築整備）に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

2019

群馬県教育委員会事務局管理課
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

台　遺　跡

県立学校施設整備事業（館林特別支援学校改築整備）に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

2019

群馬県教育委員会事務局管理課
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県教育委員会では平成18年度の教育基本法改正を受け、さまざまな教育施策を推進してまいりました。その一つに特別支援教育の強化・充実があり、５ヶ年計画を策定して学習環境の整備・充実に努めているところです。特別支援学校は県内各地に開設されていますが、在籍児童数増加や施設老朽化問題があり、現在これを解消するため施設の改修を推進しています。その一環として、館林特別支援学校の改築工事も計画されましたが、工事に先立つ試掘調査で工事対象地内にも貴重な遺跡があることが分かり、発掘調査が行われることになった次第であります。

このたび報告する台遺跡は、平成28年度館林特別支援学校改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査として群馬県教育委員会事務局管理課より委託を受け、当事業団が同年７月に発掘調査を実施したものです。

遺跡は周知の遺跡として台帳に記載され、中世の「赤岩道」に比定されている県道に面しております。発掘調査では古墳時代の竪穴建物や中・近世の遺構が発見され、貴重なデータとなりました。限られた範囲の発掘調査であり、遺跡の全貌は明らかではありませんが、館林地区の歴史を考えるとき、これが古代から近世に至る館林地区の歴史のひとコマであることは間違いありません。今後、本報告書が郷土の歴史解明や教育の場で活用されることを願う次第です。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の作成にいたるまで、群馬県教育委員会、館林市教育委員会、並びに、学校関係者、地元の皆様には多大なご指導、ご協力をいただきました。本報告書の上梓に際して、関係者の皆様に心から感謝を申し上げて、序といたします。

平成31年３月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　中 野 三 智 男

例　　言

１．本書は、平成28年度館林特別支援学校改築事業に伴い発掘調査された、館林市上三林町に所在する台遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

２．遺跡の所在地は下記の通りである。

群馬県館林市上三林町580-1、581-1、581-2、582、583、585、588、621-1番地

３．事業主体　群馬県教育委員会事務局管理課

４．調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

５．発掘調査の期間と体制は、次の通りである。

調査期間　平成28年７月１日～平成28年７月31日

発掘担当者　専門調査役　藤巻幸男・間庭　稔

遺跡掘削請負工事　有限会社毛野考古学研究所

地上測量　技研コンサル株式会社

６．整理事業の期間と体制は、次の通りである。

整理期間　平成30年10月１日～平成31年１月31日

（履行期間　平成30年８月１日～平成31年３月31日）

整理担当　　専門調査役　岩﨑泰一

遺物保存処理　専門員　板垣泰之、専門調査役　関　邦一

遺物洗浄・注記　社会福祉法人ゆずりは会

７．本書作成の担当者は、次の通りである。

編　　集　　岩﨑泰一　　デジタル編集　主任調査研究員・資料統括　齊田智彦

遺物写真撮影　岩﨑泰一（土師器）、資料２課長　津島秀章（石器・石製品）、
専門調査役　石坂　茂（縄文土器）、専門調査役　大西雅広（陶磁器）、板垣泰之（金属器）

執　　筆　　調査２課長　飯森康弘（本文：第４章１）、間庭　稔（本文：第１章第２・３節）、
藤巻幸男（本文：第２章第１節）、岩﨑泰一（本文：上記以外）
津島秀章（遺物観察表：石器・石製品）
石坂　茂（遺物観察表：縄文土器）
大西雅広（遺物観察表：土師器・陶磁器）
板垣泰之（遺物観察表：金属器）

８．出土石器類の石材同定は、飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）に依頼した。

９．発掘調査資料および出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

10．発掘調査および報告書作成に際しては下記の方々や機関にご協力・ご指導いただきました。記して感謝いたします。

群馬県教育委員会、館林市教育委員会、館林特別支援学校

凡　　例

1．本文中に使用した座標・方位は、すべて国家座標「世界測地系（測量成果2011／平面直角座標Ⅸ系）」である。また、調査区中央付近のＸ＝24,320、Ｙ＝-31,260の真北方向角は東偏0°12′19.61″である。

2．グリッドは、遺構挿図中に＋記号と数値を併せ座標値を表した。数値は、国家座標値Ｘ・Ｙ値の下３桁を用いて表記した。

3．発掘調査では混乱を避けるため、途中遺構の種別が判明した場合も当初の遺構番号を継続使用している。これを受け、整理作業では種別毎に遺構番号を付け直しているが、出土遺物注記の訂正が煩雑になるため、測量図成果品や写真データ等については調査中に付けた遺構番号を変更せず、そのままにしている。したがって、出土遺物や原図を検索する場合は、下記の新旧対照表により旧番号で検索することが必要になる。

（旧番号）		（新番号）
20号土坑	→	１号井戸
23号土坑	→	２号井戸
84号土坑	→	３号井戸
99号土坑	→	４号井戸
95号土坑	→	１号火葬土坑
９号溝	→	１号平地建物

以下の土坑・ピットについては、整理段階で遺構から外し、欠番とした。

４・75・92号土坑、92号ピット

4．遺構断面図に示した数値は、標高（単位：m）を表している。

5．遺構図・遺物図の縮尺は、下記の通り遺構種毎に縮尺を統一した。同一の遺物図中に異なる縮尺の図が加わる場合は、必要に応じて該当する遺物番号に続き（　）内に縮尺を記した。

遺構図　竪穴建物１：60、カマド１：30、掘立柱建物跡１：60、井戸１：40、溝１：40・１：80、土坑１：40、ピット１：40

遺物図　甕１：４、杯・高杯１：３、土製品・陶磁器類１：２・１：３、縄文土器１：３、石鏃１：２、石臼１：４、古銭・金属製品類１：２

6．遺物写真は遺物図と概ね同一縮尺となるよう掲載した。

7．遺構図内で使用したトーンおよびドットは次のことを示している。

焼土　炭化物　カクラン

土器　●　金属　■

8．遺構の主軸方位・走行を記載する際は、座標北を基準として東に傾いた場合はＮ－○°－Ｅ、西に傾いた場合はＮ－○°－Ｗというように記した。

9．本書で使用した地図は、以下の通りである。

国土地理院の電子地形図１：25,000「足利南部」「佐野」「妻沼」「館林」（平成30年8月7日調整）

国土地理院１：200,000「宇都宮」（平成18年発行）

館林市都市計画図１：2,500（昭和60年測量、平成31年3月複製申請認可済み）

目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次・表目次・写真目次

第１章　調査の経過と方法 ・・・・・・・・・・・・ 1
　第１節　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　発掘調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・ 2
　第３節　発掘調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・ 2
　第４節　整理の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第２章　遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　第１節　遺跡の地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・ 4
　第２節　周辺遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　第３節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第３章　検出された遺構と遺物 ・・・・・・・・・ 12
　第１節　古墳時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
　　１．概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
　　２．竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
　　３．平地建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
　　４．土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
　第２節　中世および近世 ・・・・・・・・・・・・・・ 20
　　１．概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
　　２．掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
　　３．火葬土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
　　４．井戸 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
　　５．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
　　６．土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
　　７．ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
　第３節　包含層出土の遺物 ・・・・・・・・・・・・・ 56
　　１．旧石器時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
　　２．包含層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

第４章　調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
　第１節　中世関連遺構について・・・・・・・・・・・ 57
　第２節　近世上三林村について・・・・・・・・・・・ 60

遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
土坑計測値一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
ピット計測値一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
非掲載遺物一覧表（陶磁器類）・・・・・・・・・・・・ 78

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図(国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を使用) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２図　調査範囲図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第３図　調査区周辺図(館林市役所発行1/2,500館林市都市計画図23、29(昭和60年測図)を複製使用) ・・・・・・・・・・ 3
第４図　館林市周辺の地形概念図(館林市史通史編１、図1-4を再トレース) ・ 5
第５図　周辺遺跡(国土地理院の電子地形図1/25,000を使用 ・・・・・・・・・・ 7
第６図　遺跡の基本土層図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第７図　遺構配置図(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第８図　遺構配置図(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第９図　古墳時代の遺構分布(建物推定プラン) ・・・・・・・・ 12
第10図　１号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第11図　１号竪穴建物出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・ 13
第12図　１号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・ 14
第13図　２号竪穴建物(１) ・・・・・・・・・・・・・・ 15
第14図　２号竪穴建物(２)と出土遺物 ・・・・・・・・・・ 16
第15図　３号竪穴建物と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 17
第16図　４号竪穴建物と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 17
第17図　１号平地建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第18図　19号土坑と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・ 19
第19図　１号掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第20図　２号掘立柱建物(１) ・・・・・・・・・・・・・ 21
第21図　２号掘立柱建物(２) ・・・・・・・・・・・・・ 22
第22図　中・近世の遺構分布(火葬土坑・井戸) ・・・・・・・ 23
第23図　１号火葬土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第24図　１～４号井戸と１・２号井戸出土遺物 ・・・・・・・ 24
第25図　中・近世の遺構分布(溝) ・・・・・・・・・・・・ 25
第26図　１～３号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第27図　１～３号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・ 27
第28図　４・５号溝と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・ 28
第29図　６・７・11号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第30図　14～16号溝と16号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・ 30
第31図　17・19号溝と19号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・ 31
第32図　18号溝と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・ 32
第33図　長方形土坑(１) ・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第34図　長方形土坑(２) ・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第35図　長方形土坑(３) ・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第36図　長方形土坑(４) ・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第37図　長方形土坑(５) ・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第38図　長方形土坑(６) ・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第39図　長方形土坑(７) ・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第40図　長方形土坑(８) ・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第41図　長方形土坑(９) ・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第42図　長方形土坑(10) ・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第43図　長方形土坑(11) ・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第44図　円形土坑・不整形土坑 ・・・・・・・・・・・・・ 45
第45図　土坑出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・・・・ 46
第46図　土坑出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・ 47
第47図　土坑出土遺物(３) ・・・・・・・・・・・・・・ 48
第48図　ピット(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第49図　ピット(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第50図　ピット(３) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第51図　ピット(４) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第52図　ピット(５) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第53図　ピット(６) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
第54図　ピット(７) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第55図　ピット出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第56図　旧石器調査区図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第57図　包含層出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第58図　綿貫原北遺跡における長方形土坑の配置状況 ・・・・・ 58
第59図　同・復旧坑の配置状況 ・・・・・・・・・・・・・ 59
第60図　絵図に描かれた上三林村(一部加筆) ・・・・・・・・ 60
第61図　迅速測図示された上三林村(上)と、上三林村の地割(下) ・・・・・・ 61
第62図　１区15・18号溝と耕地図境 ・・・・・・・・・・・ 62

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第２表　遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第３表　土坑計測値一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・ 71
第４表　ピット計測値一覧表 ・・・・・・・・・・・・・ 74
第５表　非掲載遺物一覧表(陶磁器類) ・・・・・・・・・・ 78

写真目次

PL.１　1　遺跡遠景(矢印が遺跡)
2　鞍掛地区に残る旧利根川流路
3　下休泊用水(逆川合流地点、旧赤堀村)
4　屋敷林が残る集落遠景(旧野辺村)
5　長良神社(下三林地区)

PL.２　1　１区全景、西から
2　１区全景(東側)
3　１区全景(中央)
4　１区全景(西側)
5　２区(調査前の状況)
6　２区全景、南西から

PL.３　1　３区(調査前の状況)
2　３区全景、南東から
3　４区(調査前の状況)
4　４区全景、南東から
5　５区(調査前の状況)
6　５区全景、北西から
7　７区(調査前の状況)、南東から
8　埋設物の確認作業

PL.４　1　１号竪穴建物土層堆積状態、北から
2　同・カマド全景、南から
3　同・遺物出土状態(１)、南東から
4　同・遺物出土状態(２)、北から
5　２号竪穴建物全景、南西から

PL.５　1　２号竪穴建物土層堆積状態、北から
2　同・遺物出土状態(１)、南西から
3　同・遺物出土状態(２)、南西から
4　同・掘り方全景、南西から
5　４号竪穴建物全景、南東から

PL.６　1　４号竪穴建物土層堆積状態、南西から
2　同・遺物出土状態
3　１号平地建物(中央)と19号土坑(右上)、南西から
4　１号平地建物全景、北西から
5　19号土坑全景、北東から

PL.７　1　１号掘立柱建物全景、南から
2　２号掘立柱建物全景、西から

PL.８　1　１号火葬土坑全景、東から
2　同・掘り方全景、東から
3　同・骨片等出土状態、東から
4　同・通風孔赤化状態、東から
5　１号井戸全景、南から
6　２号井戸全景、南から
7　３号井戸全景、東から
8　４号井戸土層堆積状態、南から

PL.９　1　１～３号溝全景、南から
2　４・５号溝全景、南から
3　15号溝全景、東から
4　18号溝全景、東から
5　21・22号土坑全景、東から
6　24号土坑全景、東から

PL.10　1　27号土坑全景、東から
2　49号土坑全景、北から
3　60号土坑全景、南から
4　61号土坑全景、東から
5　64号土坑全景、南西から
6　70号土坑全景、西から
7　62号土坑全景、北から
8　72号土坑全景、北から

PL.11　1　１区中央西の土坑群、南から
2　１区中央東の土坑群(１)、南から

PL.12　1　１区中央東の土坑群(２)、南から
2　１区中央東の土坑群(３)、南西から

PL.13　1　55号土坑遺物出土状態(１)、東から
2　同・遺物出土状態(２)、西から
3　同・遺物出土状態(３)、東から
4　同・完掘状態、東から
5　同・土層堆積状態、南から

PL.14　1　105号土坑全景、東から
2　107号土坑全景、西から
3　56号土坑全景、東から
4　85号土坑全景、南から
5　14号土坑全景、南から
6　35号土坑全景、南から
7　５号土坑全景、東から
8　68号土坑全景、北から

PL.15　1　33号ピット全景、北から
2　51号ピット全景、北から
3　52号ピット全景、北から
4　63号ピット全景、北から
5　51号ピット土層堆積状態、南から
6　52号ピット土層堆積状態、南から
7　１区調査風景、東から
8　２区調査風景、南から
9　館林市教育長視察、南西から
10　館林特別支援学校教職員視察、西から

PL.16　１号竪穴建物出土遺物
PL.17　１～４号竪穴建物ほか出土遺物
PL.18　土坑・ピット等出土遺物

第１章　調査の経過と方法

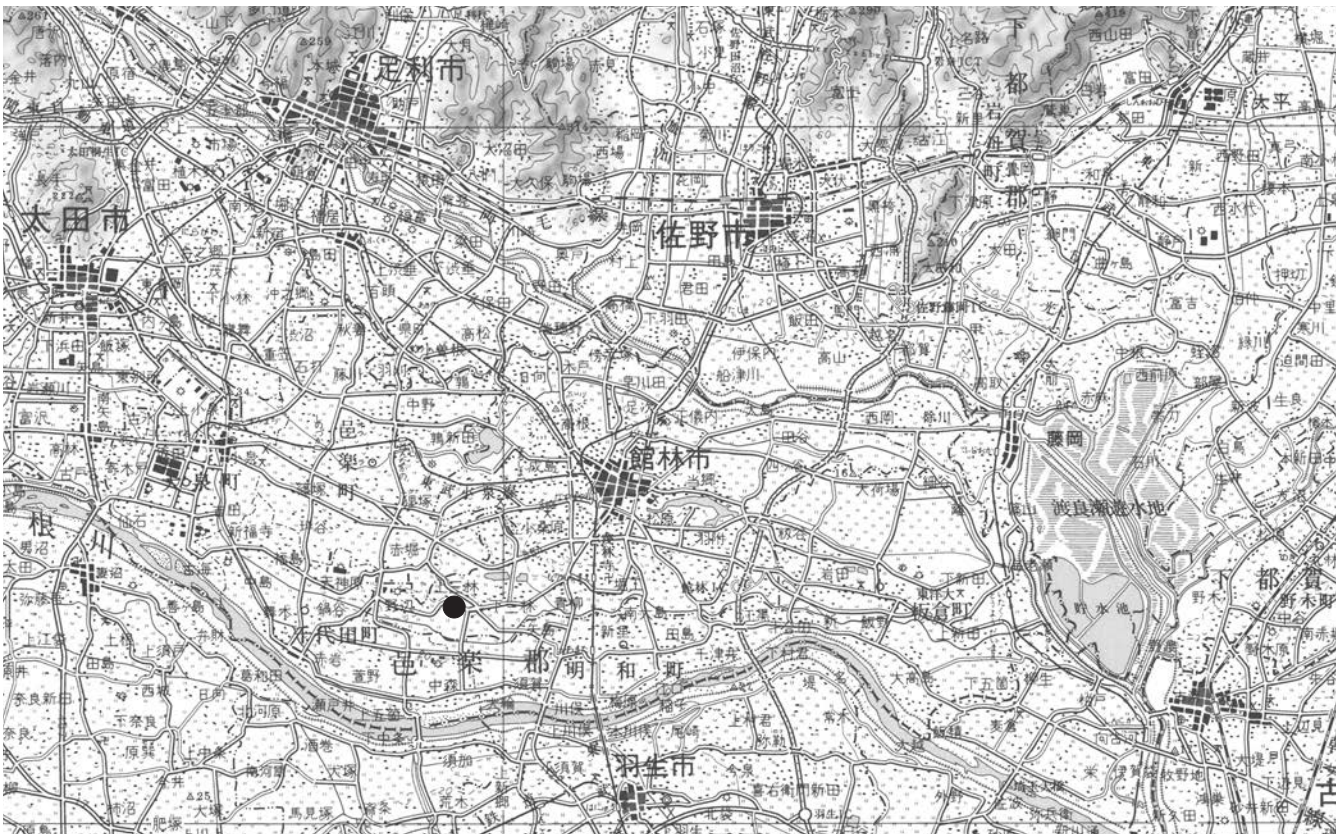
第１節　調査に至る経過

群馬県教育委員会では平成18年度の教育基本法改正を受け、平成21年３月に第１期「群馬県教育振興基本計画」を、これに続いて平成26年３月に第２期「群馬県教育振興基本計画」を策定し、さまざまな教育施策を推進してきた。そうした施策の一つに特別支援教育の強化・充実があり、群馬県教育委員会では平成25年３月に「群馬県特別支援教育推進計画」を作成し、これに基づき①特別支援学校の未設置地域の解消、②通学対策、③学習環境の整備・充実を行ってきたところである。

昨今、高齢化社会の到来と子供人口の減少が社会問題化している。本県人口も平成24年度から200万人を割り込み、こうした傾向は将来的にも変わらないだろうと予想されている。14才以下の人口も直近10年間で16％ほど減少しているが、これとは逆に特別支援学校の在籍児童数は増加傾向にあり、引き続き老朽化した施設の改修やバリアフリー化など施設・設備面の充実を進める必要があるとされている。

現在、群馬県下には県立20、市立４の支援学校がある。館林特別支援学校もその一つで、昭和35年に館林市立養護学校として開校、平成25年に館林特別支援学校として県立移管され、現在に至っている。在籍児童数の増加は同校でも深刻で、これを解消するため新校舎と既存校舎の改修工事が実施されることになり、平成27年５月８日に群馬県教育委員会事務局管理課（以下、管理課）から群馬県教育委員会事務局文化財保護課（以下、文化財保護課）に校舎新築工事に伴う事業照会があった。

これに対して、文化財保護課では詳細な事業内容が未確定であるため、改めて協議する必要があること、事業地が包蔵地内にあることから確認調査が必要である旨を回答した。平成27年10月18日、確認調査を４地点で実施したところ、４地点とも遺構が確認され発掘調査が必要



第１図　遺跡位置図（国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を使用）

になる旨を管理課あてに通知(平成27年10月20日付け)した。管理課では文化財保護課の指導を得て、館林市教育委員会文化振興課あてに必要書類を提出(平成28年３月25日付け)した。

その後も、文化財保護課と管理課では調査実施に向け事業計画の変更等の調整を重ね、当初の事業地面積1,886㎡を998㎡に減じることで概ね合意が得られた。

文化財保護課と管理課の調整を受け、平成28年６月１日付けで管理課と公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団(以下、事業団)の間で発掘調査契約が結ばれ、平成28年７月、調査期間１月の予定で発掘調査が行われることとなった。

第２節　発掘調査の経過

契約締結を受け発掘調査の事前準備を開始した。事前の現地立会には学校事務局も加わり、調査中の安全確保を前提に調査することとなり、これに従い準備を進めた。また、立会では敷地内の埋設物が問題となり、これに伴い学校側から配管図等の提供を受けた。通常、古い埋設物は図示されていないことが多く、慎重を期して手掘り発掘を行い、安全を確認して掘削を進めることとした。

平成28年７月１日、発掘調査に着手した。各調査区とも既存施設の周辺にあることや、下水管等の埋設物もあることから、これを避け掘削範囲を決めた。また、２～７区には渡り廊下や駐輪場があり、これが撤去されるのは学校が夏季休業に入る７月の中旬以後になるということであったので、調査面積の広い１区(549㎡)の調査と並行して他の地点の調査を進めることとした。その他の地点(３～７区)については埋設物等もあることから、手掘り掘削して埋設物等の有無を確認してから重機掘削することとした。

旧石器調査については、上層の調査が終了したのち、対象地点を１区に限り当該期石器群の有無について確認した。

調査日誌抄

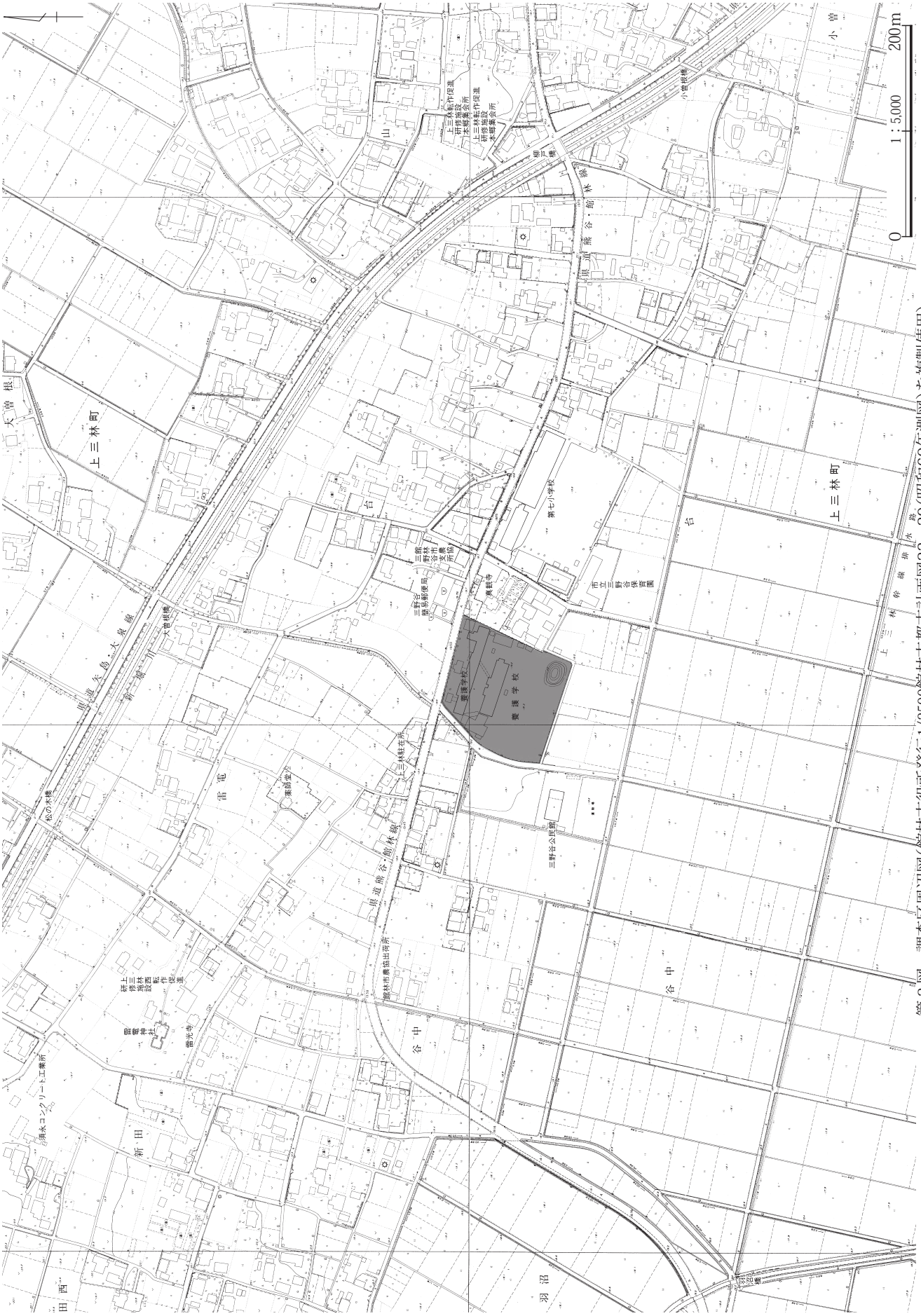
７月１日　調査開始(１・２区)
７月２日　重機掘削。安全フェンス上段の目隠し設置
７月６日　安全週間(役員視察)
７月12日　３・４区の調査開始
７月14日　駐輪場解体の都合で、７区の調査が最終週になることが確定。
７月15日　１学期終業式
７月20日　５区の調査開始(市教委視察)
７月21日　特別支援学校職員視察
７月25日　６・７区の調査開始
７月27日　調査終了、埋戻し作業、撤収作業
７月29日　調査終了に伴う引渡事務(学校事務局立会)

第３節　発掘調査の方法

調査区は校舎周辺の複数地点にあり、調査順に南校舎の南側調査区を１区、同東側調査区を２区として調査を開始、室内運動場(体育館)東の地点を３区、同北側の地点を４区・５区、南北校舎間の地点を６区、最東端の駐輪場の地点を７区として、基本的にはこの調査区順で調査を進めた。

各調査区とも水道管やガス管、高圧電線等の埋設物があり、マンホール・ハンドホールを現地確認したのち配管・配線図を参照し、まずは手掘り作業にてこれら埋設物の有無を確認してから重機掘削することとした。調査区内には使用中の下水管もあり、また、調査区に接して建造物があり、これを避け掘削せざるを得ず、調査範囲は限られることとなった。

第２図　調査範囲図



第３図　調査区周辺図（館林市役所発行1/2500館林市都市計画図23、29（昭和60年測図）を複製使用）

遺構確認面は現表土下50㎝程で、いわゆるローム漸移層の上面であった。重機掘削後、ジョレン精査して遺構確認をおこない、遺構調査を進めた。遺構調査は、土層観察用ベルトを残し移植ごてにて掘り下げ、遺構完掘後に個別遺構写真を撮影した。遺構測量については、業者委託して対応した。遺構番号については調査順に番号を付け、連番となっている。

グリッドについては、国家座標系Ⅸ系(世界測地系)を用い、必要に応じてＸＹ座標の順に下３桁で表示した。

第４節　整理の方法

整理事業の実施に際しては、文化財保護課の調整を経て、群馬県教育委員会と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団とで平成30年８月１日に整理事業の委託契約が交わされ、同年10月１日より当事業団で整理作業を開始した。

遺物整理は土器・石器・金属器類に分類し、それぞれ接合作業をおこない、遺構毎に掲載遺物を選び出した。掲載遺物については必要に応じ石膏を入れたのちに写真撮影、図化作業を実施した。

遺物実測は長焦点実測用写真や三次元測定機を使い、これを実測素図として等倍の手書き実測図を作成した。そして、手書き実測図作成後は、これを掲載サイズの２倍に縮小してトレース図を作成した。こうして得られたトレース図をスキャニングし、報告書刊行に向けてデジタルデータ化した。

竪穴建物や土坑、溝から出土した金属製品については、当事業団で保存処理作業をおこない、サビ等で形状不明な金属器についてはＸ線写真により形状を確認したのち実測図を作成した。金属器についても土器・石器と同様に写真撮影、トレース作業をおこない、デジタルデータ化した。

遺構写真は発掘調査で撮影記録したもので、このなかから報告に必要な写真を選び、画像修正し報告書掲載用のデータとした。

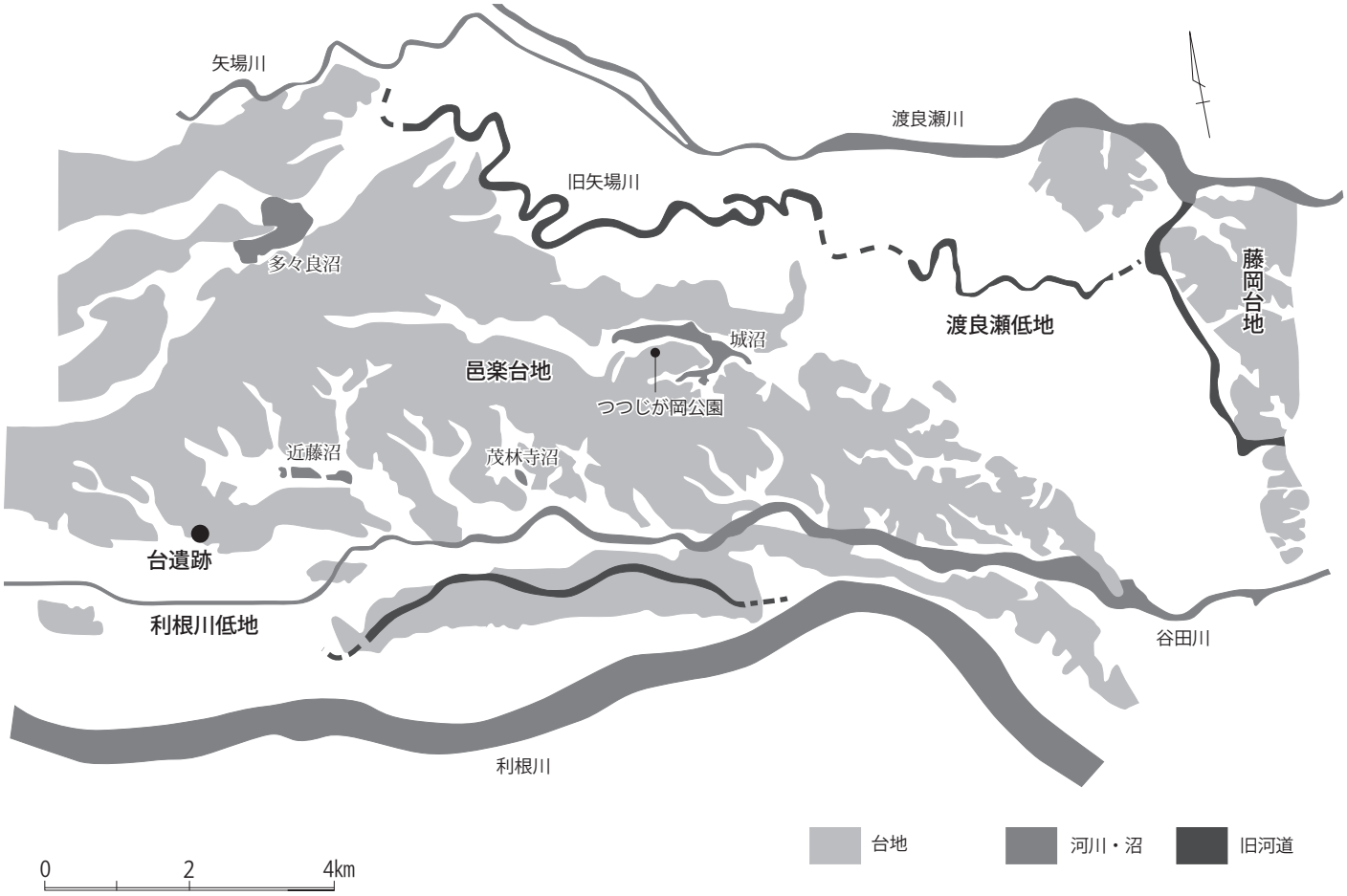
これら遺構遺物のデジタルデータおよび本文文字原稿を編集、報告書印刷データとした。

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡の地理的環境

本遺跡が所在する館林市は群馬県の南東部に位置し、市域北部が栃木県と接するほか、周辺には板倉町・邑楽町・明和町・千代田町が接している。市内で最も標高の高い地点は高根町大山祇神社付近(33.2m)だが、市域西部(標高25m)と市域東部(標高15m)では10mほどの高低差があり、西から東へ緩く傾斜している。館林市域の地形は邑楽台地と呼ばれる台地と、利根川・渡良瀬川流域に広がる低地部および微高地に大別することができよう。その概要は、以下のとおりである。

旧市街地を載せる台地は、邑楽町から板倉町に広がる。地形的には平坦だが、成島町－高根町にかけて古砂丘が列状に見られるほか、台地内の浸食谷には多々良沼や近藤沼・城沼など大小沼地と湿地があり、これが大きな特徴となっている。利根川および渡良瀬川の低地に接する台地縁辺は変換点が分からないほどだが、台地を刻む低地は比高差が明瞭で、邑楽町の鞍掛付近のそれは「鞍掛山脈」と呼ばれるほど立派な古砂丘が続いていたという。古砂丘は５万年前に形成されたとされる「埋没河畔砂丘」で、成島町から高根町に至る間にある。市街化されその形状を止めないものもあるが、多々良沼付近の地形図には標高 25m のコンタが廻る地点が数ヶ所あり、地形図にも台地縁辺に列状に続く古砂丘が見て取れる。台地内部の低地は湧水起源によるものであり、台地南側と北東側の浸食が激しい。南側の谷は谷田川筋(旧利根川)に流れ込み、その端部は河川氾濫等で塞がれ、これにより「近藤沼」「茂林寺沼」などの沼地が形成されたという。北東側に刻まれた谷の「多々良沼」や「城沼」も同じ理由で形成されたもので、沼の周辺は湿地となり、昭和 30 年度ころまで「ホリアゲダ」(掘上田)と呼ばれる水田が作られ、長く耕作されてきた。台地の南から利根川の間には、広大な低地帯が広がる。低地帯には微高地が点在、これが自然堤防であることは確実である。専門家の見解では、低地帯は厳密に言えば谷田川によるものというこ



第４図　館林市周辺の地形概念図（館林市史通史編１、図１－４を再トレース）

とであるが、古墳時代には現在の谷田川筋を、奈良時代には明和町の役場付近（明和の旧流路）を旧利根川が流れたとされる。古墳時代以後は利根川が変流するたびに水田化が行われたものと思われるが、この低地帯には台地が深く沈み込んでいるとも指摘されている。

台地北東に広がる低地帯と微高地についても同様で、台地の地形発達は渡良瀬川（矢場川を含む）の変流に深く関係しているものと思われる。台地北東の崖線は判然としないように見えるが、城沼北の当郷町より東の台地の浸食が著しいように見える。こうした相違を的確に説明することはできないが、現象的に言えば当郷町より西は流路（旧矢場川）に近く、当郷町以東では流路までの距離があり、これにより土砂供給量の差が生じたことが原因しているのではないかと考えている。当地の微高地には矢場川流域に羽刈・小曾根・日向・木戸等の集落が、また渡良瀬川流域に早川田・足次・千塚・田谷・大島等の集落があり、いずれも河川流域に点在する自然堤防上に立地している。水田の開発時期が気になるところであるが、当地では水田調査が行われておらず、その実態が不明であることから、集落動向を明らかにすることで低地帯開発の理解が深まるだろうことを期待している。

本遺跡は館林市の南東、上三林580-1番地ほかにあり、邑楽町に近い市の南西部にある。地形的には邑楽台地の南縁に当たり、東西に延びる低平な台地に立地する。集落を載せる台地は平坦で東西に延び、台地北側には近藤川が谷を刻み、南側には旧利根川による広大な沖積低地が広がっている。遺跡北の低地を仔細に見ると、その谷頭は近藤沼から約１㎞西の旧赤堀村（現在の館林市赤堀）にあり、これに支谷が樹枝状に入り込んでいる。明治期の迅速測図には近藤沼周辺に「掘上田」が図示されているように、湿地だが水田として利用されていた。これに対して、南側低地は旧利根川の離水後はじめて可耕地となり水田化された地区である。現在は整然と水田が区画整備されているが、以前は旧流路の痕跡が明瞭に残されていた。

上三林地区周辺には広域に水田が広がり、遠く屋敷林が見える。市街化が進み、屋敷林に囲まれた集落は姿を消してしまったが、いまなおそうした農村風景の面影が

遺跡周辺には残されている。上三林地区に隣接する野辺地区には、そうした屋敷林に囲まれた古い集落が残されている。

第２節　周辺遺跡

館林市域の遺跡分布は、低平な台地と沖積低地に分けて説明するのが分かりやすい。農耕集落は水田耕作に最も適した良い所から占地したとされるから、水田域の拡大は灌漑整備と並行して行われたはずで、弥生時代以後の遺跡分布は農業発達史的な観点で分析されなければならない。同様に、旧石器・縄文時代の遺跡分布は食糧資源の観点から分析されなければならないが、発掘調査では、食料採集地を遺構として確認できないため具体的指摘が難しく、勢い湧水等が立地条件として指摘できる程度だが、館林市域では多々良沼その他の沼地の形成が遺跡立地を考える際の指標になる。すなわち、多々良沼など沼地の形成時期等を踏まえた分析が重要になるということであり、縄文早期末にピークに達した縄文海進および海退に伴う諸現象(湿地形成、台地の浸食)、荒川扇状地形成に伴う利根川の流路変更など多様な環境変動要素が検討課題となる。現状では将来的な課題とせざるを得ず、ここでは時代毎に遺跡分布の概要を述べるだけに止めておきたい。

旧石器時代　市域には、旧石器遺跡10ヶ所がある。石器ブロック等を伴う遺跡は少なく、尖頭器類が単独で出土したものが多い。館林市史では多々良沼に続く古砂丘上や城沼など沼地周辺の台地に旧石器遺跡があるということであるが、今後旧石器遺跡が確認される可能性の高い地域が市域東部などに残されている。本遺跡に最も近い旧石器遺跡には北小袋遺跡(15)があり、近藤沼に続く開析谷に臨む台地上に立地する。山上脇遺跡(高根町)や水溜第２地点遺跡(26)は古砂丘上に残された旧石器遺跡であり、いずれも後期旧石器後半期の遺跡である。これまで前半期遺跡は確認できていないが、暗色帯が良好に堆積していることから、前半期遺跡は必ず存在するはずである。

縄文時代　市域には縄文遺跡43ヶ所があり、谷田川に流れ込む開析谷に面した台地上に大部分が集中する。縄文時代大別６区分における遺跡の増減傾向は県内縄文遺跡のそれと大差ないだろうが、大袋Ⅱ遺跡(花山町)では県内縄文遺跡では発見例の少ない早期の「炉穴」が確認されている。早期に限れば県内山麓部の遺跡とは明らかに様相が異なり、どちらかと言えば南関東の様相に近い。縄文海進に伴う貝塚形成を含め地域特性として注意しておきたい。市域の縄文期集落は大袋Ⅱ遺跡(前期)や間堀Ⅰ遺跡(上赤生田町、中期)が城沼や茂林寺沼を望む台地上に立地する。市域には後期遺跡や晩期遺跡は少ないとされるが、多々良沼の下流部には高根町岡野遺跡・屋敷前遺跡(以上岡野町)があり、遺跡は低地部を志向するようになることが指摘されている。邑楽台地北部の低地部は渡良瀬川の影響を受け、台地が深く埋没している可能性がある。遺跡が少ないのは、発掘されていないだけだと捉えるべきかもしれない。

本遺跡では前期土器片が数点出土しただけであるが、本遺跡周辺域には北近藤第一地点遺跡(10)、店遺跡(23)、店東遺跡(24)などの小規模遺跡が点在している。現状では大規模遺跡はないようである。

弥生時代　市域全域でも５遺跡と少ない。いずれも邑楽台地の縁辺にある遺跡だが、同じ邑楽台地上には大泉町の仙谷道祖遺跡や、板倉町の飯野辻遺跡ほかで中期中葉の壺類が出土している。現状で、中期段階から後期へ続く弥生期の遺跡はなく、当地で本格的な農耕社会が到来するのは後期後半で、道満遺跡(赤生田町)があるのみである。

本遺跡周辺では、野辺町小林遺跡(36)や甲子遺跡(35)で後期後半の土器片が出土しているのみである。館林市周辺域は湿地環境が卓越する地域であるため、初期稲作農耕には適さずこのことが遺跡分布にも反映しているのかもしれない。

古墳時代　前期遺跡として、加法師遺跡(加法師町)、大島下悪途遺跡(大島町)、道満遺跡(赤生田町)があり、いずれも市街地東に所在する。中期遺跡として、加法師遺跡、下悪戸遺跡が前代から継続、高根・外和田遺跡(高根町)、八方遺跡(岡野町)がある。後期遺跡は古墳分布と集落分布が重なる傾向にあり、市東部(谷田川流域)や市北部(矢場川流域)の他、城沼周辺に後期古墳が集中する傾向がある。このほか上三林地区(市西部谷田川流域)には上三林古墳(２)があり、近接地区にも菅原神社古墳(５)がある。上三林地区の古墳は群集墳を形成すること

第５図　周辺遺跡　国土地理院の電子地図1:25000「足利南部」「佐野」「妻沼」「館林」（平成30年8月7日調整）使用

第１表　周辺遺跡一覧表

№.	遺構名	所在地	時代	種別	備考	文献
1	台遺跡	上三林町	古墳～中世	包蔵地	竪穴建物５軒、掘立柱建物２棟、土坑、井戸４基、溝18条、ピット	本報告書
2	上三林古墳	上三林町字台	古墳	墳墓	遺構なし 陶磁器片、土器片	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』2008　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集
3	三林城跡	上三林町	中世	城館址	伝承地、土塁・館濠有	館林市教育委員会『館林市の遺跡』1987　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
4	小曽根遺跡	上三林町	平安	包蔵地		館林市教育委員会『館林市の遺跡』1987　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
5	菅原神社古墳	入ケ谷町	古墳	墳墓		館林市教育委員会『館林市の遺跡』1987　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
6	稲荷前遺跡	下三林町	平安	包蔵地		館林市教育委員会『館林市の遺跡』1987　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
7	苗木遺跡	青柳町苗木・西苗木	古墳・平安	包蔵地		館林市教育委員会『館林市の遺跡』1987　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
8	萩原遺跡	苗木町字中島	縄文・平安	散布地	土坑４基、不明遺構３基、溝(近世、陶磁器)	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』2011　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第48集
9	苗木西遺跡	青柳町西苗木	平安	包蔵地		館林市教育委員会『館林市の遺跡』1987　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
10	北近藤第一地点遺跡	苗木町字北近藤	縄文・古墳・平安	集落跡	竪穴建物(古墳時代88軒、平安時代１軒)、土坑、掘立柱建物２棟、円形周溝遺構１基、鍛冶遺構１基、井戸４基	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』1998、2003、2005　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集・第32集・第38集
11	南近藤遺跡	苗木町字南近藤	古墳・平安	集落跡	竪穴建物４軒、井戸１基、土坑１基	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』1988　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
12	三軒屋遺跡	赤堀町字三軒屋	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
13	北近藤第二地点遺跡	苗木町	時代不明	散布地	土坑11基、溝２条、建物跡遺構１ケ所、井戸１基	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』2014　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第52集
14	伝右エ門遺跡	近藤町字伝右エ門	平安	集落址	竪穴建物(古墳中期) 平安土師器	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』1999　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
15	北小袋遺跡	近藤町字北小袋	旧石器・縄文	散布地・包蔵地	土坑(６基、時代不明５基)、石器・縄文土器、土師器	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』2008、2016、2017　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集・第54集・第55集
16	松沼町遺跡	松沼町	縄文～中世	生産址	炭焼窯跡９基 縄文土器片、磨石	館林市教育委員会『松沼町遺跡発掘調査報告書』2005　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集
17	鶉小城	鶉新田町字内小城	戦国	城館跡	弥生式土器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1988
18	内之原遺跡	鶉新田町字内ノ原	古墳	包蔵地	竪穴建物 土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1988
19	子々五遺跡	鵜新田町字内ノ原	縄文	包蔵地	縄文早期撚糸文土器片	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1988
20	早師前遺跡	光善寺字早師	縄文	包蔵地	縄文剥片、土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1988
21	横町古墳	中野町字横町	古墳	古墳	竹岸家墓地	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1988
22	前原遺跡	中野町字前原	縄文・古墳	包蔵地	縄文中期土器片、土錘、剥片、石田川式土器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1988
23	店遺跡	狸塚町字店	縄文	包蔵地	縄文早期、前期土器片、土師器、板碑片	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
24	店東遺跡	狸塚町字店	縄文・古墳	包蔵地	縄文中期土器片、土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
25	江原遺跡	狸塚町字江原	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
26	水溜第２地点遺跡	成島町	旧石器	散布地	ナイフ形石器・尖頭器他	館林市史編さん委員会『館林の原始古代・中世』2015　館林市史通史編１
27	中山遺跡	赤堀町字中山	縄文・古墳	包蔵地	大部分削平されている	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
28	目車遺跡	赤堀町字目車	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
29	宿遺跡	赤堀町字宿・中山	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
30	高源寺前遺跡	狸塚町字高原	古墳・平安	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
31	高原遺跡	狸塚町字高原	縄文・古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
32	宿東遺跡	赤堀町字宿	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
33	近藤遺跡	赤堀町字近藤	縄文・古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
34	古家遺跡	赤堀町字古家	古墳	包蔵地	土師器	邑楽町教育委員会『邑楽町の遺跡』1989
35	申子遺跡	野辺町字申子	縄文・古墳・平安	散布地	土坑１基 土師器甕片	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』2000　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集
36	小林遺跡	野辺町字申子	古墳・奈良・平安	包蔵地	竪穴建物(古墳時代１軒)	館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』2008　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集
37	東山遺跡	野辺町	平安	包蔵地		館林市教育委員会『館林市の遺跡』1987　館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

はなさそうであるが、古墳と集落は近接分布するものとみられる。

平安時代　館林市史には、谷田川流域の平安期遺跡は小規模(竪穴建物数棟からなる)であり、大規模集落は影を潜め、北近藤第一地点遺跡(10)でさえもわずか１棟しか確認されないという。一方、市の遺跡分布調査では台地を刻む谷筋に点々と平安期遺跡が分布することが確認されており、狭小な耕地に制約された結果、小規模遺跡が点在することになったものと理解されている。

平安期遺跡の分布傾向を説明するには台地を部分的に切り取り、遺跡分布を図示するだけでは充分ではなく、より広域に図示すべきなのはあらためて指摘するまでもない。第５図は近藤沼周辺(南北６km・東西４km)の遺跡分布を図示したものであるが、近藤川の上流域には古墳時代の包蔵地(旧赤堀村の集落)があるのに対して、近藤沼の周辺域には北近藤第一地点遺跡(10)、南近藤遺跡(11)、苗木遺跡(７)、苗木西遺跡(９)があり、古墳時代から続く北近藤第一地点遺跡以外は平安期遺跡であり、いずれも小規模遺跡である。こうした傾向は全域で見られるというのが、平安期遺跡分布の実態である。

中・近世　調査済み遺跡の出土遺物を見直した結果、35遺跡で中世遺物が確認されたという。館林市史には中世城館跡20ヶ所、集落遺跡９ヶ所が掲載されている。近世遺跡については館林城関連の調査成果が掲載されているが、近世村落の調査例は掲載されていないようである。本遺跡周辺には、中世城館跡として三林城(３)や鶉小城(17)があり、中世館林城に継ぐ規模の青柳城(青柳町)がある。集落遺跡として北近藤第二地点遺跡(13)や萩原遺跡(８)がある。

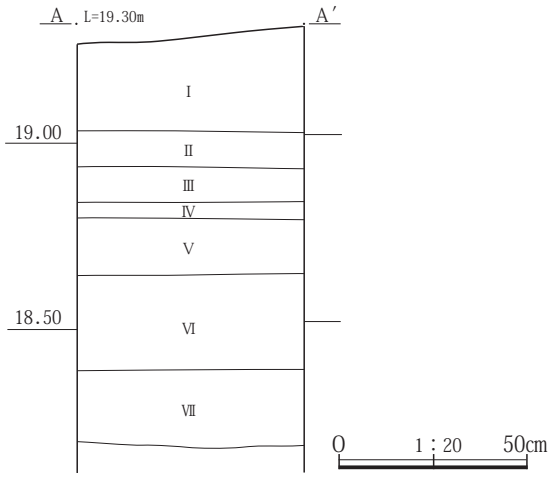
文献では、当地域には古代郷里４郷(「長柄郷」「池田郷」「八田郷」「疋田郷」)が知られ、続いて平安末の荘園成立(佐貫荘ほか)があり、荘園の形骸化とともに地域再編が進み、ついには戦国期に突入することが知られている。考古学的には、農耕集落や水田(生産域)の実態を明らかにするのが課題ということになるだろうが、土器編年網確立と用水網整備の実態把握などが重要になるものと思われる。

第３節　基本土層

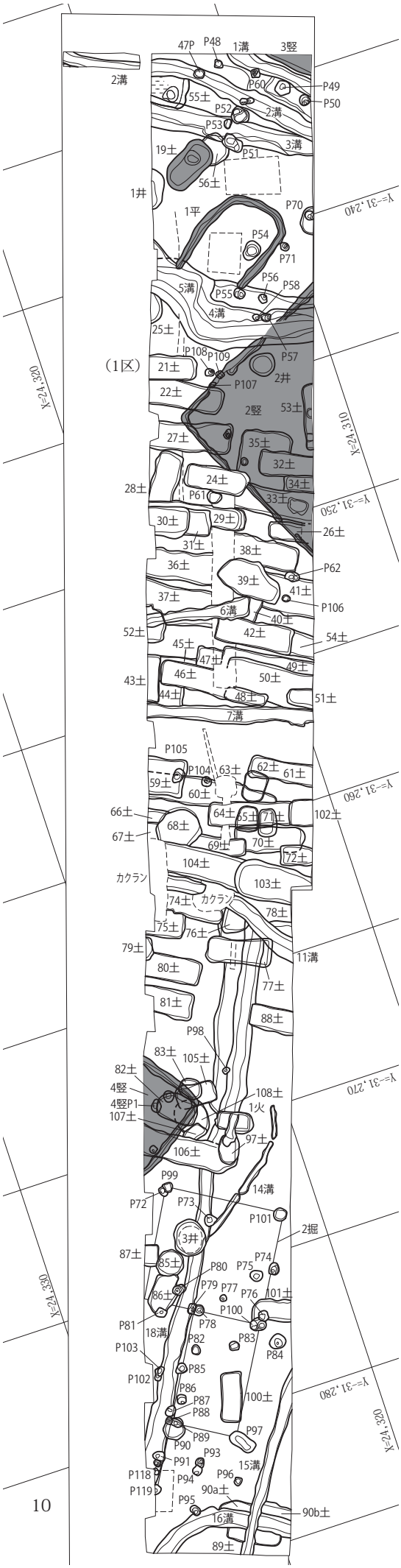
本遺跡の調査地点は校舎周辺に７ヶ所(１～７区)があり、各地点で基本土層が作成されているが、ほぼ同様な堆積状況を示してした。

Ⅰ層　山砂
Ⅱ層　旧表土
Ⅲ層　灰褐色土(炭化物少量を含む。転圧され締まる。)
Ⅳ層　くすんだ灰褐色土(炭化物少量を含む)
Ⅴ層　暗褐色土(炭化物少量を含む)
Ⅵ層　よごれた褐色土(いわゆるローム漸移層に相当)
Ⅶ層　黄色ローム

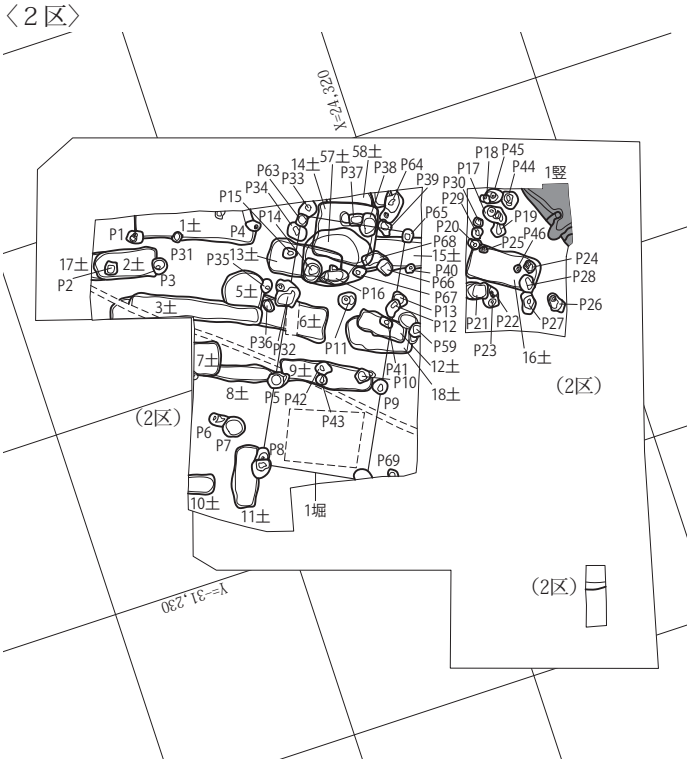
Ⅰ層はグランド整備に伴い砂を入れ替えたもので、Ⅱ層以下は転圧され、硬化している。Ⅲ層は灰色を帯びる。炭化物を含んでいるが、多分に河川氾濫に起源する氾濫堆積物である可能性が高い。Ⅳ・Ⅴ層は同質だが、やや色調差がある。Ⅵ層は「ローム漸移層」に相当する土壌で、古墳時代から中近世の遺構確認面であった。Ⅶ層以下はローム層に移行する。通常、東毛域では中部ローム以上のローム層が堆積、邑楽台地上に立地する本遺跡も同様の堆積状況にあることが確実だが水位が高く、ローム層の堆積状況についてはその全貌が把握できていない。



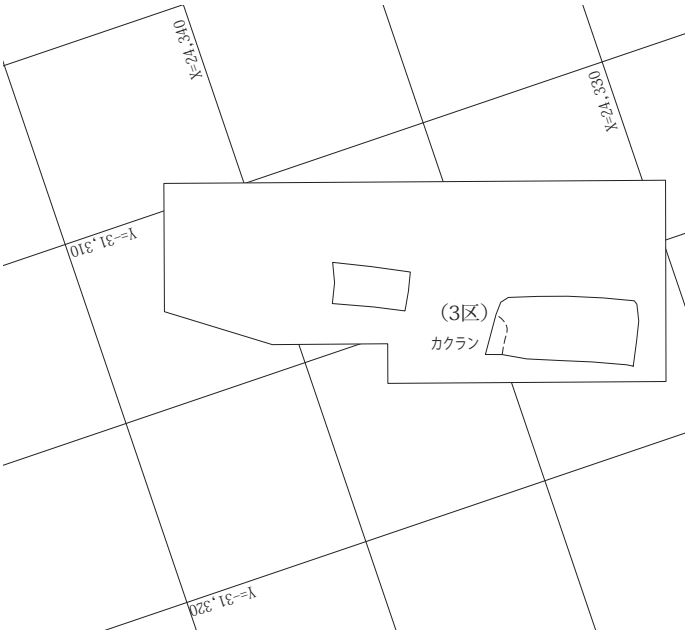
第６図　遺跡の基本土層図



〈2区〉

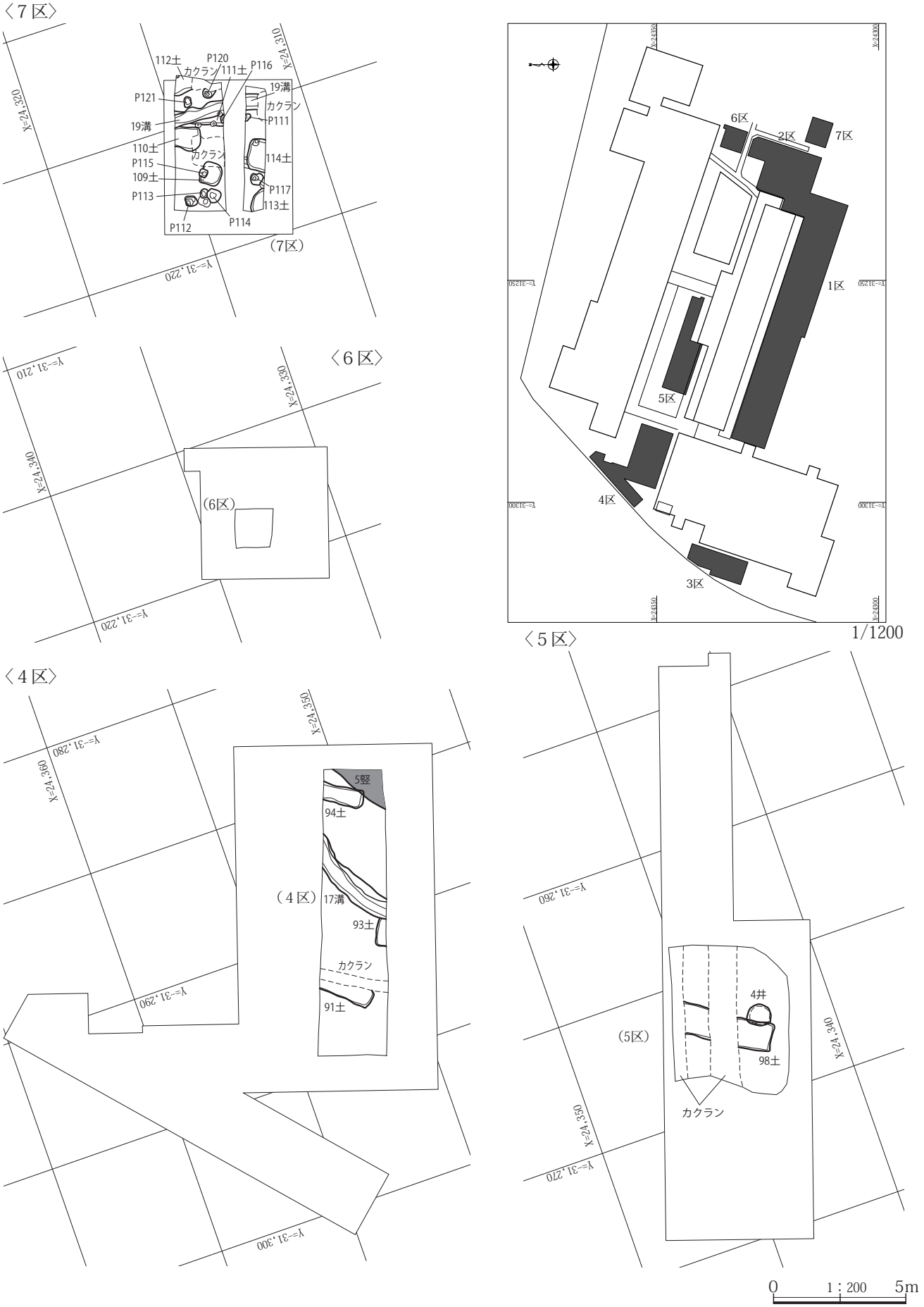


〈3区〉



0　1：200　5m

第７図　遺構配置図（１）


〈７区〉
112土
P120
カクラン
111土
P116
19溝
カクラン
P111
P121
19溝
110土
カクラン
P115
109土
P113
114土
P117
113土
P112
P114
（7区）
X=24,310
X=24,320
Y=-31,220
〈６区〉
（6区）
X=24,330
X=24,340
Y=-31,210
Y=-31,220
〈４区〉
（４区）
5竪
94土
17溝
93土
カクラン
91土
X=24,350
X=24,360
Y=-31,280
Y=-31,290
Y=-31,300
〈５区〉
（5区）
4井
98土
カクラン
X=24,340
X=24,350
Y=-31,260
Y=-31,270
6区
2区
7区
1区
5区
4区
3区
X=24300
Y=-31250
Y=-31300
1/1200
0
1：200
5m

第８図　遺構配置図（２）

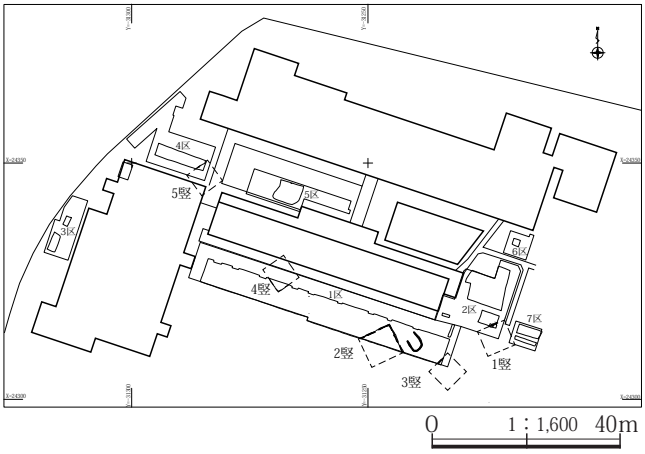
第３章　検出された遺構と遺物

本遺跡は東西に長い台地上にあり、台地南側に広がる低地部に臨んで立地する。市の遺跡分布図には県道85号線(熊谷館林線)北までが台遺跡として括られており、これに隣接して東側に上三林古墳があるというのが、本遺跡を含む周辺遺跡分布の概要である。調査地点は既設建物の周辺７地点に及び、うち３地点(１・２・４区)から古墳時代後期の竪穴建物が確認されたほか、各地点から中・近世の遺構が多数確認されている。

第１節　古墳時代

１．概要

本遺跡では古墳時代後期の竪穴建物５棟が確認されたほか､竪穴建物と軸を同じくする溝(平地建物周溝)１条、土坑１基が確認されている。敷地内の試掘調査のみ行われた地点でも竪穴建物数棟が確認されており、また、平成21年度に行われた県立高等特別支援学校用地内試掘調査でも同時期の竪穴建物２棟が確認されていることから、集落域は県道南の遺跡全域に散漫に広がるものと思われる。



第９図　古墳時代の遺構分布(建物推定プラン)

２．竪穴建物

竪穴建物は５棟がある。１区に３棟が、２・４区に各１棟があり､それぞれ重複することなく確認されている。いずれも６世紀代の竪穴建物と見られる。出土遺物には平安期土器片も散見されるだけであるが、市域の平安期集落については点在傾向が著しく、調査対象地外の台地縁辺に単独分布する可能性も否定できない。

１号竪穴建物(第10～12図、PL．４・16・17)

位　置　２区(X=315－Y=-222)　**主軸方位**　Ｎ－35°－Ｗ

形　状　略方形と推定

規　模　北壁側(1.95m)　　**重　複**　なし

埋没土　炭化物を含む黒色土で埋没

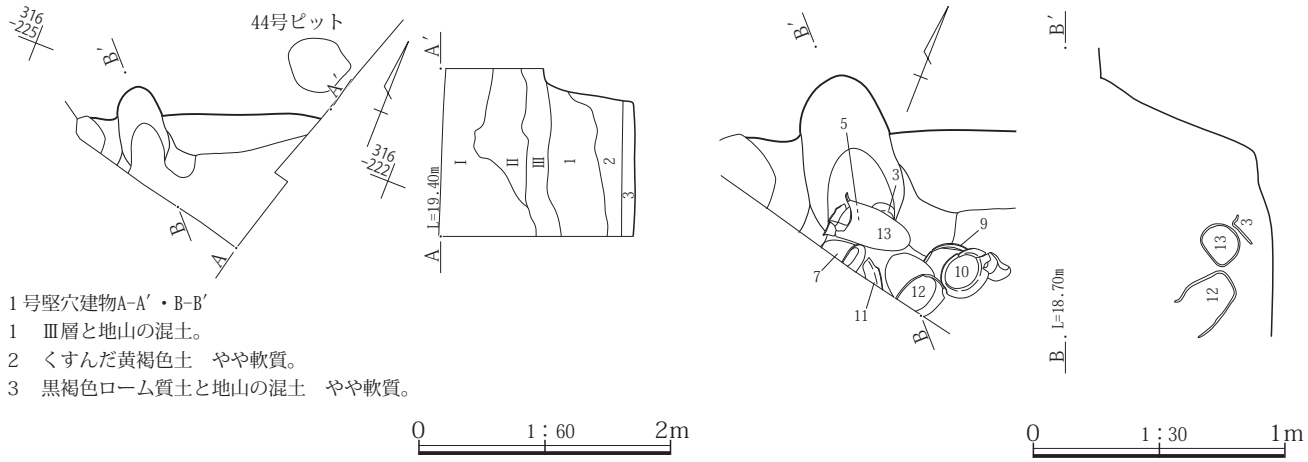
カマド　北壁に構築されていた。燃焼部を竪穴内に持ち、煙道は急な傾斜で立ち上がる。カマドの規模は確認長0.77mで、燃焼部長0.47mを測る。焚口幅は左袖が調査区外に延びているが、0.60mほどと見られる。高杯(第11図５)が逆位に出土、支脚として使用されていた。杯部には混じり気のない灰が詰まり、調査所見にもあるように、カマド内には厚く灰層が形成されていたものとみられる。出水が激しく、袖構造や細かな遺物の出土状況についての記録が残されていないが、カマドはローム土を貼付け構築されていた。

柱　穴　未確認

遺物の出土状況　カマド内および周辺から甕８個体・高杯１個体・杯３個体、覆土中から鉢１個体が出土した。いずれも崩落したカマド構築材より下位に出土しており、カマド芯材として使われた可能性や、カマドに据付け使われた可能性などがあるが、逆位や連結状態で出土したものがなくカマド芯材としての可能性については否定的にならざるを得ない。器壁外面が被熱剥落したものが５個体あり、据付け甕としても数が多過ぎる。

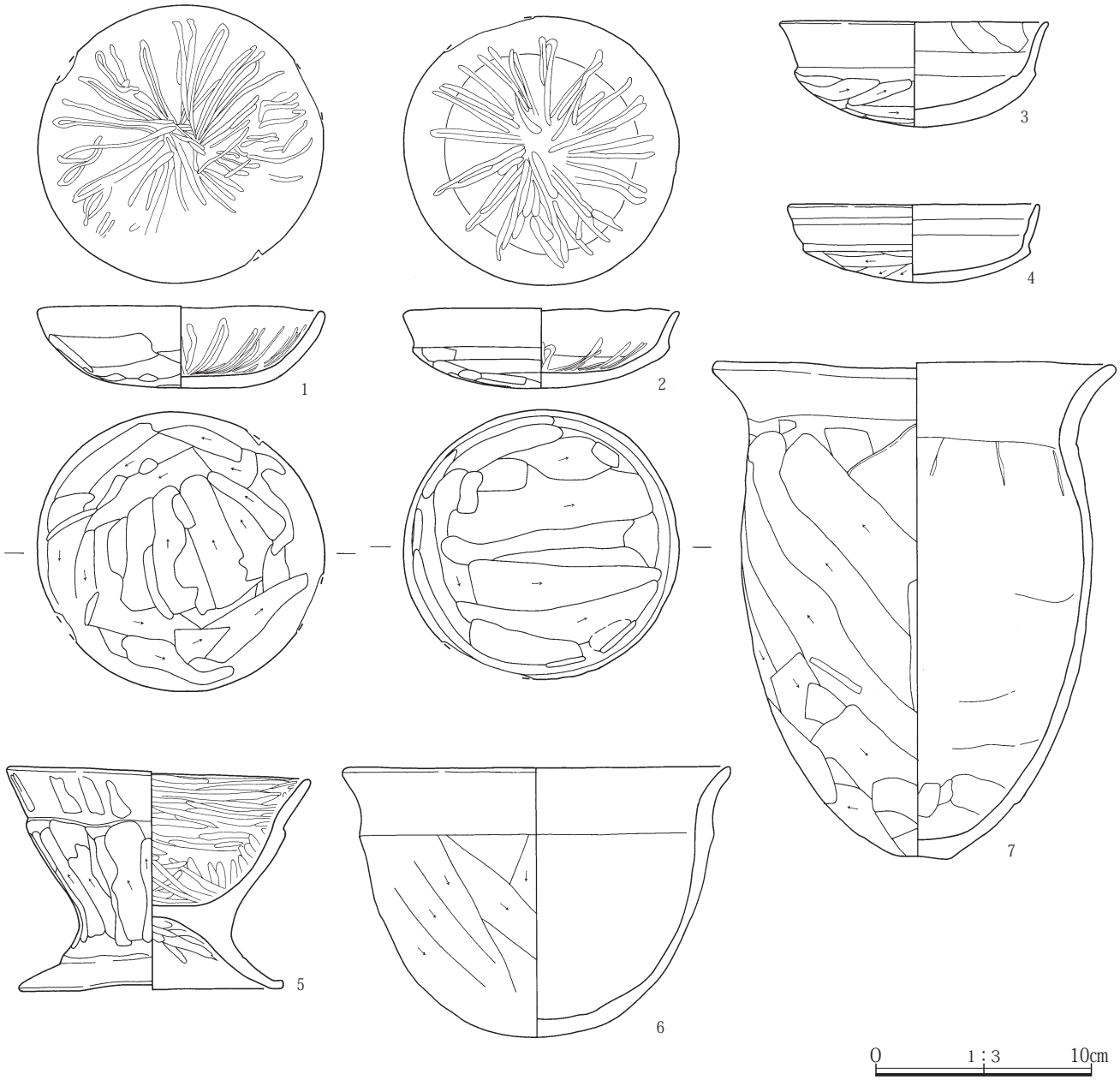
一般的に、カマドは建物廃絶時に破壊されることが通例で、本建物のカマドも破壊されたのは確実だが、単に甕を掛けたままでカマドを破壊したということではないように思える。カマド脇に置かれていた甕類が同時に破壊されたという可能性も想定しておきたい。

所　見　出土遺物からみて、６世紀後半の竪穴建物と見られる。出水が激しく調査区も狭小で、遺物の出土状態を確認図化できるような状況にはなく、掘り方の調査もできていない。高杯は燃焼部に逆位に伏され、長甕を脚

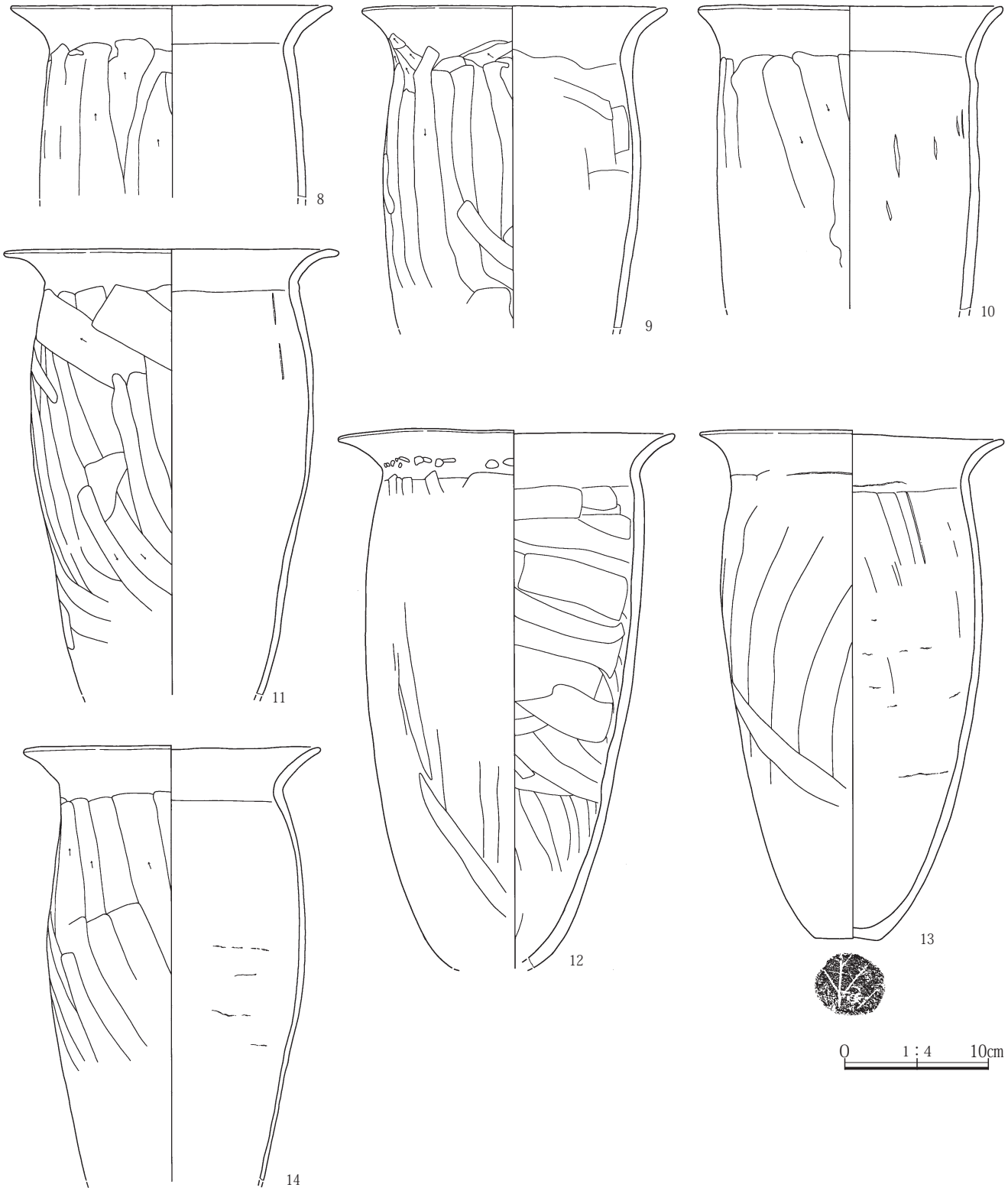


１号竪穴建物A-A′・B-B′
1　Ⅲ層と地山の混土。
2　くすんだ黄褐色土　やや軟質。
3　黒褐色ローム質土と地山の混土　やや軟質。

第10図　１号竪穴建物



第11図　１号竪穴建物出土遺物（１）



第12図　１号竪穴建物出土遺物（２）

部で受けたものと見られる。杯部内部に充填された灰を半截したところ、焼土・炭化物等を含まない純粋な灰であることが判明した。

２号竪穴建物(第13・14図、PL．４・５・17)

位　置　１区(X=309－Y=-242)　　**主軸方位**　不明

形　状　略方形

規　模　北壁側(6.9m)・東壁側(6.8m)

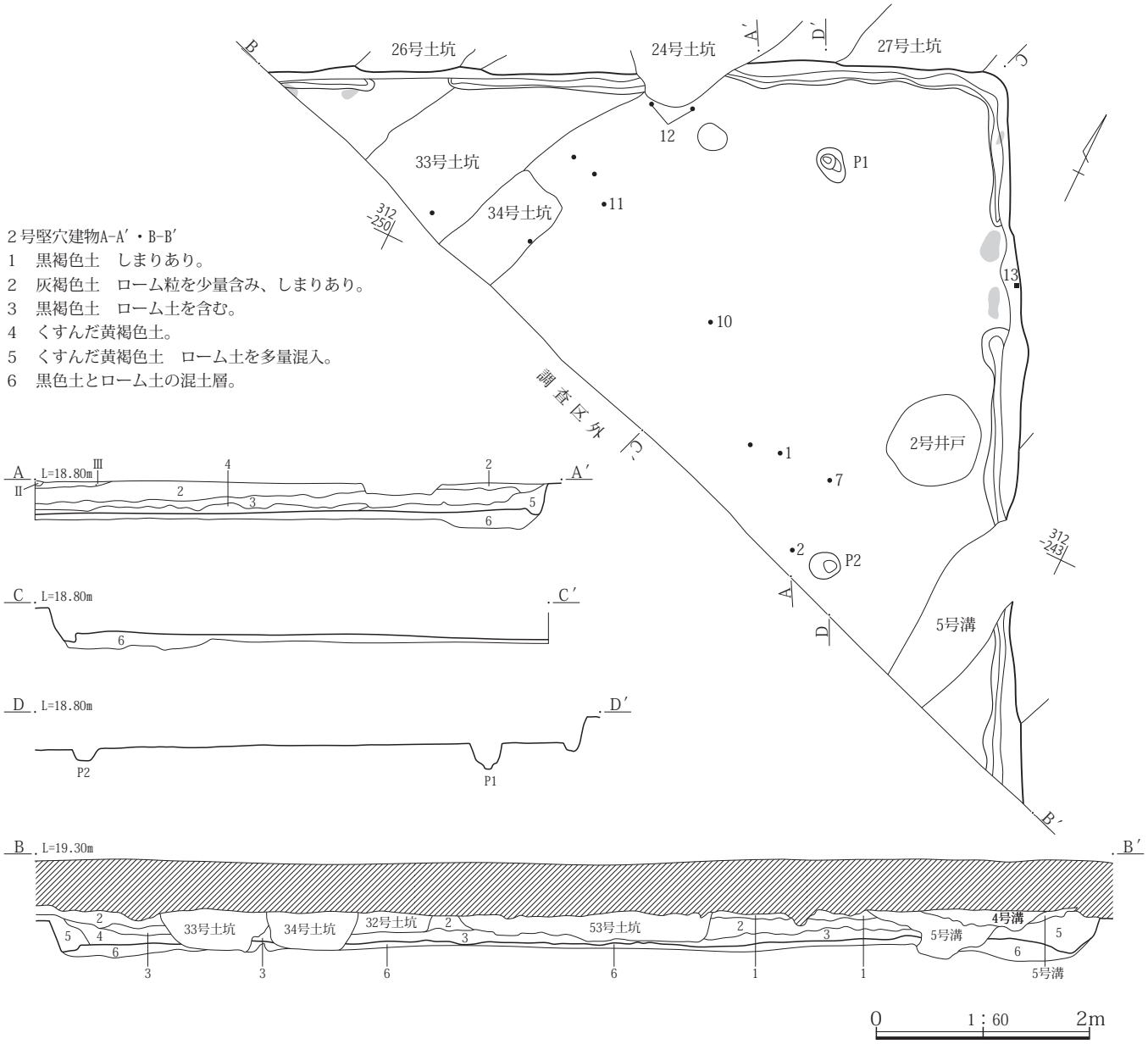
重　複　23・24・26・27・32～34号土坑、４・５号溝と重複

埋没土　ローム土を含む黒色土で埋没

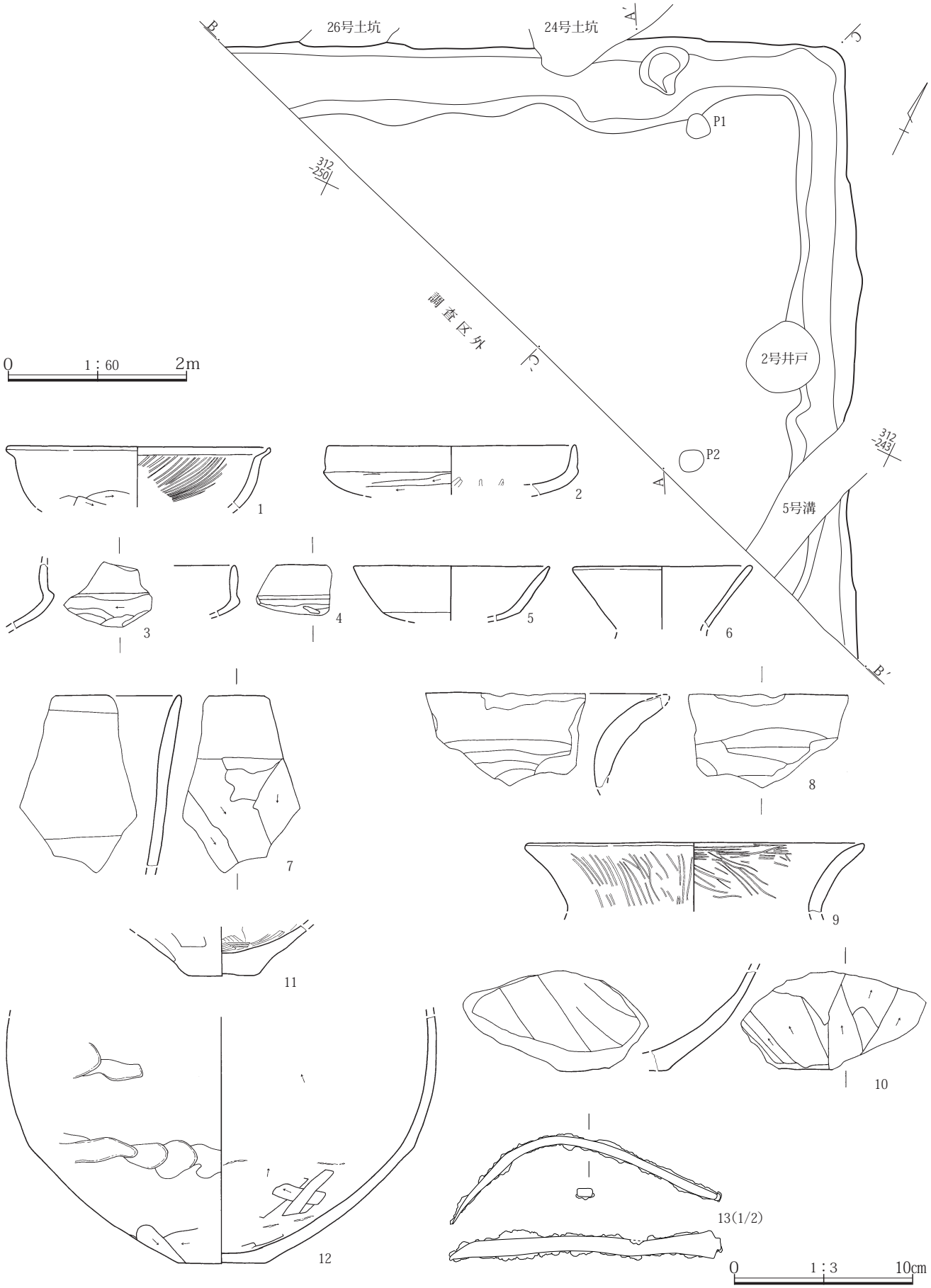
カマド　未確認

柱　穴　２ヶ所で柱穴を確認した。Ｐ１(長径34cm・短径24cm・深さ25cm)は床面精査段階で、Ｐ２(長径30cm・深さ12cm)は掘り方調査の段階で確認されたものである。Ｐ１が壁際に寄り過ぎることや、一辺７m規模の建物の柱穴としては浅過ぎるように見える。コーナー対角線上に柱穴が位置するのが通例だが、いずれの柱穴も対角線上から外れている。

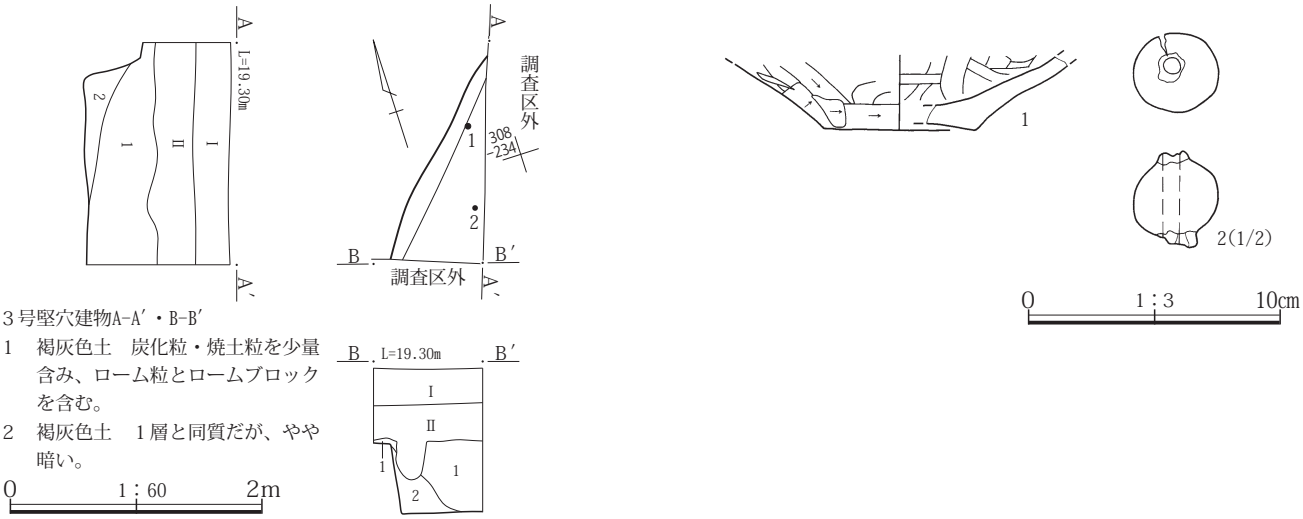
壁際溝　北壁および東壁に確認され、幅８～18cm、深さ２～９cmを測る。途中、壁際溝は途切れる部分があり、



第13図　２号竪穴建物(１)



第14図　２号竪穴建物（２）と出土遺物

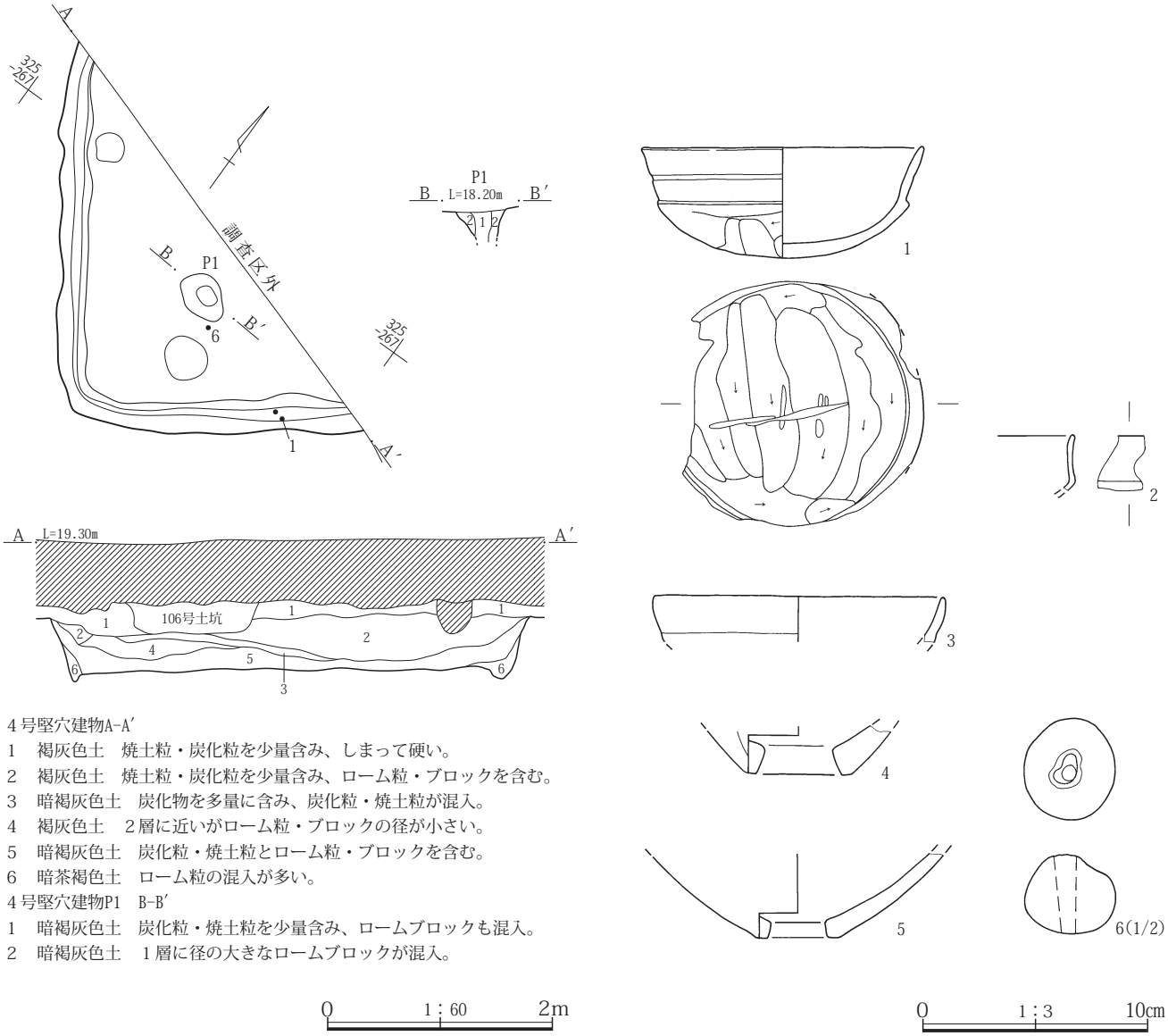


３号竪穴建物A-A′・B-B′

1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量含み、ローム粒とロームブロックを含む。

2　褐灰色土　１層と同質だが、やや暗い。

第15図　３号竪穴建物と出土遺物



４号竪穴建物A-A′

1　褐灰色土　焼土粒・炭化粒を少量含み、しまって硬い。

2　褐灰色土　焼土粒・炭化粒を少量含み、ローム粒・ブロックを含む。

3　暗褐灰色土　炭化物を多量に含み、炭化粒・焼土粒が混入。

4　褐灰色土　２層に近いがローム粒・ブロックの径が小さい。

5　暗褐灰色土　炭化粒・焼土粒とローム粒・ブロックを含む。

6　暗茶褐色土　ローム粒の混入が多い。

４号竪穴建物P1　B-B′

1　暗褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量含み、ロームブロックも混入。

2　暗褐灰色土　１層に径の大きなロームブロックが混入。

第16図　４号竪穴建物と出土遺物

北壁で70cm・東壁で94cmの間隔を空ける。

掘り方　壁際の幅１m弱を周溝状に掘り下げる。中央部を掘り残すタイプ。

遺物の出土状況　杯５・坩１・鉢１・壺１・甕４個体の他、鉄製品１が出土した。鉄製品(第14図13)は本建物の出土遺物として扱われているが、その出土位置は109号ピットに重なり、出土標高もピット底面より高い位置で出土していることから、後世の鉄製品が混入したものだろうと考えている。内斜口縁の杯(第14図１)以外、いずれも小片で覆土中の出土である。

所　見　出土土器からみて６世紀前半の竪穴建物とすることができる。内斜口縁の杯は古手で、これに模倣杯が伴出した。甕は長胴甕でなく、胴部が大きく張るタイプである。

３号竪穴建物(第15図、PL.17)

位　置　２区(X=307－Y=-234)　　**主軸方位**　不明

形　状　略方形と推定

規　模　北壁側(1.78m)・南壁側(2.58m)

重　複　なし

埋没土　少量の焼土粒・炭化物を含む灰褐色土で埋没

カマド　未確認　　**柱　穴**　未確認

遺物の出土状況　甕１・玉型土錘１が出土した。いずれも床面から30cmほど浮いた状態で出土している。

所　見　出土遺物からみて、６世紀後半の竪穴建物と見られる。大部分が調査区の外に広がるため詳細は明らかでないが、建物の軸方向は１・２号建物に比べ若干だが西に振れるものとみられる。

４号竪穴建物(第16図、PL．５・６・17)

位　置　２区(X=322－Y=-266)　**主軸方位**　不明

形　状　略方形と推定　　**規　模**　西壁側(3.25m)

重　複　82・83・105・106・108号土坑に重複

埋没土　炭化物を含む黒色土を挟み、ローム土を多量に含む灰暗褐色土で埋没する。

カマド　未確認　　**柱　穴**　建物南西で柱穴を確認した。Ｐ１は建物対角線上にあり、長径47cm・短径35cm・深さ24cmを測る。

遺物の出土状況　杯３個体・甑２個体の他、玉型土錘１が出土している。６点中４点は覆土中の出土で、残る２点も床面から20cmほど浮いた状態で出土した。

所　見　出土遺物からみて、６世紀後半の竪穴建物と見られる。埋土にはローム土が多量に含まれることから、人為的埋土と見られる。柱穴は浅く、柱を支えるには十分でないように思われるが、水位が高く柱穴底面まで完掘できていない可能性がある。

５号竪穴建物(第８図)

位　置　４区(X=348－Y=-284)　**主軸方位**　不明

形　状　略方形と推定　　**規　模**　北壁側(2.48m)

重　複　94号土坑に重複

所　見　４区南東隅にある。遺構を平面確認したのち掘り下げたところ、出水に伴う壁崩壊があり、また、調査区境に下水管等が埋設され、調査区の拡張も難しく途中調査を断念した。このため、土層図の作成等はできず、平面プランのみ図示できるだけである。出土遺物は得られていないが、調査所見にも古墳時の竪穴建物だろうとする所見があり、覆土や建物の軸方向から古墳時代後期の竪穴建物と判断した。

３．平地建物

平地建物は１棟が確認されている。発掘時に９号溝とされたものがそれであるが、整理作業を進めるなかで遺構の主体を占める中・近世遺構とは明らかに軸方向が異なり、むしろその軸方向は古墳時代竪穴建物の軸方向に一致することから、確証を得るまでには至ってないが、平地建物として認定した次第である。平地建物とした遺構は２号竪穴建物の北1.5mにあり、建物西を溝(中世末から近世初頭)に切られた状態で確認されている。竪穴建物の周堤幅を考えてなお、平地建物を建てるだけの空間は確保できたものと考えている。

１号平地建物(第17図、PL．６)

位　置　１区(X=310－Y=-238)　**主軸方位**　Ｎ－34°－Ｗ

形　状　略長方形と推定

規　模　長軸(3.48m)・短軸(2.12m)

壁際溝　幅20～35cm・深さ４～20cm(平均13.5cm)を測る。溝内の柱穴は見られない。

重　複　４・５号溝に重複

埋没土　炭化物・焼土粒を含む褐灰色土で埋没する。

遺物の出土状況　覆土中より土師器小片５点が出土した。

所　見　調査段階で９号溝としたものであるが、遺構の軸方向が中・近世遺構のそれとは明らかに異なり、古墳

時代竪穴建物と同軸であることや遺構覆土の遺物に中・近世遺物がないことから、古墳時代遺構として認定した。建物は建物西側を４・５号溝に切られているため、遺構規模は明らかではないが、壁際溝が全周するとして、最大でも長軸５mは超えないものと見られる。壁際溝が全周するタイプの平地建物で、長方形状を呈する竪穴建物としては中程度の大きさとなろう。

４．土坑

土坑１基を確認している。調査所見として、古代の墓坑ではないかとする所見が残されていたため、整理作業を進め出土遺物を検討したところ、古墳時代後期の高杯脚部(第18図1)であることが判明、加えて遺構の軸方向も古墳時代竪穴建物や平地建物の軸方向と概ね一致したことから、土坑として認定したものである。

なお、土坑番号についてはデジタル写真や遺物注記に混乱が生じないよう、当初の番号を変えず用いることとした。

19号土坑(第18図、PL．６)

位　置　１区(X=311－Y=-236)　**長軸方位**　N－35°－W

形　状　略隅丸長方形状

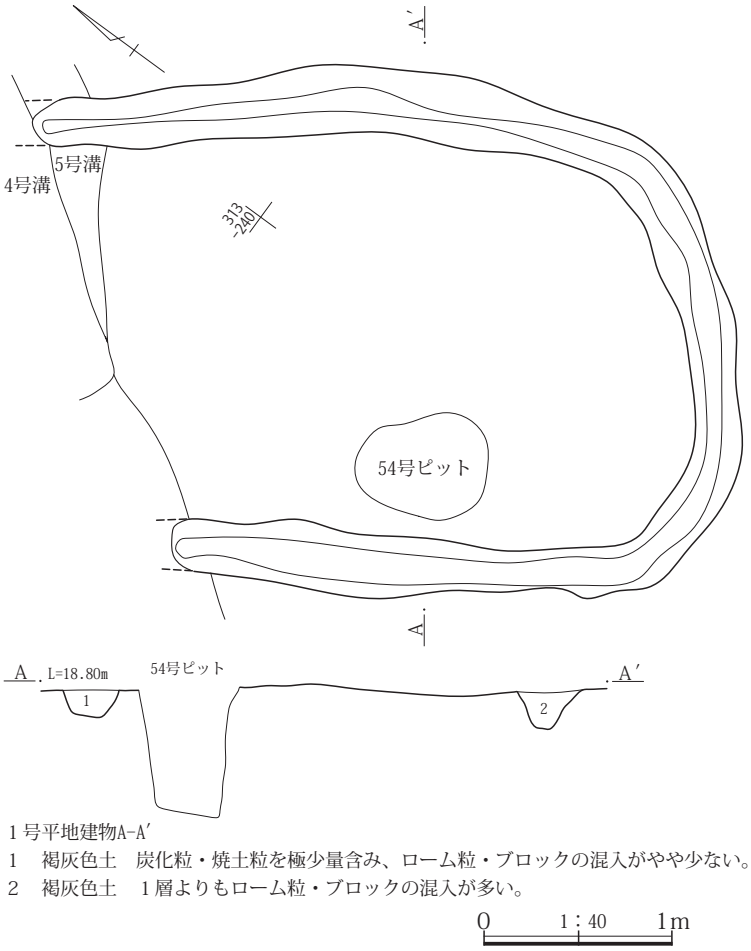
規　模　長軸(1.96m)・短軸(1.06m)・深さ0.28m

重　複　56号土坑と重複

埋没土　ローム粒子を含む黒褐色土と褐灰色土の混土で埋める。人為的埋没土の可能性がある。

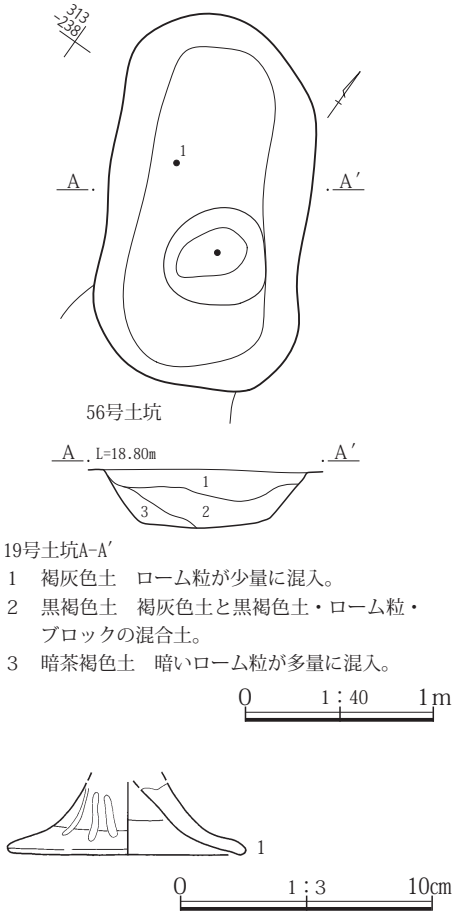
遺物の出土状況　覆土上層より高杯脚部ほか１点が出土した。

所　見　出土遺物や土坑の軸方向からみて、竪穴建物・平地建物と同時期の土坑と考えた。土坑は円形土坑(56号)と重複関係にあり、その新旧関係が問題となる。現地では最初19号土坑を掘り上げ、次いで56号土坑を調査しているが、新旧関係を示すデータが得られておらず、縄文時代土坑等も確認されていないことから、新旧逆に調査してしまっている可能性も否定できない。坑底には浅いピット状の窪み(径25cm・深さ10cm前後)がある。覆土中より高杯脚部(第18図１)が出土した。



１号平地建物A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒・ブロックの混入がやや少ない。
2　褐灰色土　１層よりもローム粒・ブロックの混入が多い。

第17図　１号平地建物



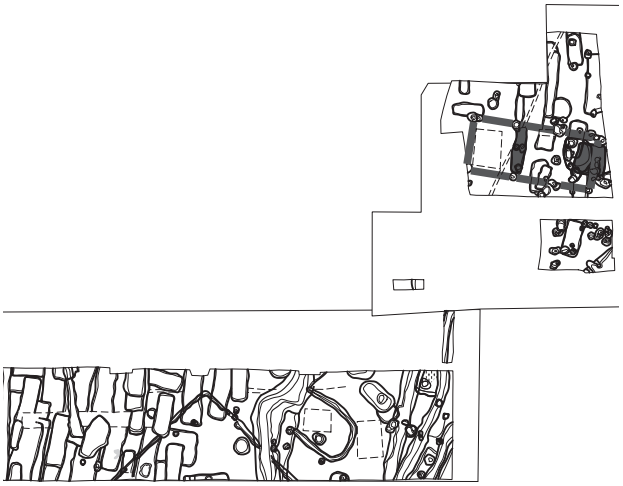
19号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒が少量に混入。
2　黒褐色土　褐灰色土と黒褐色土・ローム粒・ブロックの混合土。
3　暗茶褐色土　暗いローム粒が多量に混入。

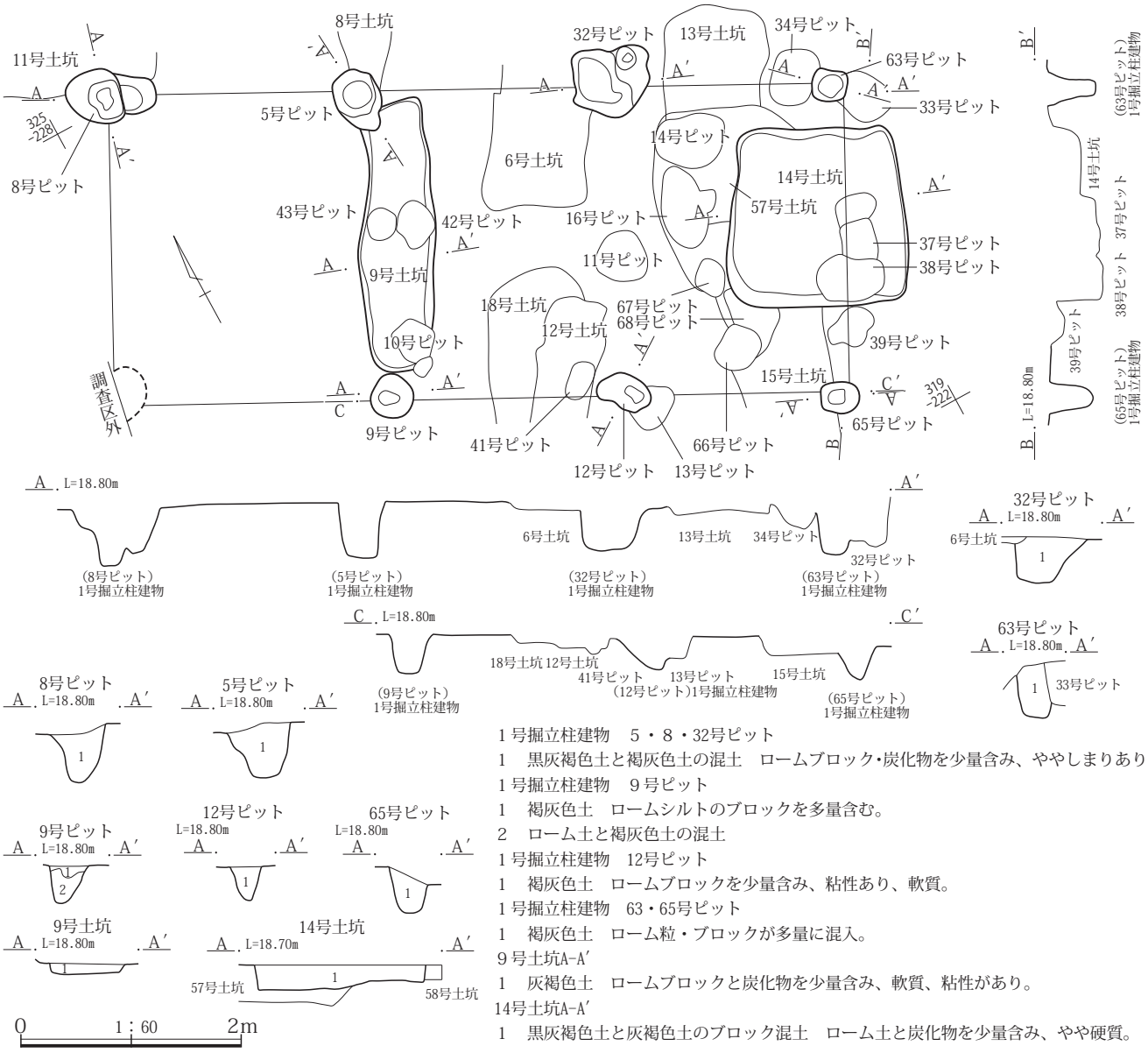
第18図　19号土坑と出土遺物

第２節　中世および近世

1. 概要

中・近世の遺構は、３区を除く各調査区で確認されている。確認された遺構には掘立柱建物２棟・火葬土坑１基・井戸４基・溝14条・土坑108基・ピット122基があり、１・２区の遺構密度が濃い。遺跡地は中世「佐貫荘」の荘域にあり、出土遺物にも「建武三年」（1336年）銘の板碑があるように、大半は中世関連の遺構ではないかと想定されていたが、出土遺物は16～17世紀のものが多数を占めることが判明、現状では中世末から近世初期の遺構群として捉えている。





1号掘立柱建物　５・８・32号ピット
1　黒灰褐色土と褐灰色土の混土　ロームブロック･炭化物を少量含み、ややしまりあり。
1号掘立柱建物　９号ピット
1　褐灰色土　ロームシルトのブロックを多量含む。
2　ローム土と褐灰色土の混土
1号掘立柱建物　12号ピット
1　褐灰色土　ロームブロックを少量含み、粘性あり、軟質。
1号掘立柱建物　63・65号ピット
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックが多量に混入。
9号土坑A-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、軟質、粘性があり。
14号土坑A-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土　ローム土と炭化物を少量含み、やや硬質。

第19図　１号掘立柱建物

２．掘立柱建物

２棟が確認されている。調査区が狭く、その全貌が確認されているか不安だが、２棟とも30°ほど東に振れていた。ピット間の切り合い関係は第４表を参照されたい。

１号掘立柱建物(第19図、PL．７)

位　置　２区(X=319－Y=-221)　**主軸方位**　N－62°－W

形　状　長方形状

規　模　３間×１間(桁行6.6m、梁行2.8m)

重　複　北辺２ヶ所と南辺１ヶ所でピット同士が重複するほか、６・12・13・18号土坑と重複する。

施　設　建物内部Ｐ６－Ｐ９梁行方向に長軸2.44m・幅0.70m・深さ0.12mの浅い溝があるほか、建物東に長軸1.61m・短軸1.58m・深さ0.22mの方形土坑がある。いずれも土師器片数点が確認されたのみであり、それがどのような機能を果したのか、明らかにできる手がかかりは得られていない。

所　見　建物柱穴は南辺のＰ９・12・65、北辺のＰ８・５・32・63からなる。建物の南西隅柱穴については確認できていない。南辺では東側Ｐ12－Ｐ65が1.8m、Ｐ９－Ｐ12が2.4m、北辺では西側Ｐ８－Ｐ５が2.4m、Ｐ５－Ｐ32、Ｐ32－Ｐ65が2.1mを測り、南北両辺で異なっている。南北の柱穴間は2.8mを測り、大きく間隔を空けていた。Ｐ９から土師器片２点が出土したのみで、特に遺構の時期を絞り込める遺物は出土していないが、土坑や溝の走行および出土遺物などの状況から中・近世遺構と捉えるのが妥当と思える。

２号掘立柱建物(第20・21図、PL．７)

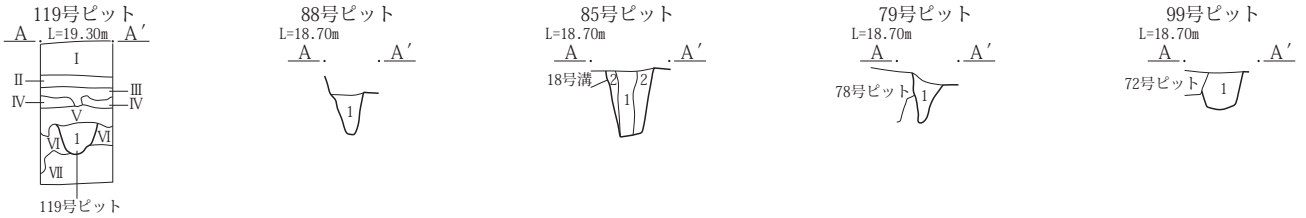
位　置　１区(X=321－Y=-271)　**主軸方位**　N－58°－W

形　状　L字状

規　模　桁行8.2m、梁行4.3m

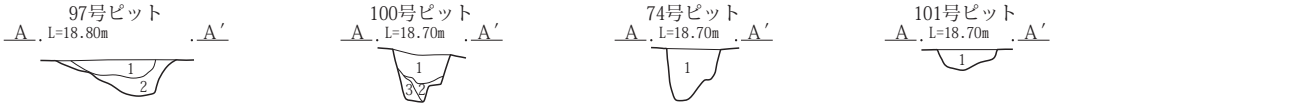
重　複　84～86・100・101号土坑、18号溝と重複

所　見　建物柱穴は、南辺のＰ74・97・100・101、中央のＰ79・85・88、北辺のＰ99からなる。建物の一部柱穴は調査区北に延びる可能性が高く、建物は曲がり屋風になるものと見られる。建物東側部分は桁行方向Ｐ76－Ｐ101間が4.1m(14尺)、梁行方向Ｐ99－Ｐ101間が4.3m(15尺)を測る。建物の東側部分は２間×２間相当であるのに対して、建物西側部分(桁行方向4.1m、梁行方向2.45m)は２間×１間相当になる。なお、建物西側には建物に取り付く柱穴(Ｐ88－Ｐ119間2.5m)がある。目隠し様の塀が取り付いたものと見られる。



２号掘立柱建物　119号ピット
1　暗褐色土　炭化物とローム土を少量含み、しまりあり。
２号掘立柱建物　88号ピット
1　褐灰色土　全面にロームブロックが混入、やや黒色が強い。
２号掘立柱建物　85号ピット
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)が混入。
2　褐灰色土　１層よりローム粒・ブロックの混入が多い。

２号掘立柱建物　79号ピット
1　褐灰色土　炭化粒を極少量とローム粒・ブロックを含む。
２号掘立柱建物　99号ピット
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量と黄褐色土ロームブロックを下部に含み、暗い。

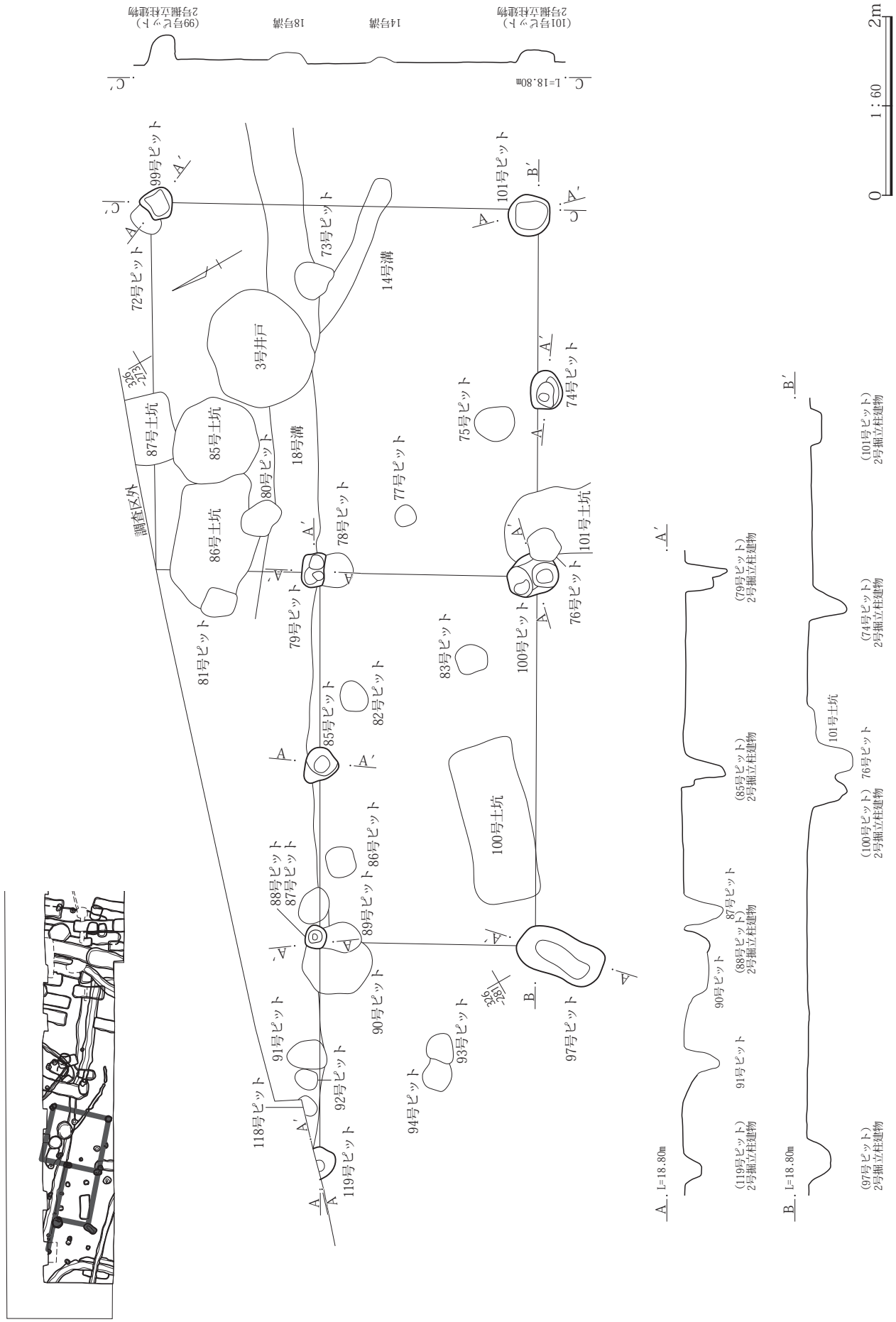


２号掘立柱建物　97号ピット
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量と黄褐色土ロームブロックを下部に含み、黒色土が強い。
2　褐灰色土　ローム粒が少量混入。
２号掘立柱建物　100号ピット
1　褐灰色土　ローム粒・炭化粒を極少量含む。
2　黄褐色土　ローム粒を多量混入。
3　褐灰色土　ローム粒を少量含み、黒色土が強い。

２号掘立柱建物　74号ピット
1　褐灰色土　炭化粒を極少量とローム粒・ブロックを含む。
２号掘立柱建物　101号ピット
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックを含む。

0　1：60　2m

第20図　２号掘立柱建物(１)



第21図　２号掘立柱建物（２）

３．火葬土坑

１基が確認されている。土坑中央に通風機能を高めたとされる浅い溝が取り付くタイプで、やや小型の部類に属す。楢崎(事業団『研究紀要』25、2007年)によるタイプⅡの焼成土坑で、その時点で県内の火葬土坑は170基があるとされた。タイプⅡの平均サイズは長軸1.19m・短軸0.68mで、本遺跡のそれは平均よりひと回り大きいサイズとなる。出土遺物がなく、土坑の構築時期を明らかにすることはできないが、一般に火葬する風習が広まるのは中世以後とされていることから、中世遺構として捉えることとした。

１号火葬土坑(第22・23図、PL．８)

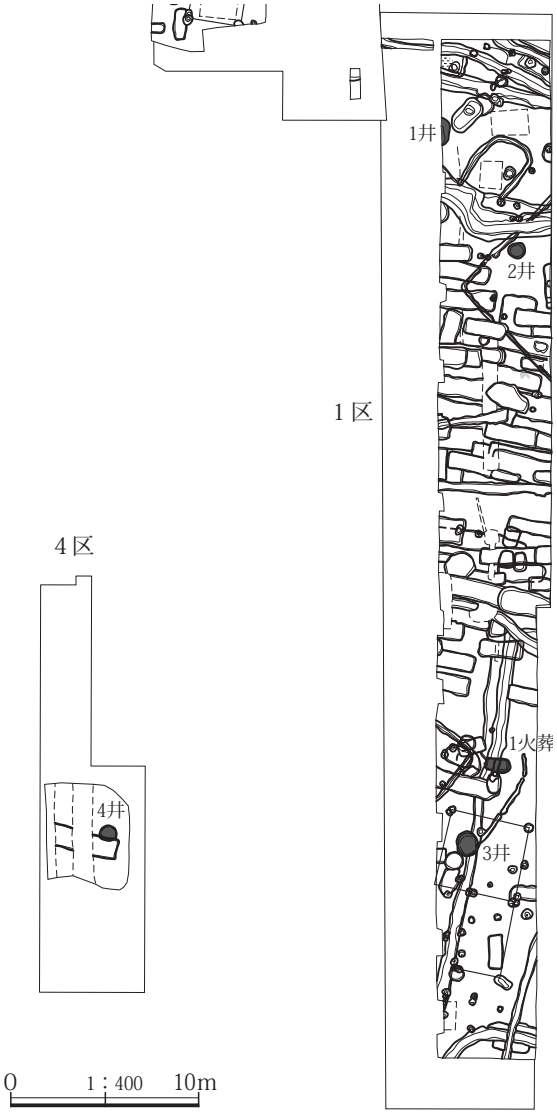
位　置　２区(X=321－Y=-269)　**長軸方位**　N－24°－E

形　状　長方形状

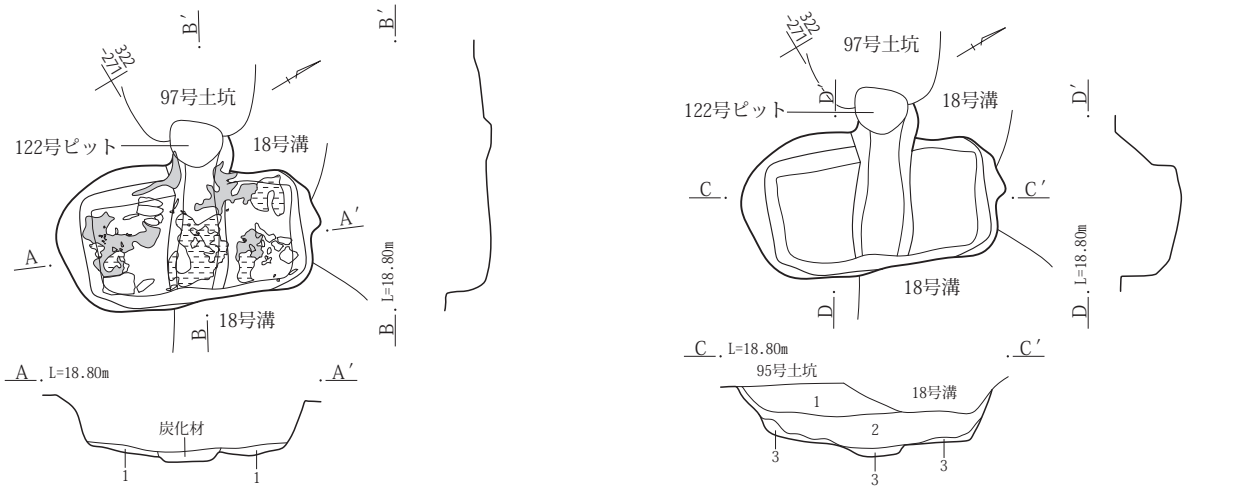
規　模　長軸1.40m・短軸0.76m、突出部：長軸0.97m・短軸0.33m

重　複　97号土坑、18号溝と重複する。

所　見　土坑壁面は被熱して赤化、とりわけ通風溝に連結する部分の赤化が著しい。覆土下層より骨片が多量に出土しているが、火葬骨は大部分が拾い出されており、人骨部位が分かるものはない。出土遺物がなく、遺構の構築時期を明らかにすることはできないが、掘立柱建物や溝(18号)の主軸と軸方向を同じくしており、これが手掛かりになるかもしれない。



第22図　中・近世の遺構分布(火葬土坑・井戸)



１号火葬土坑A-A′・C-C′
1　褐灰色土　炭化物・焼土粒を多量に含み、ロームブロックの混入、骨片もあり。
2　暗褐灰色土　炭化物・焼土粒・骨片混入。
3　暗褐灰色土　炭化物・焼土粒・骨片を多量に混入。

第23図　１号火葬土坑

４．井戸

４基が確認されている。遺構を確認したのち、通例に従い掘り下げていったが、出水が激しく、いずれも完掘できていない。

１号井戸(第22・24図、PL．８)

位　置　１区(X=313－Y=-236)　**長軸方位**　Ｎ－73°－Ｅ

形　状　不明

規　模　長軸(1.44m)・短軸(0.46m)、深さ(0.53m)

重　複　重複なし

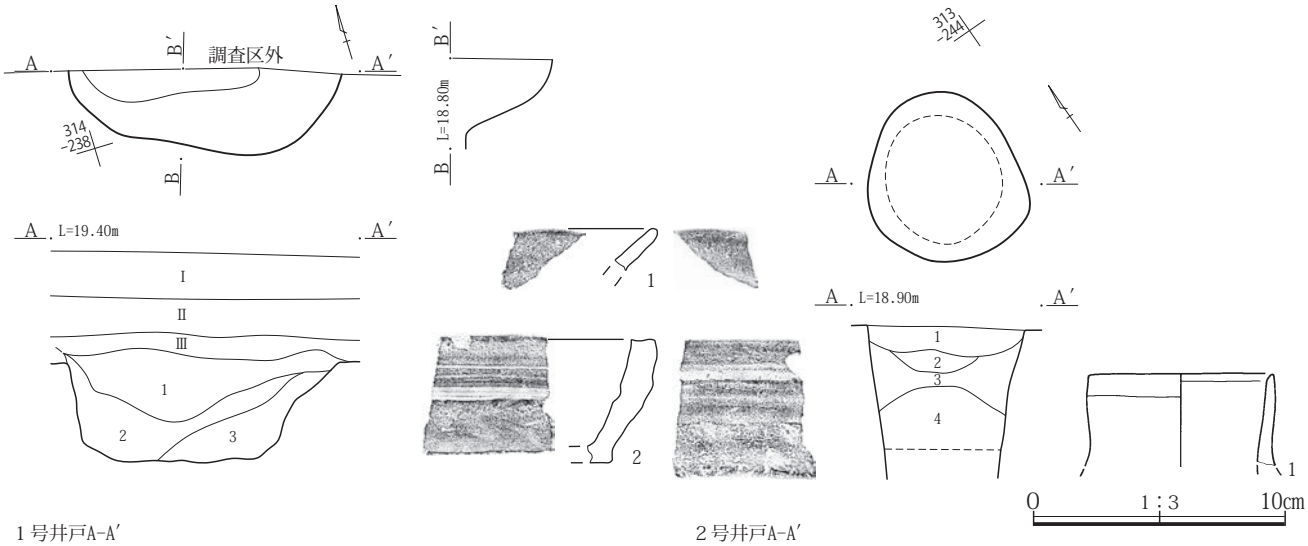
所　見　遺構は調査区期に延び、形状等は不明。覆土中から３点が出土しており、うち２点(第24図１・２)を図示した。素掘り井戸と見られる。

２号井戸(第22・24図、PL.８)

位　置　１区(X=311－Y=-241)　**長軸方位**　Ｎ－35°－Ｗ

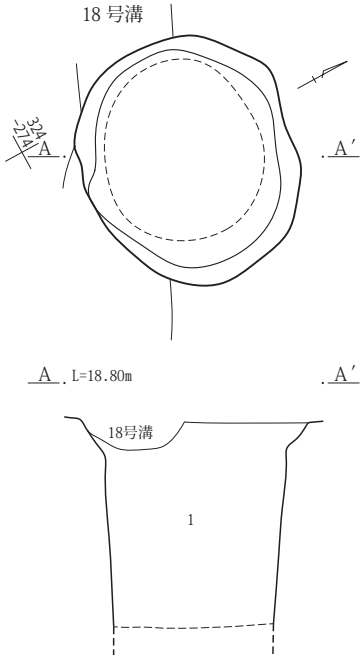
形　状　円形

規　模　長軸0.89m・短軸0.84m、深さ(0.7m)

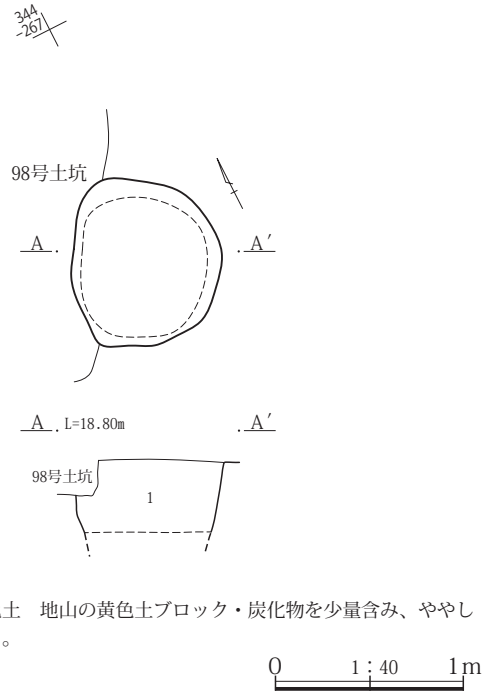


１号井戸A-A′
1　褐灰色土　ローム粒を少量、焼土粒を極少量含む。
2　褐灰色土　ローム粒・ブロックを含む。
3　黄褐色土　ローム粒・ブロックを多量に混入。

２号井戸A-A′
1　褐灰色土　ローム粒と炭化粒・焼土粒を含む。
2　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量、ローム粒を多量に含む。
3　黒褐色土　褐灰色土を斑状に含む。
4　褐灰色土　ローム粒と炭化粒を極少量含む。



３号井戸A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒(小径)あり。



４号井戸A-A′
1　暗灰褐色土　地山の黄色土ブロック・炭化物を少量含み、ややしまりあり。

第24図　１～４号井戸と１・２号井戸出土遺物

重　複　２号竪穴建物を切る。

所　見　出水が激しく、途中調査を断念した。「あぐり」は確認できていないが、遺跡地は沖積地に近く、深さ２m内外で井戸としての機能は果せたものと考える。土師器片20点が出土したのみで、遺構を次期決定できるような遺物は出土していない。

３号井戸(第22・24図、PL.８)

位　置　１区(X=324－Y=-272)　**長軸方位**　N－90°

形　状　円形

規　模　長軸1.28m・短軸1.13m、深さ(1.16m)

重　複　２号掘立柱建物・18号溝に重複する。18号溝に切られる。

所　見　出水が激しく、途中調査を断念した。２号井戸同様、「あぐり」は確認できていないが、それよりやや大型で掘削深度は高い可能性が高い。土師器片数点が出土したのみで、時期決定できるような遺物はない。

４号井戸(第22・24図、PL.８)

位　置　５区(X=342－Y=-266)　**長軸方位**　N－25°－E

形　状　略円形

規　模　長軸0.87m・短軸(0.79m)、深さ(0.45m)

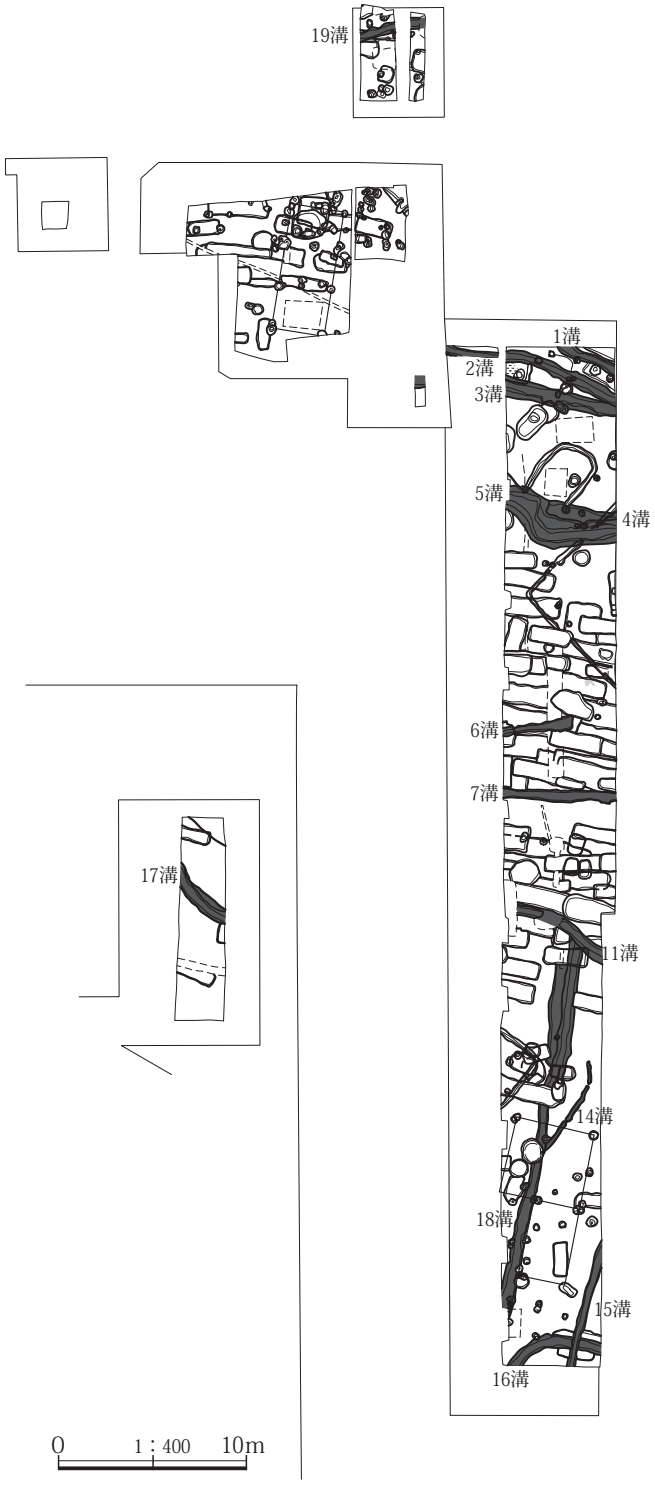
重　複　98号土坑に切られる。

所　見　出水が激しく、途中調査を断念した。上場は開き気味で、井戸上方は漏斗状に開いたものと見られる。出土遺物は得られておらず時期決定できないが、形態的には近世井戸の枠内でとらえることができるだろう。

５．溝

14条の溝が確認されている。うち､12条の溝が１区に、残る２条が４・７区にある。溝の走行は南北軸よりやや東に振れたものが主体を占める。

東西軸に走る溝２条は溝の上場間3.6mほどで、公図に重ね合わせたところ、公図境界には重ならないがある程度公図を反映したものではないかという可能性が浮上したことから、南北軸の溝についても公図境界と重なるか検討してみた。公図境界に一致する溝は１ヶ所のみ確認されたのみであり、直接その関係性について結論することはできないが、次項で取上げる土坑主軸に合致しており、溝・土坑・公図境界(地境)の関係性は明らかで、溝の一部には地境溝としての役割を果したものがあったことは間違いないだろう。



第25図　中・近世の遺構分布(溝)

１～３号溝は、１区東端にある。いずれも断面形は皿状を呈し、溝幅も同サイズである。溝３条は北へ延びるものとみられたが､３条とも２区では確認されていない。２・３号溝については掘削範囲を外れたものとみられるが、１号溝については攪乱され消滅したか、途中走行を変えたか、いずれかであろう。２・３号溝は新旧関係があり、掘り直された可能性が高い。

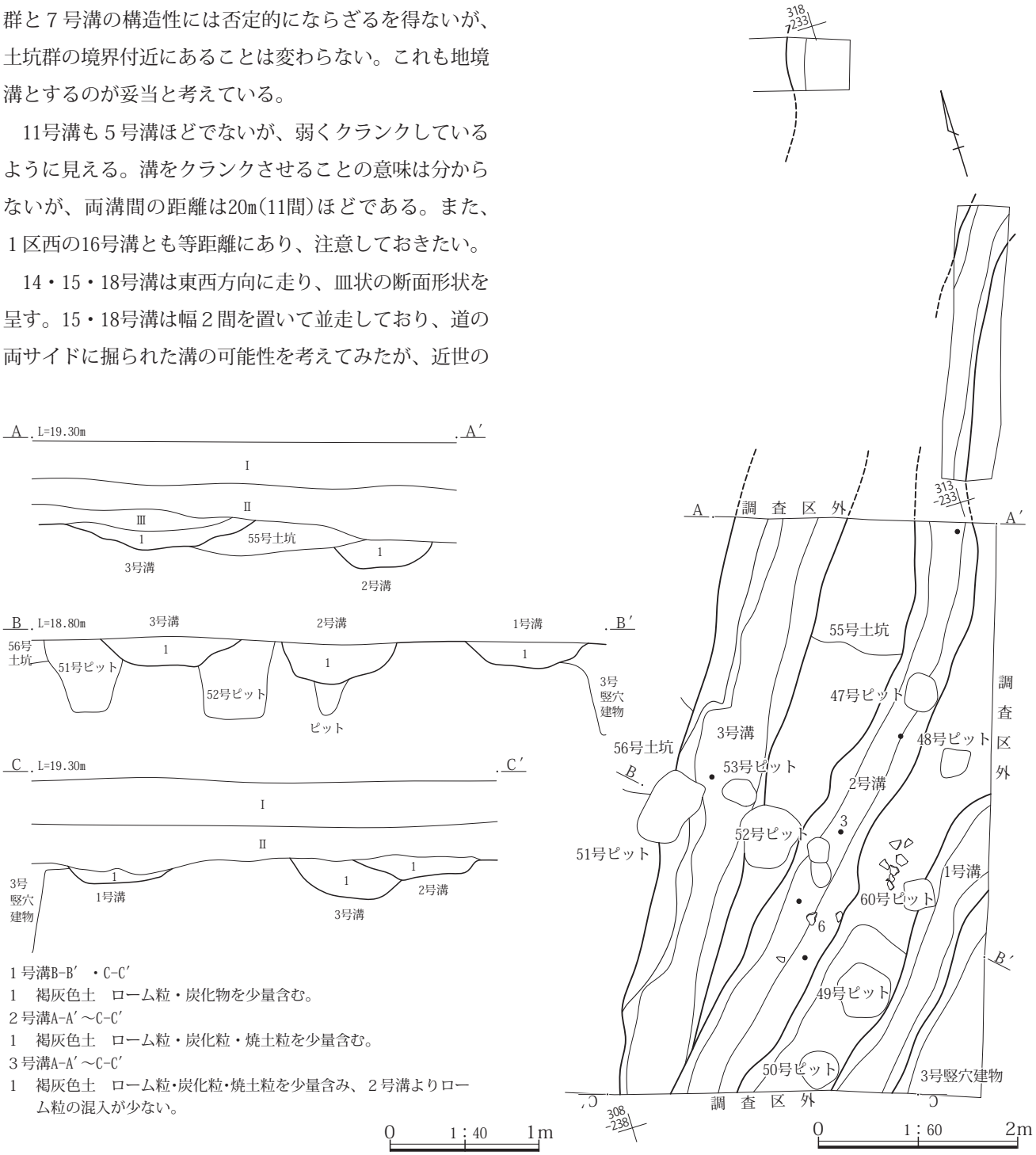
同様に、４・５号溝も新旧関係がある。４号溝は浅く、部分的に５号溝を壊しているが、新旧関係を踏まえれば５号溝を掘り返し４号溝としたものとみられる。５号溝は途中クランクしている。何か障害物があり、これを逃げようとしたのであろうが、具体的には分からない。溝の断面形状は皿状を呈す。

７号溝は１区の中程にある。溝の走行は土坑長軸の振れ幅より小さく、また、重複関係もあることから、土坑群と７号溝の構造性には否定的にならざるを得ないが、土坑群の境界付近にあることは変わらない。これも地境溝とするのが妥当と考えている。

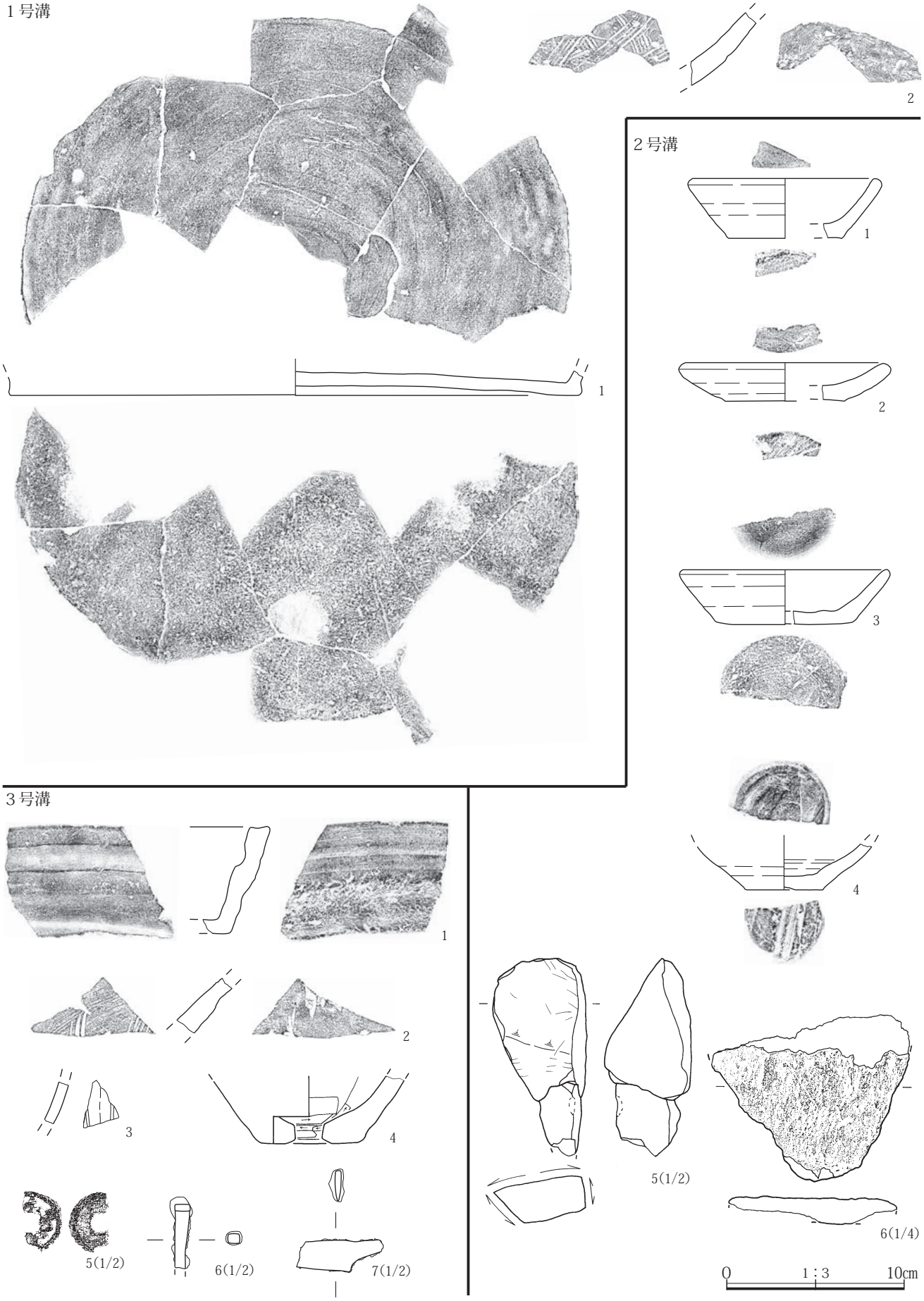
11号溝も５号溝ほどでないが、弱くクランクしているように見える。溝をクランクさせることの意味は分からないが、両溝間の距離は20m(11間)ほどである。また、１区西の16号溝とも等距離にあり、注意しておきたい。

14・15・18号溝は東西方向に走り、皿状の断面形状を呈す。15・18号溝は幅２間を置いて並走しており、道の両サイドに掘られた溝の可能性を考えてみたが、近世の街道は３～６尺(１間)程度であり、幅２間の街道を想定するのは難しい状況にある。11号溝は18号溝と重複しており、新旧関係について記録がなく明らかでないが、18号溝も掘り直されているように見える。

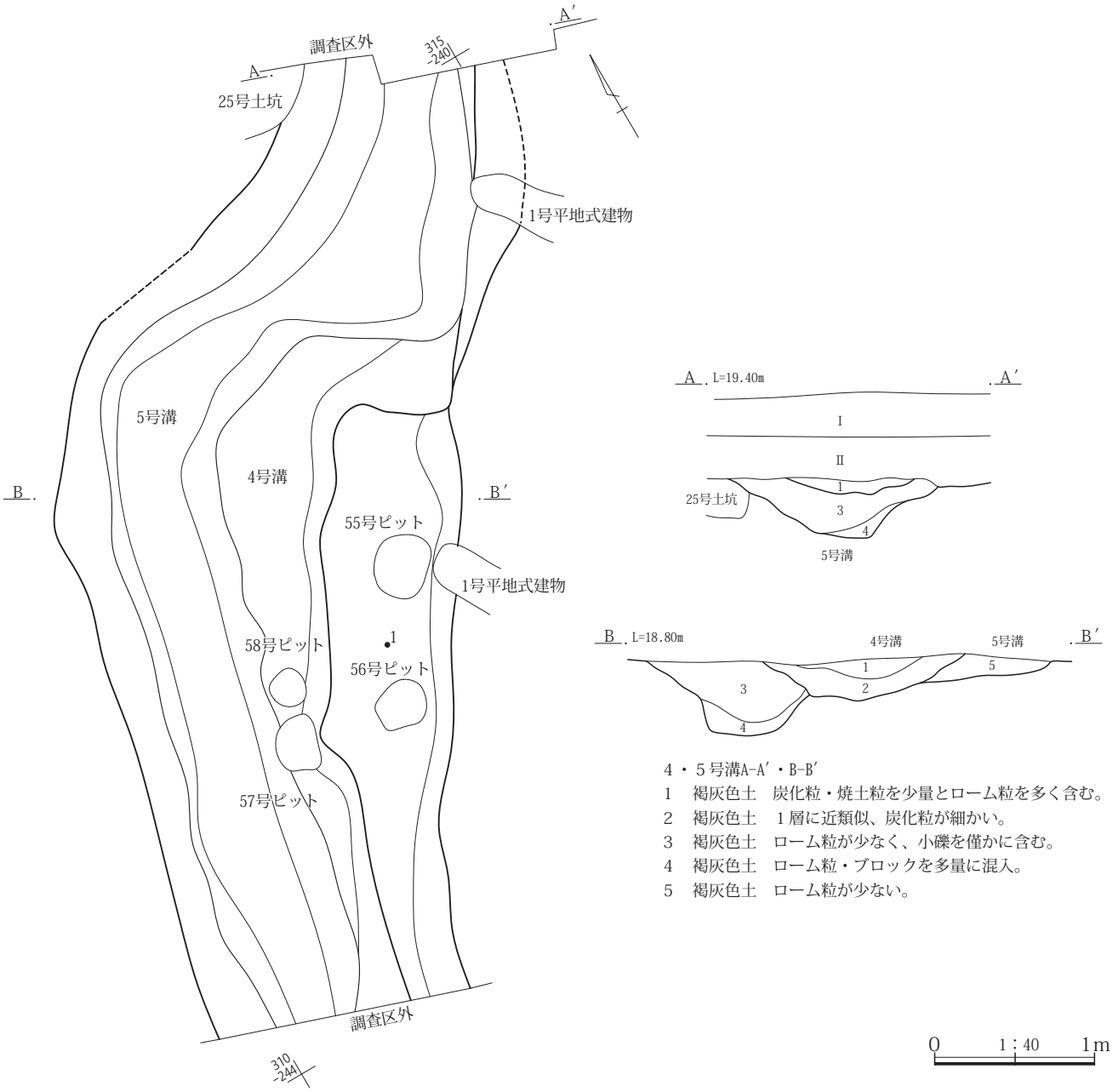
14号溝については、他の溝とは走行が大きく異なり、溝幅も狭く浅く、その性格について明らかにすることができなかった。



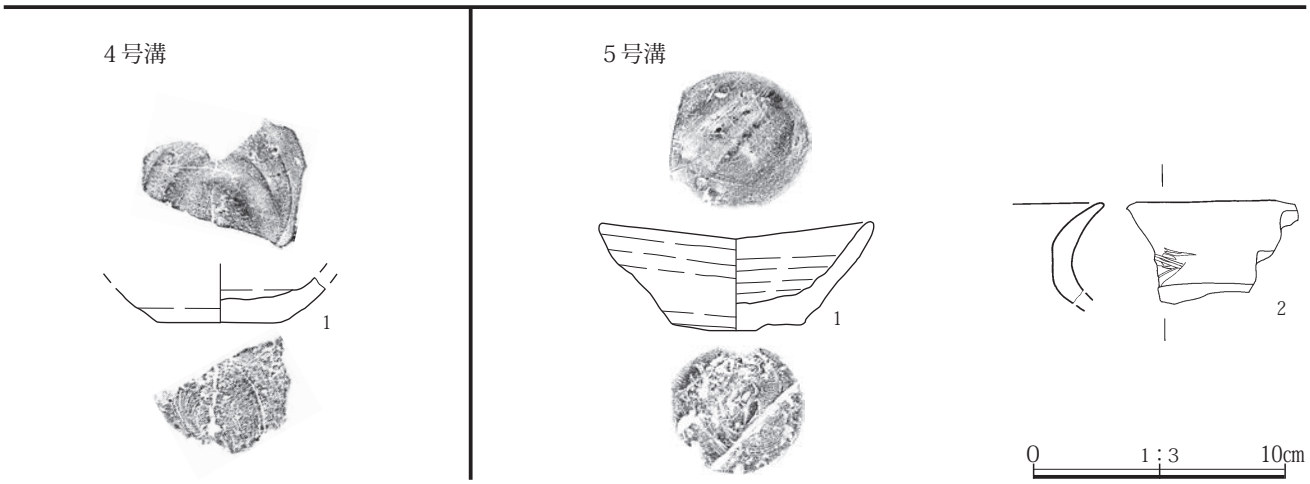
第26図　１～３号溝



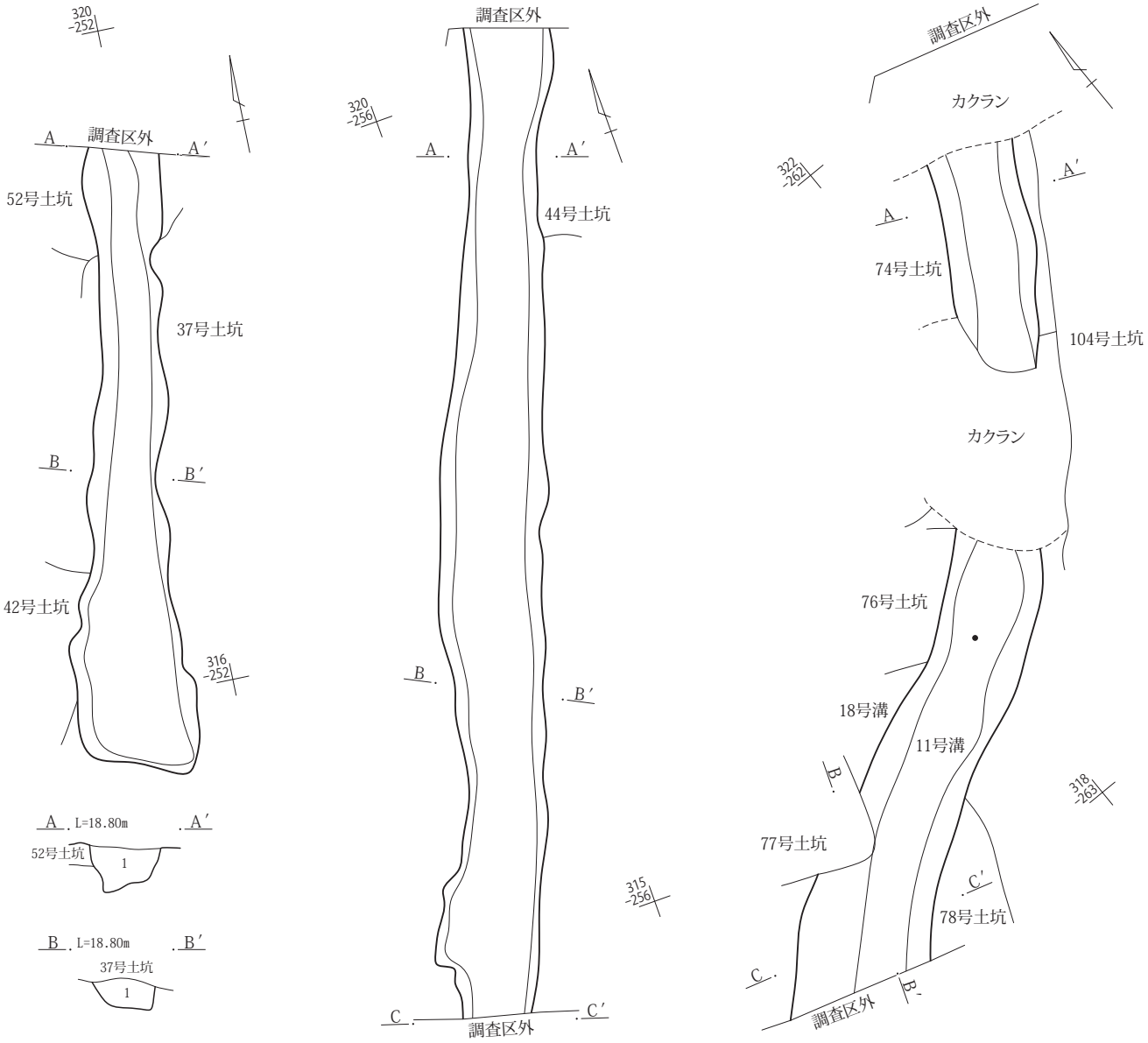
第27図　１～３号溝出土遺物



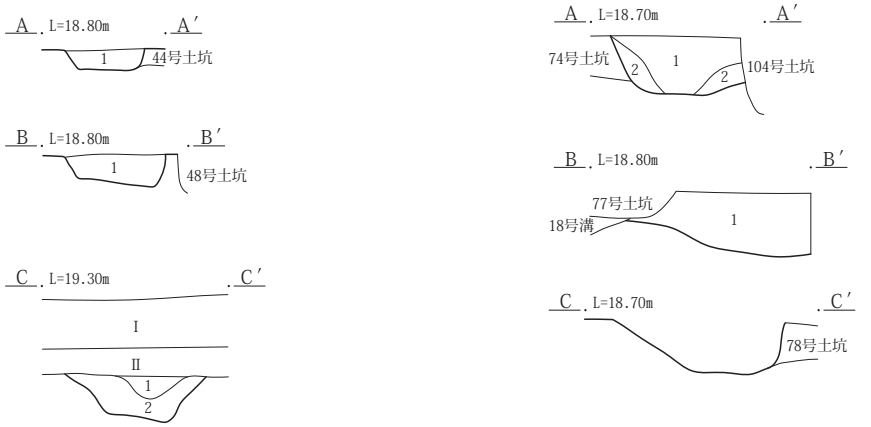
４・５号溝A-A′・B-B′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量とローム粒を多く含む。
2　褐灰色土　１層に近類似、炭化粒が細かい。
3　褐灰色土　ローム粒が少なく、小礫を僅かに含む。
4　褐灰色土　ローム粒・ブロックを多量に混入。
5　褐灰色土　ローム粒が少ない。



第28図　４・５号溝と出土遺物



６号溝A-A′・B-B′
1　褐灰色土　ロームブロック・ローム粒混入。

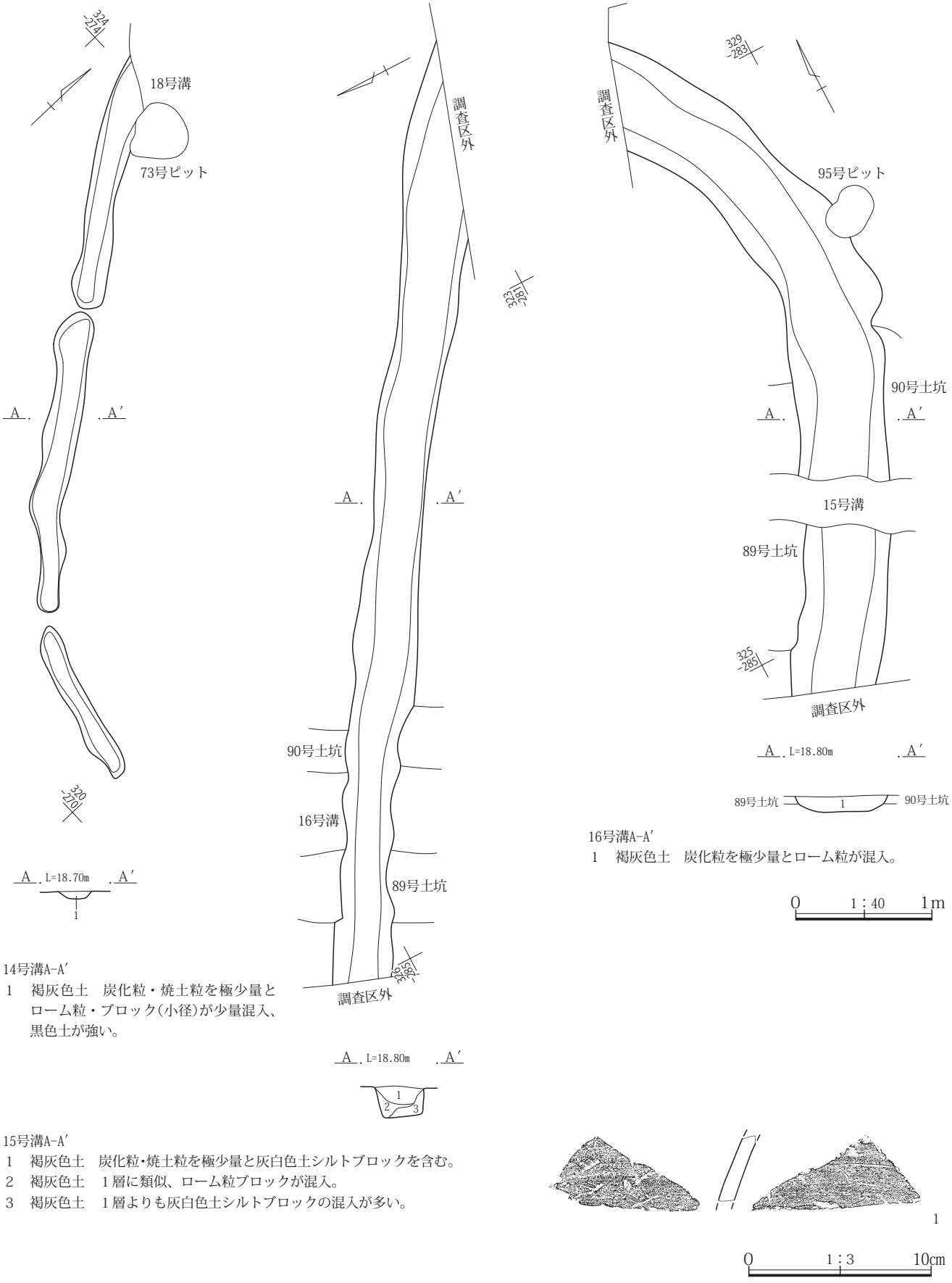


７号溝A-A′～C-C′
1　暗褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、やや軟質。
2　黒褐色土　ロームブロックを少量含み、やや軟質、砂層なし。

11号溝A-A′・B-B′
1　褐灰色土　炭化粒が多く、焼土粒・ロームブロック(小径)を極少量含む。
2　褐灰色土　１層に類似、ローム粒とロームブロック(大径)が混入。

0　1：40　1m

第29図　６・７・11号溝

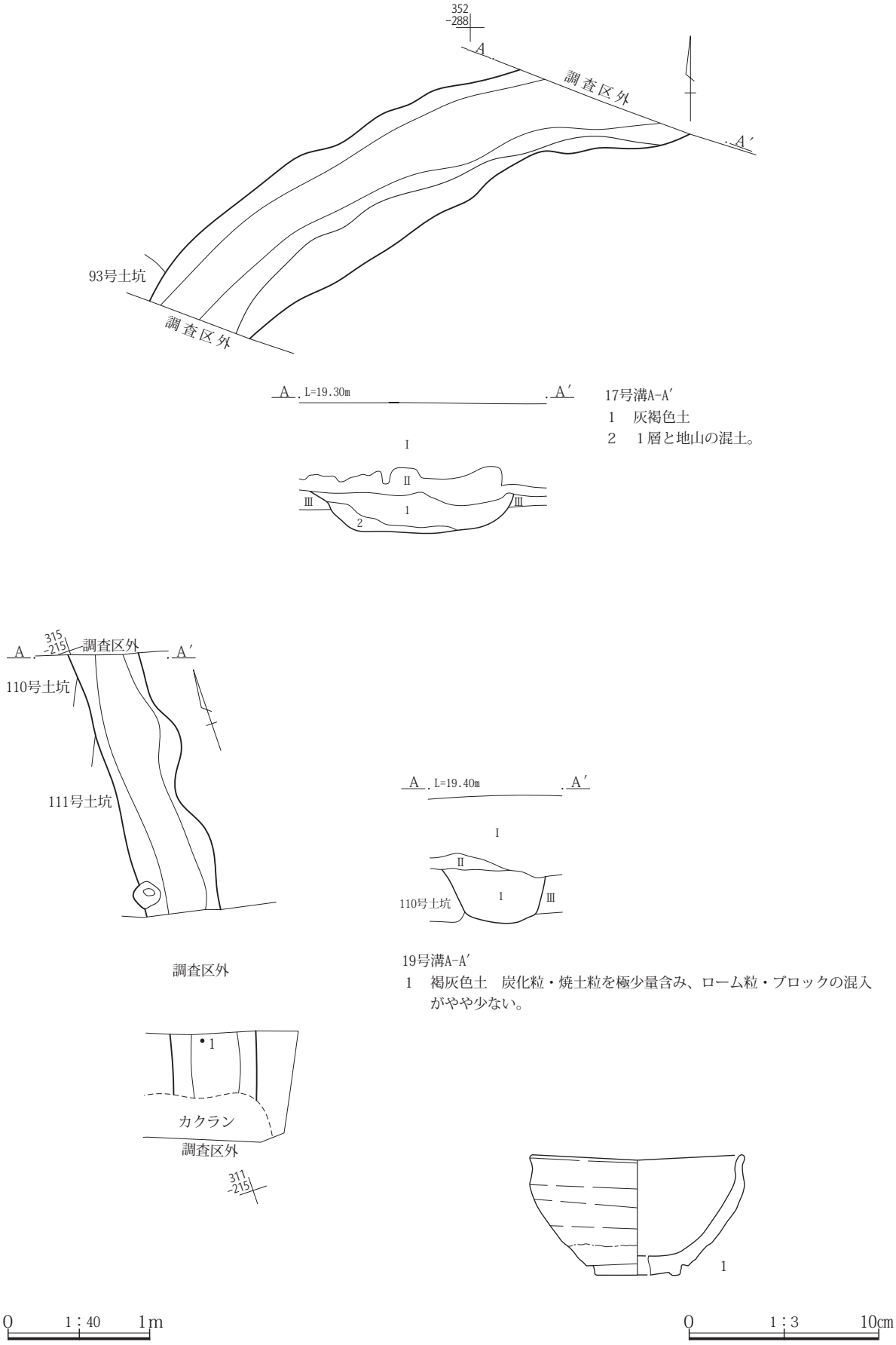


14号溝A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)が少量混入、黒色土が強い。

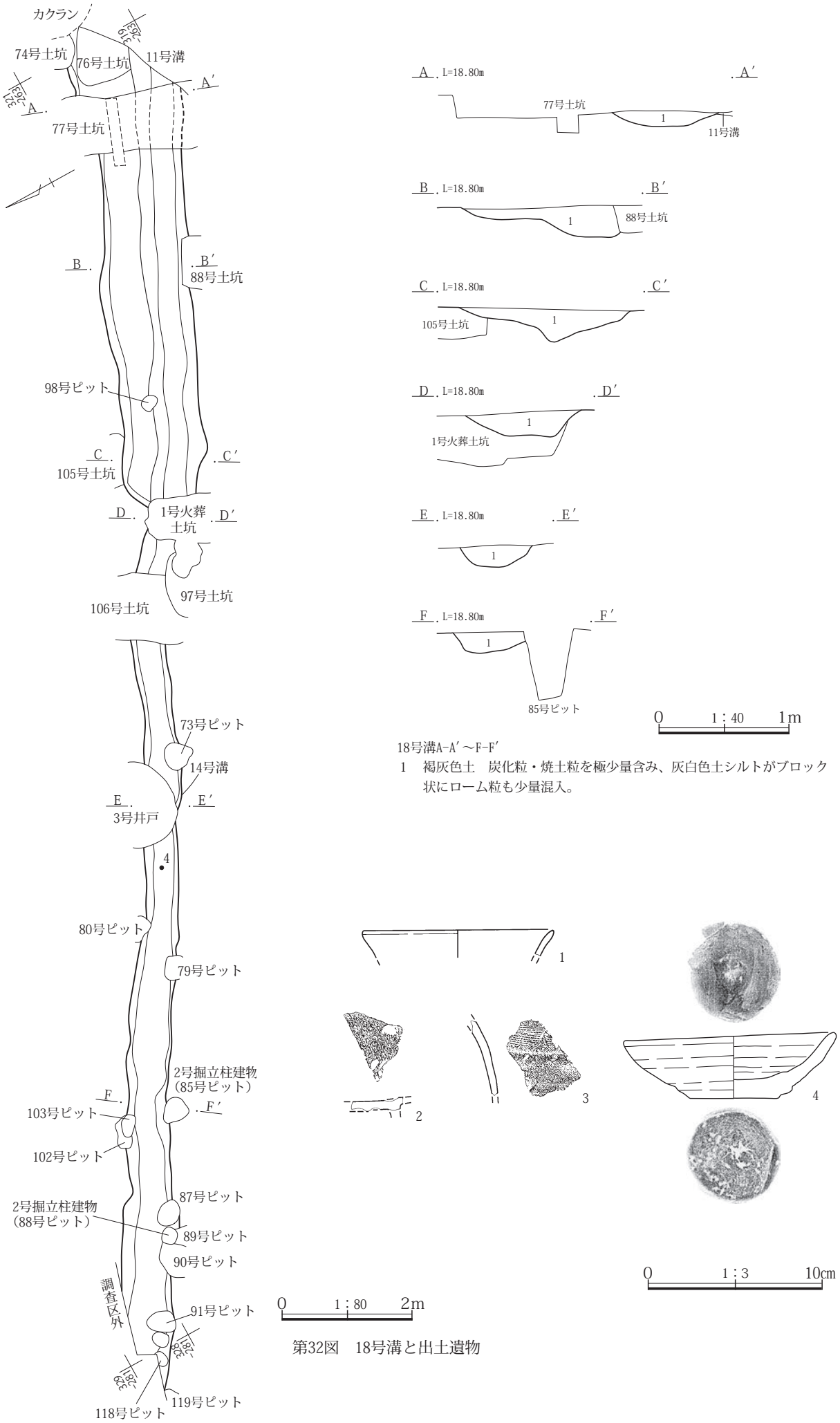
15号溝A-A′
1　褐灰色土　炭化粒･焼土粒を極少量と灰白色土シルトブロックを含む。
2　褐灰色土　１層に類似、ローム粒ブロックが混入。
3　褐灰色土　１層よりも灰白色土シルトブロックの混入が多い。

16号溝A-A′
1　褐灰色土　炭化粒を極少量とローム粒が混入。

第30図　14～16号溝と16号溝出土遺物



第31図　17・19号溝と19号溝出土遺物



第32図 18号溝と出土遺物

６．土坑(第33～47図、PL. ９～14・17・18)

108基(１区76基、２区20基、４区４基、７区６基)の土坑が確認されている。３・６区を除く各区で確認されているが、調査区が狭く土坑の全貌が判明しているものが少ないため、土坑の形態的特徴を踏まえた細かな分類は困難であった。ここでは、下記の分類に従い概括的に説明していきたい。

なお、土坑出土の遺物は少なく、近世土坑と見られる長方形土坑から古墳時代の杯・高杯類・土錘なども出土したほか、底部を回転糸切りした土師器皿などもあり、さまざまである。

Ⅰ類：長方形状を呈する土坑。大中小３群(１m以下、１～２m、２m以上)に大別も可能で、各分類群には幅広のものと幅の狭いものがある。完掘できていない土坑が多く、細分せず一括することとした。

Ⅱ類：略方形を呈するもの。通常サイズの土坑に比べ短軸幅が約２倍になるものがある。14・35号土坑など。

Ⅲ類：円形状を呈するもの。径１m前後のものが主体を占める。

Ⅳ類：その他の不整形土坑を一括した。

Ⅴ類：部分的確認に止まり、本来的形状が不明なものを一括した。17・55・58・112・113号土坑など。

Ⅰ類の土坑

Ⅰ類の土坑は、88基がある。土坑は校舎南(１区)や東(２区)に濃く分布している。土坑は溝やピットと重複するほか土坑間の重複もあり、調査区外に延びる土坑も多い。１区では最も多く土坑が確認されているが、７号溝西の空白域を挟んでその両側に長方形土坑が集中する。これ以外の地点では、長方形土坑が重複することはほとんどなくなるが、各集中域では同軸方向の長方形土坑が激しく重複するほか、少数だがこれに直交する土坑もある。調査区が狭く断定できないが、長方形土坑(Ⅰ類)には以下の傾向が指摘できよう。

調査区からみて、長軸長が最大で６m近い土坑が確認されていいはずだが、現状で３m前後の土坑が主体を占める。完掘土坑に限れば、長方形土坑は長軸長0.75～1.25m、1.50～2.00m、2.25～2.75mの３群からなる。土坑各群の短軸長は0.9m前後に集中、ここに明らかな有意性がある。類例を挙げるとすれば、渋川市白井北中道Ⅲ遺跡や吹屋伊勢森遺跡の「耕作坑」に同じ傾向が読み取れる。上記２遺跡では土坑長軸長が10mを超えるものまであるが、短軸長に限れば0.7～0.9mに収まり、ここでも短軸長に有意性が窺える。渋川地区遺跡ではこれを耕作坑としているが、それは耕作坑が地割に規定されるよう確認されているからである。本遺跡では土坑の機能を決するようなデータは得られていないが、地割に重なる溝があり、渋川市域の耕作坑に類する可能性は高い。

本遺跡の土坑出土遺物には時期決定できるようなものはないが、概ね16～17世紀と見られるかわらけ類が出土している。土坑底面が近接する例も多く、なかにはほとんど底面が区別できないものもあることからみて、累積的に土坑群が形成されたものと考えている。短軸長が0.5～0.7mとなる長方形土坑については細分して捉えることも検討してみたが、軸方向(20～30度)の振れ具合や土坑深度に差がなく、そのまま長方形土坑として捉えた。これに対して、長軸長が１m弱の土坑は軸方向が多様であり、これとは別に捉えるべきかもしれない。

なお、本類の９号土坑については細型長方形土坑と呼ぶべきものだが、軸方向が２号掘立柱建物と同様であることから、下記２類土坑(14号土坑)とともに同建物跡の図に併せ図示しておいた。

Ⅱ類の土坑

Ⅱ類の土坑は２基があり、いずれも略方形に近い平面形状を呈していた。上述したように、14号土坑については２号掘立柱建物と軸方向が重なることから、建物関連施設となることも否定できないため、１号掘立柱建物跡(第19図)に併せて図示した。Ⅱ類土坑の構築時期や機能を示すデータはなく、その性格等は明らかでない。35号土坑についても同様である。

Ⅲ類の土坑

Ⅲ類の土坑は９基があり、特に集中するような傾向はない。土坑は１m前後のものが主体だが、これに倍する程度の土坑(57・68号)もあり、多様である。本類土坑はⅠ類の土坑に切られるようであるが、新旧関係は判然としないものが多く、なかには古墳時代土坑と重複するものがあり、このことについて若干検討しておきたい。まず19号土坑だが、これについては古代の土器が出土、墓

坑ではないかとする所見が記されていた。19号土坑の調査終了後、56号土坑が調査されており、この調査順に従えば、56号土坑は古代以前の土坑ということになるが、19号土坑出土土器については６世紀代のものであり、土坑の軸方向も同時期の竪穴建物等の軸方向に整合的であり、古墳時代土坑として理解することに違和感はないだろうと考える。一方、これと切り合う56号土坑にも柑の口縁部破片が出土している。新旧関係について異議を唱えるだけのデータはないが、古墳時代の土坑とされるものは意外に少なく､遺構として一般的存在か疑問に思う。近世長方形土坑には例外なく土師器片が出土しており、帰属時期決定については慎重でありたい。

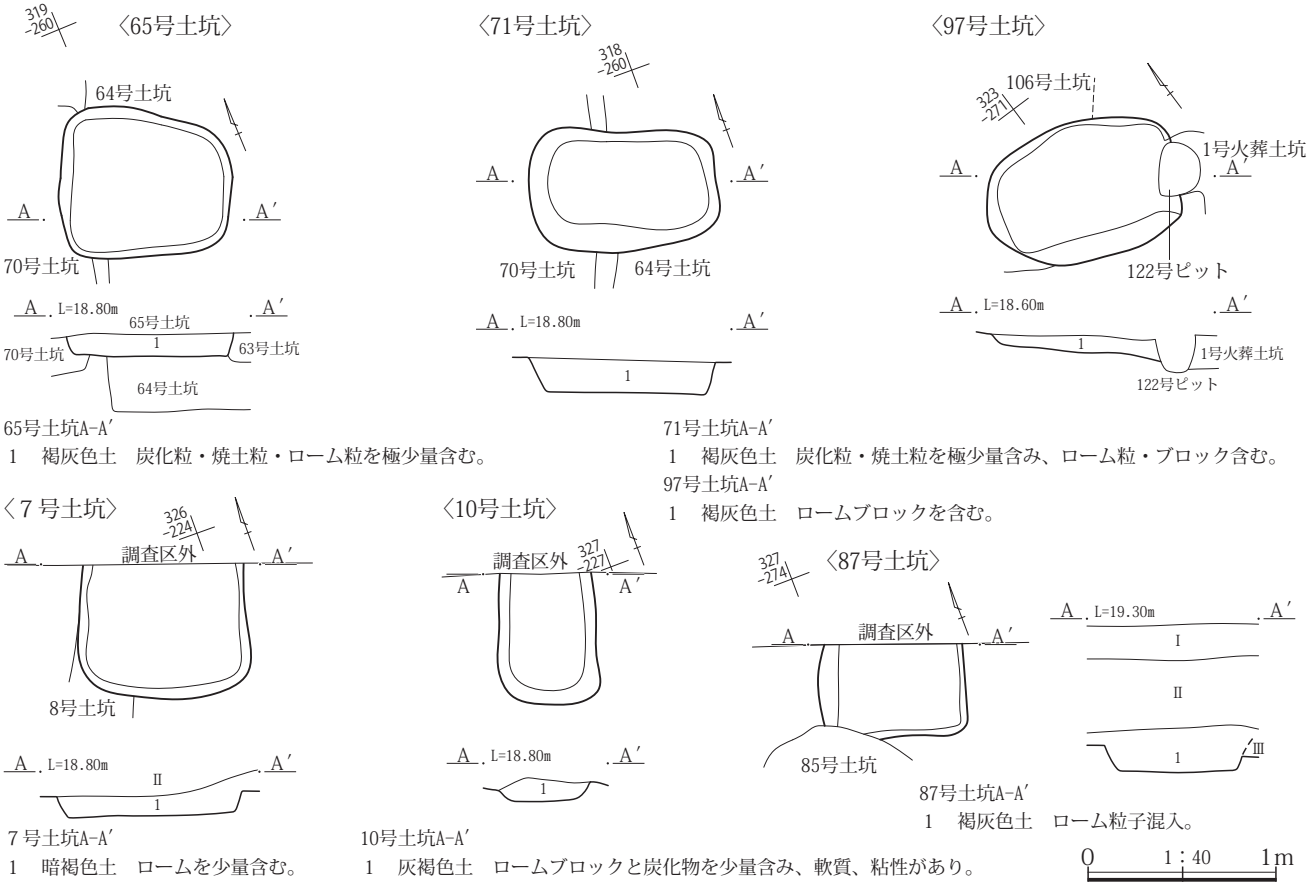
Ⅳ類の土坑

Ⅳ類の土坑は、計３基がある。１区39号土坑はⅠ類の土坑集中域にある。形状は直線的部分がある一方、突出気味になる部分もあり、形状を一言で表現することは難しい。遺構の重複が激しく、土坑が重複している可能性も否定できず、本来的な土坑形状については捉え切れていないように思える。１区76号土坑についても溝に重複しており、土坑の本来的形状は捉え切れていない。土層断面では、１ｍほどの土坑として溝を切り構築されている。７区112号土坑は、調査区北東隅にある。土坑は部分的な確認に止まり西壁のみ確認されただけである。土坑の軸方向は近接する19号溝の軸方向に規制されるように見える。

Ⅴ類の土坑

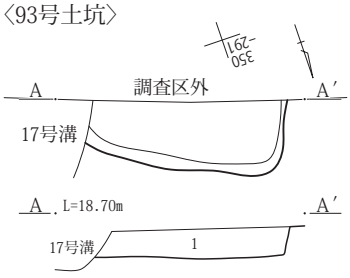
Ⅴ類の土坑は、計５基がある。いずれも部分的な調査に止まることで、その形状が明らかにできないため形態不明としたものである。

「建武三年」の紀年銘が刻まれた板碑や石臼が出土した55号土坑も全体の形状が分からずⅤ類土坑としたが、短辺のみ残存した形状から方形土坑に分類されるかもしれない。その他の土坑についても皆目分類できないものもあるが、分類できそうなものもあり、これらについて分類することも考えてみたが、分類の有効性が見えず、敢えてここでは分類せず形態不明の土坑とした。

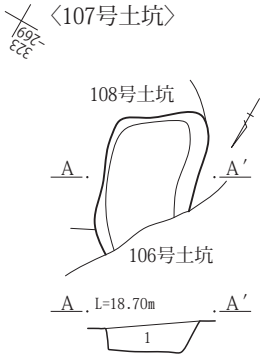


第33図　長方形土坑（１）

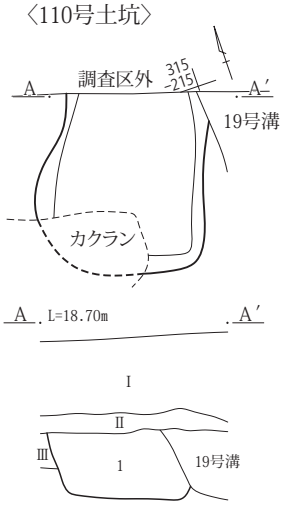
〈93号土坑〉



〈107号土坑〉

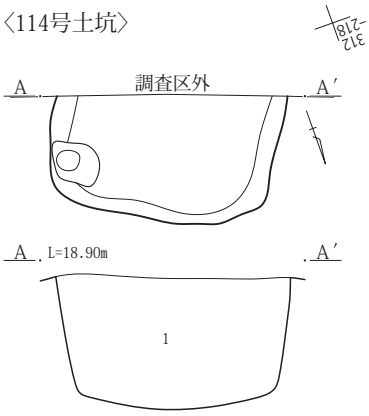


〈110号土坑〉



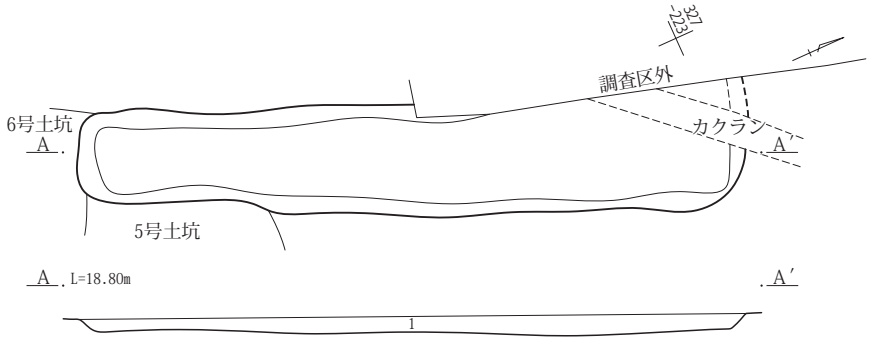
93号土坑A-A′
1　くすんだ灰褐色土　炭化物を少量含む。
107号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)が少量混入。
110号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒・ブロックも下部に多い。

〈114号土坑〉



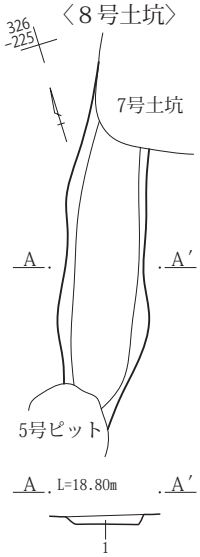
114号土坑A-A′
1　褐灰色土　ロームブロックを多量に含み、炭化粒を極少量含み、、黄褐色土が強い。

〈３号土坑〉

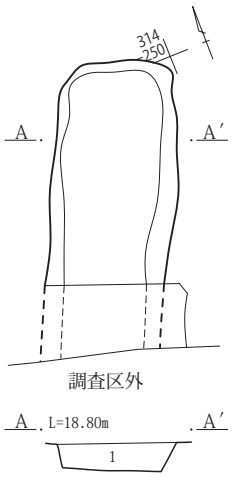


３号土坑A-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、軟質、粘性あり。

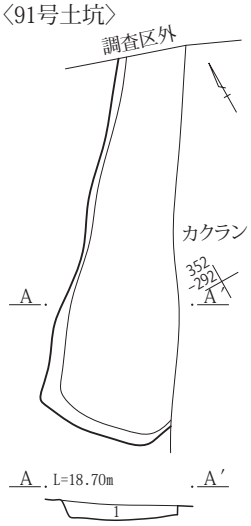
〈８号土坑〉



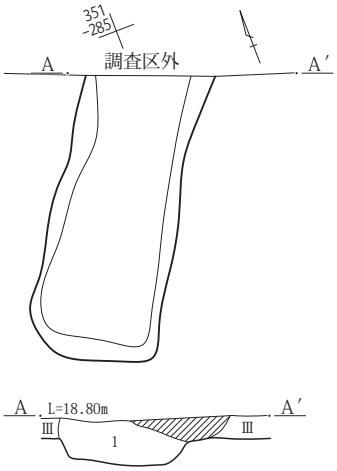
〈26号土坑〉



〈91号土坑〉



〈94号土坑〉



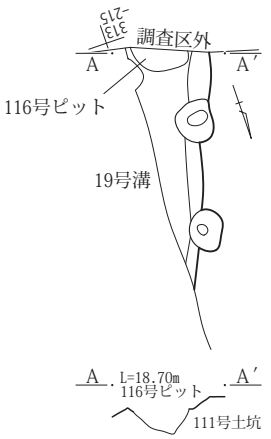
８号土坑A-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、軟質、粘性があり。
26号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ロームブロックが混入。

91号土坑A-A′
1　くすんだ灰褐色土　炭化物を少量含む。
94号土坑A-A′
1　くすんだ灰褐色土とロームブロック混土。

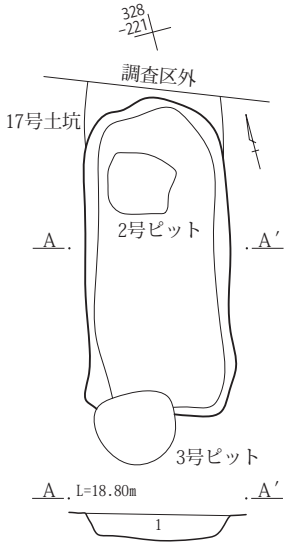
0　1：40　1m

第34図　長方形土坑（２）

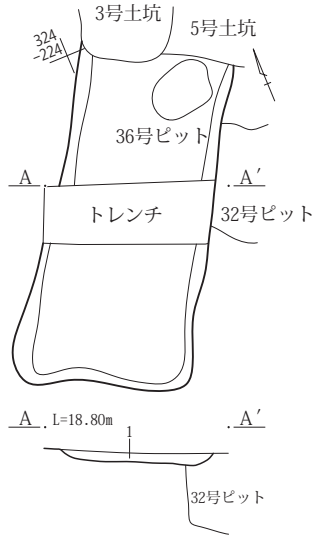
〈111号土坑〉



〈２号土坑〉

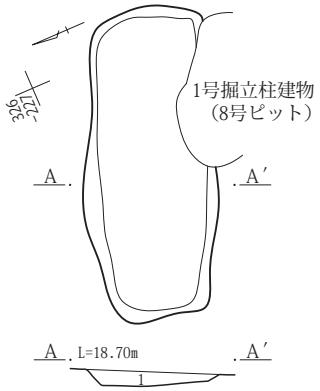


〈６号土坑〉

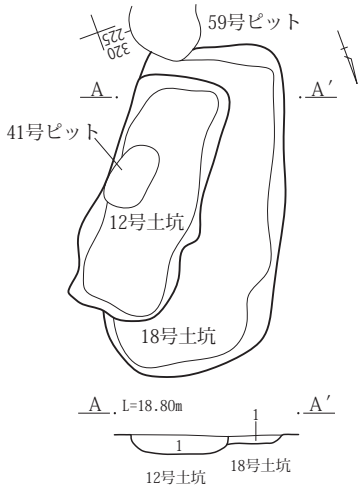


２号土坑A-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、軟質、粘性あり。
６号土坑 A-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、軟質、粘性があり。

〈11号土坑〉

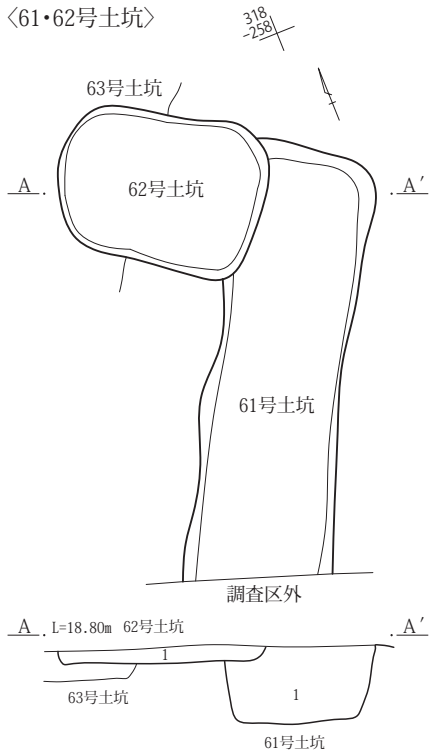


〈12・18号土坑〉



11号土坑A-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、軟質、粘性があり。
12号土坑A-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土　ローム土と炭化物を少量含み、やや硬質。
18号土坑A-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土　ローム土と炭化物を少量含み、やや硬質。

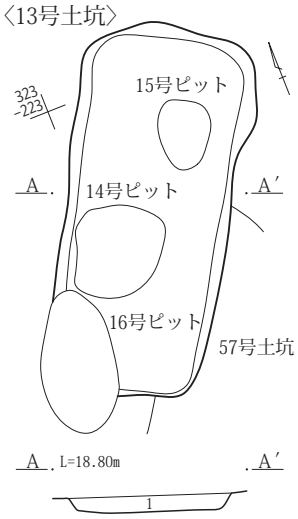
〈61・62号土坑〉



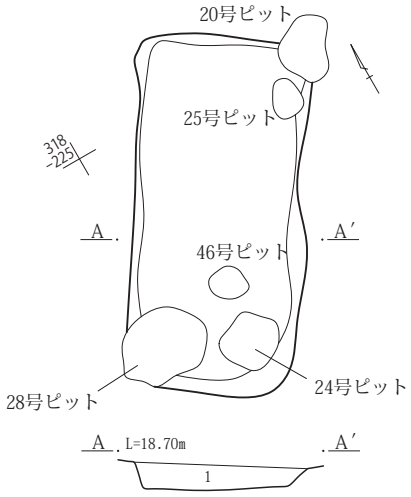
61号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒・ローム粒を極少量含む。
62号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒・ローム粒を極少量含む。

16号土坑A-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土　ローム土と炭化物を少量含み、やや硬質。

〈13号土坑〉



〈16号土坑〉

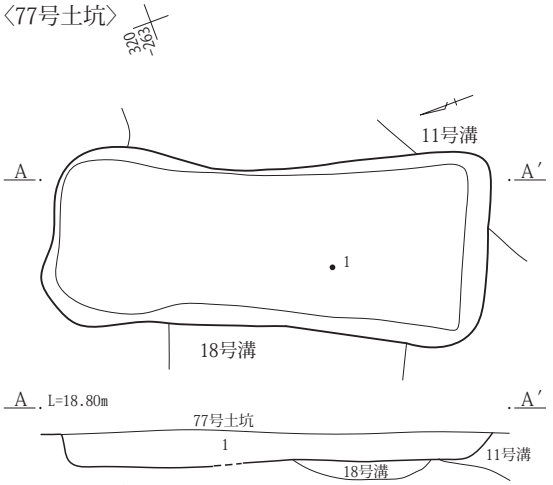


13号土坑A-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、軟質、粘性があり。

0　1：40　1m

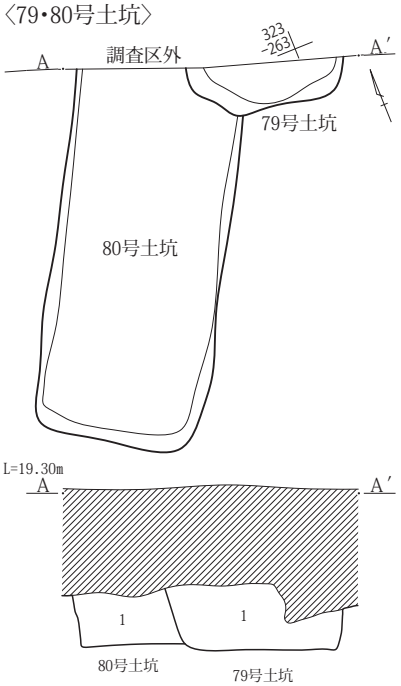
第35図　長方形土坑（３）

〈77号土坑〉

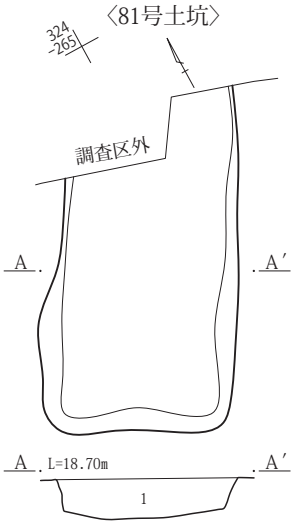


77号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量含む。
79 号土坑 A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量含み、ローム粒・ロームブロックを含む。
80号土坑A-A′
1　褐灰色土　79号土坑よりローム粒ブロックの混入が多い。

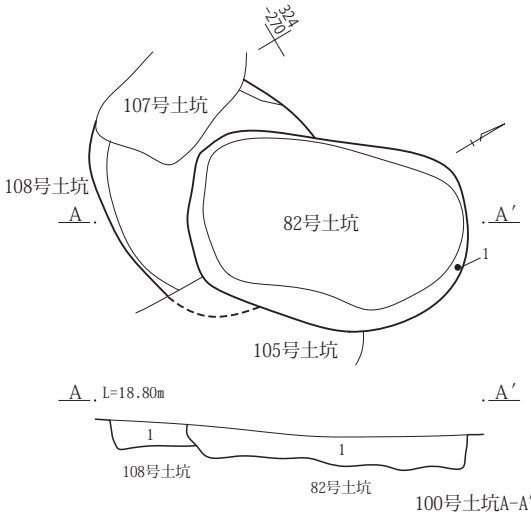
〈79･80号土坑〉



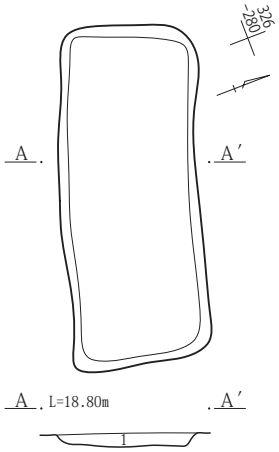
〈81号土坑〉



〈82･108号土坑〉



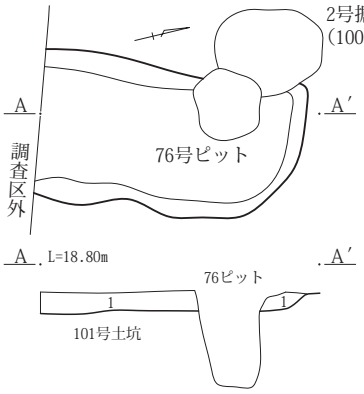
〈100号土坑〉



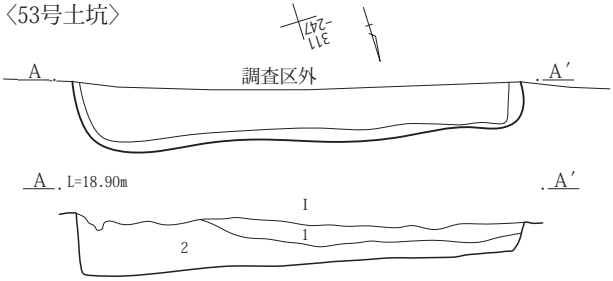
81号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量含み、ローム粒・ロームブロックを含む。
82号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とロームブロックを少量含み、やや黒色土が強い。

100号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒を多量と炭化粒を少量含む。
108号土坑A-A′
1　褐灰色土　焼土粒･炭化粒を極少量とローム粒･ブロックを少量含む。

〈101号土坑〉



〈53号土坑〉

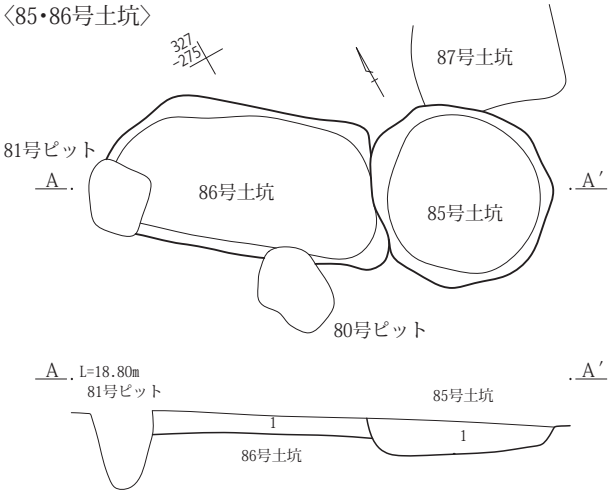


53号土坑A-A′
1　暗褐灰色土　ロームブロックを少量、黒色粒ブロックを多く含み、やや暗い感じ、焼土粒が少量混入。
2　褐灰色土　ローム粒・ブロックを少量含み、焼土粒・炭化粒が極少量混入。
101号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒を極少量、焼土粒・ローム粒を少量含み、土器２点。

0　1：40　1m

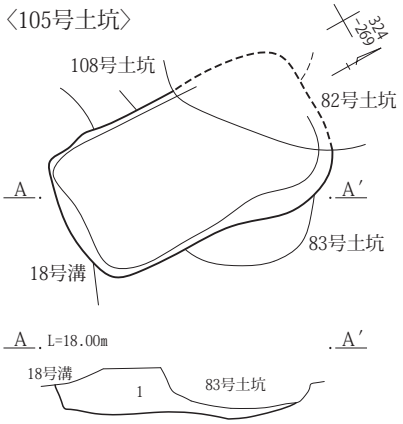
第36図　長方形土坑（４）

〈85・86号土坑〉



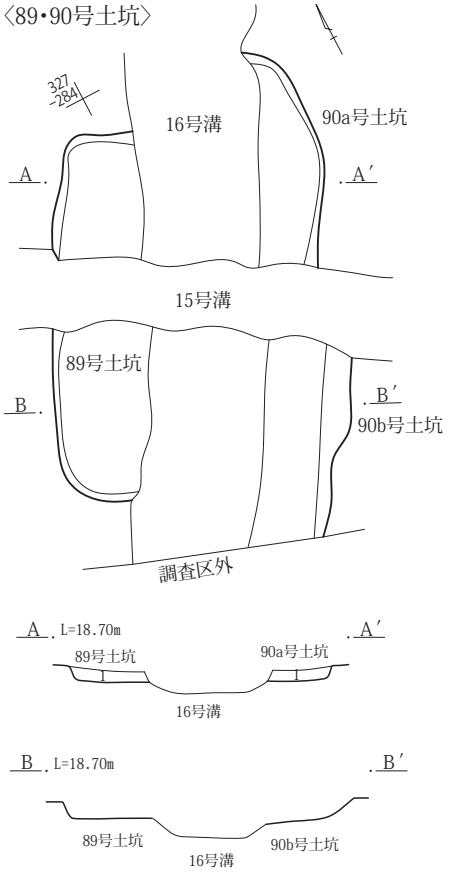
85号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量、黒褐色土ブロックとローム粒ブロックを少量含み、黒色土が強い。
86号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒を多量と炭化粒・焼土粒を極少量含む。

〈105号土坑〉



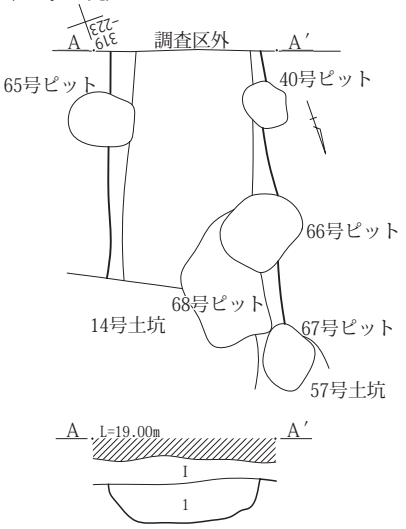
105号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒を多量と焼土粒含み、ローム粒・ブロックも少量混入。

〈89・90号土坑〉



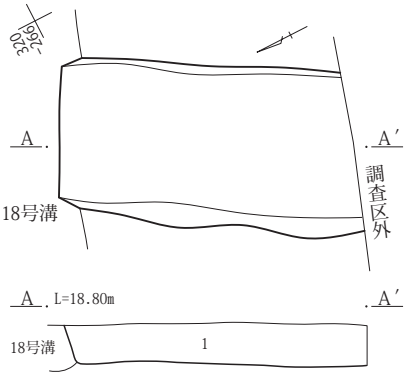
89号土坑A-A′
1　褐灰色土　焼土粒・炭化粒を極少量とローム粒を少量含む。
90a号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒を多量含み、炭化粒・焼土粒を極少量含む。

〈15号土坑〉

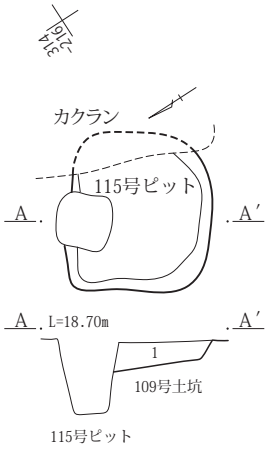


15号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒を多量に含み、炭化粒を極少量含む。

〈88号土坑〉



〈109号土坑〉

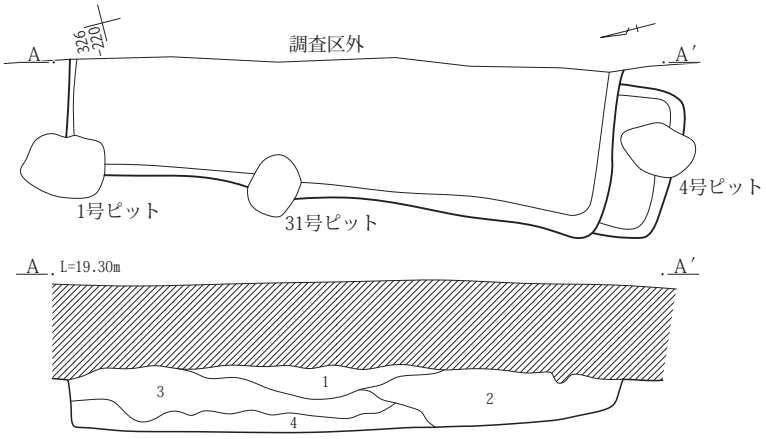


88号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックを少量含む。
109号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)を含む。

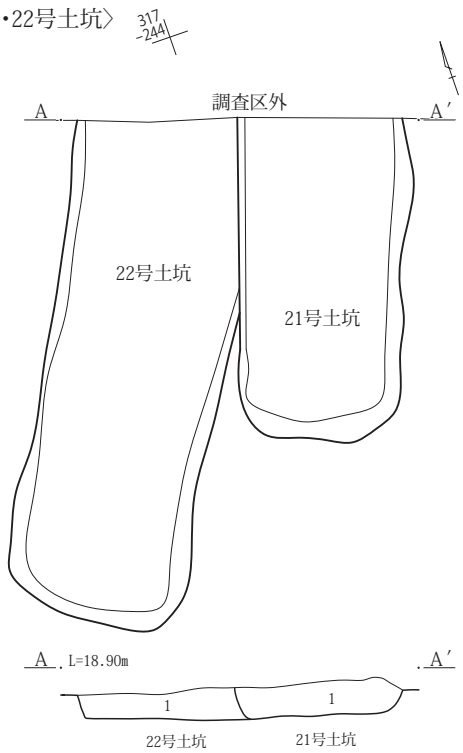
0　1：40　1m

第37図　長方形土坑（５）

〈１号土坑〉



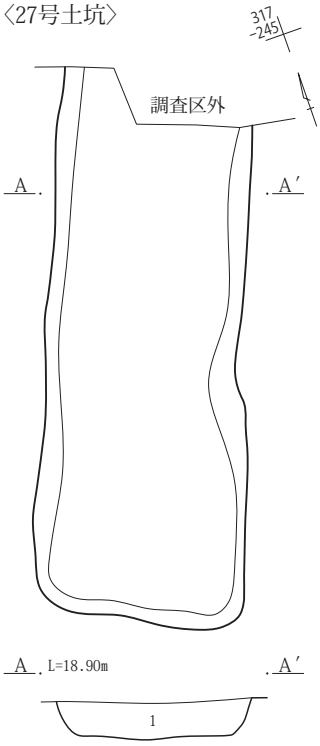
〈21・22号土坑〉



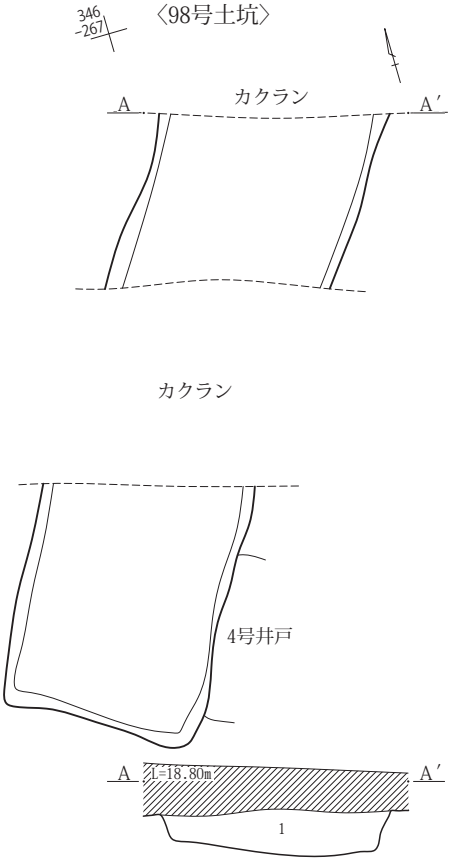
1号土坑A-A′
1　くすんだ褐灰色土　ローム粒子・炭化物少量含み、軟質。
2　灰褐色土混土　焼土・炭化材を多く含み、軟質。
3　くすんだ褐灰色土　ロームブロックを多量含み、軟質。
4　くすんだ褐灰色土　ローム土を多く含み、しまりあり。

21号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒と炭化粒を極少量含む。
22号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックを含む。

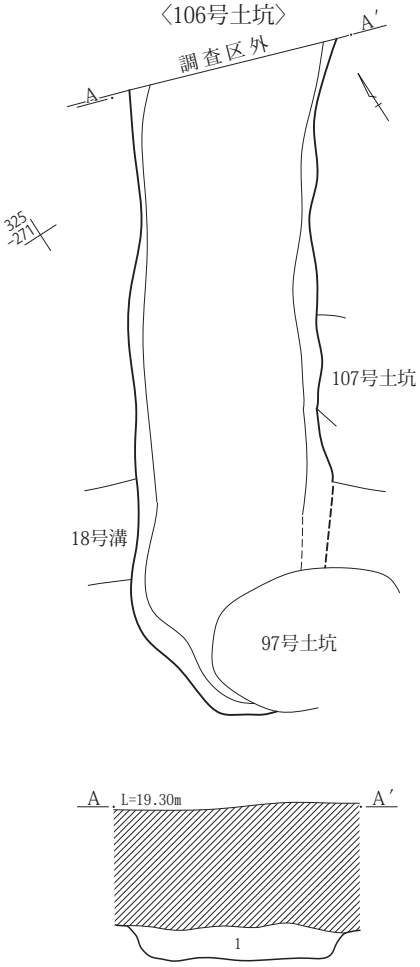
〈27号土坑〉



〈98号土坑〉



〈106号土坑〉

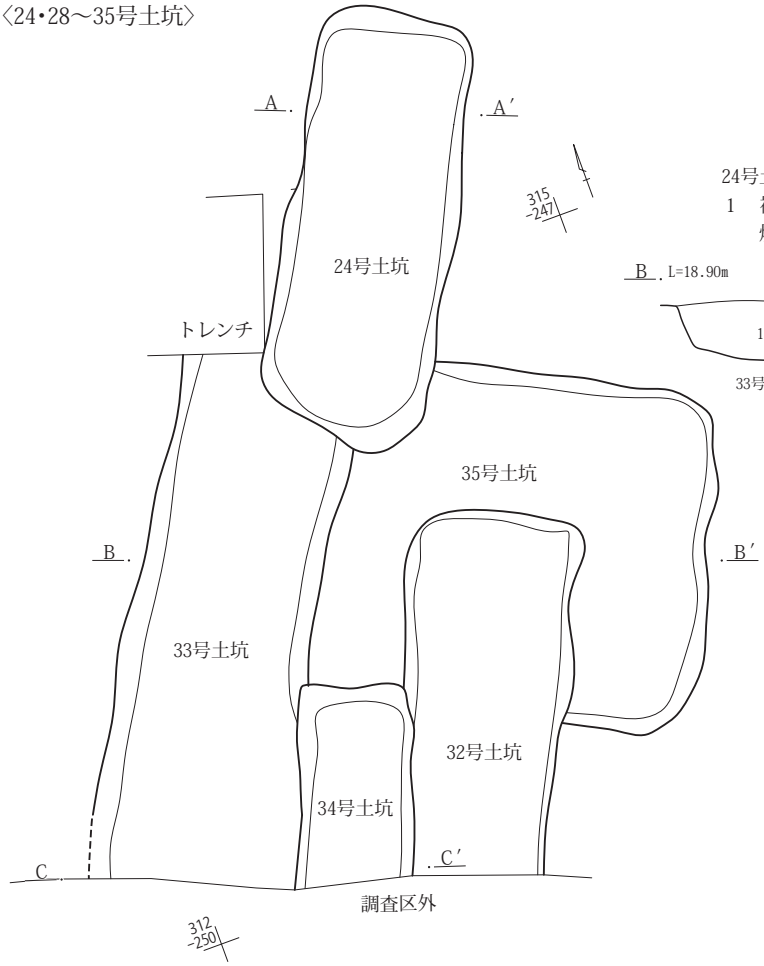


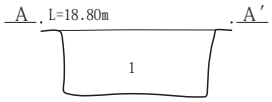
27号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックを含む。
98号土坑A-A′
1　暗灰褐色土　ロームブロック・炭化物を少量含み、ややしまりあり。
106号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とロームブロック(小径)が混入、
　　ややしまりあり、硬い。

0　1：40　1m

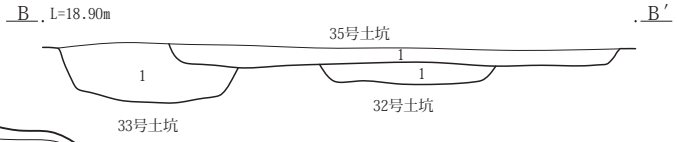
第38図　長方形土坑（６）

〈24･28～35号土坑〉

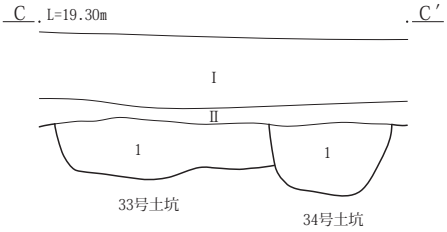




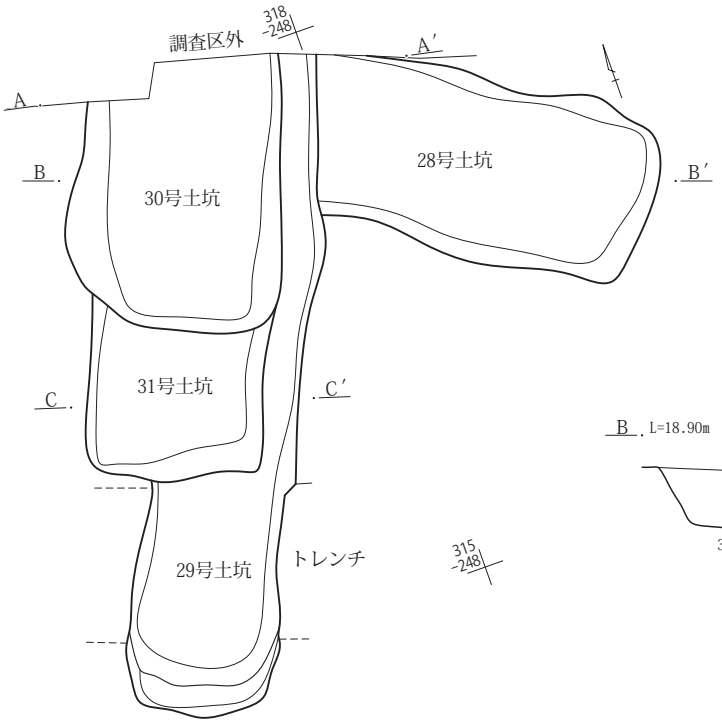
24号土坑A-A′
1　褐灰色土　ロームブロック・黒褐色土ブロックを多量に含み、焼土粒・炭化粒を極少量含む。

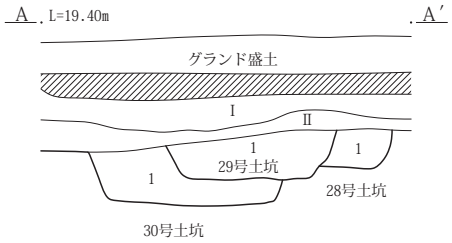


32号土坑B-B′
1　褐灰色土　茶褐色粒・黒褐色粒ブロックを少量含み、焼土粒・炭化粒が少量混入。
33号土坑B-B′ ・C-C′
1　褐灰色土　焼土粒・炭化粒を極少量含み、ローム粒・ブロックを多く含む。
35号土坑B-B′
1　褐灰色土　焼土粒・炭化粒・ローム粒が少量混入。

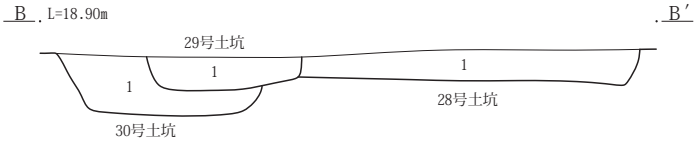


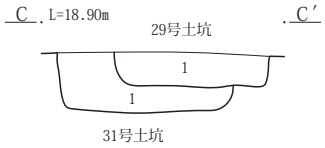
34号土坑C-C′
1　褐灰色土　炭化粒を極少量含み、茶褐色粒・ロームブロックを含む。





28号土坑A-A′・B-B′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックを含む。
29号土坑A-A′～C-C′
1　褐灰色土　小径のロームブロックと炭化粒を極少量含む。
30号土坑A-A′ B-B′
1　褐灰色土　小径のロームブロックを多量に含む。



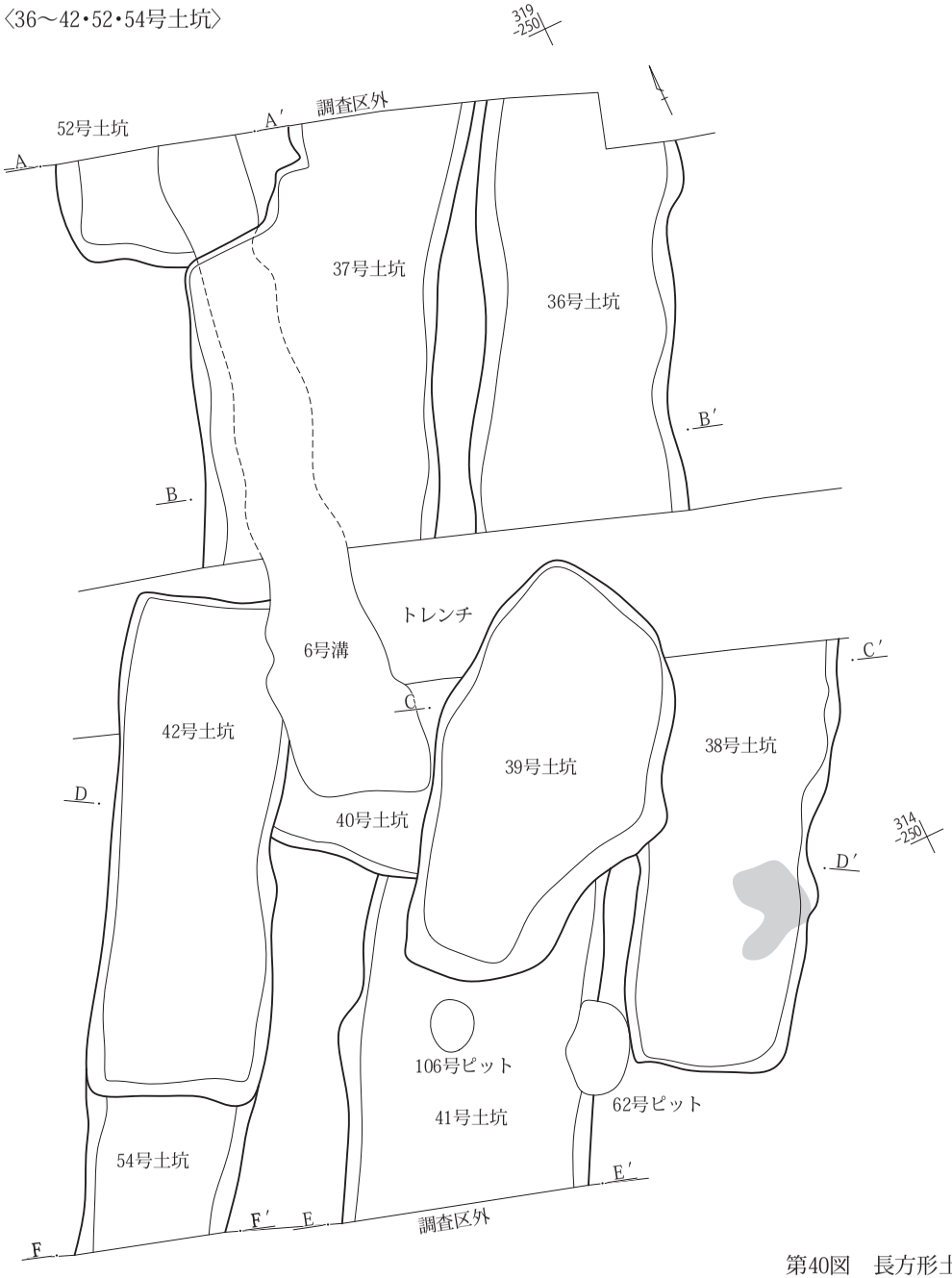


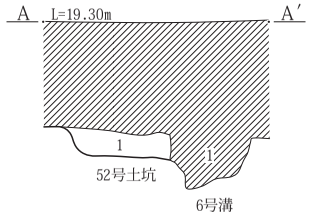
31号土坑C-C′
1　褐灰色土　30号土坑よりロームブロックの混入が多い。

0　1：40　1m

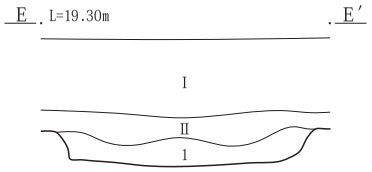
第39図　長方形土坑（７）

〈36～42・52・54号土坑〉

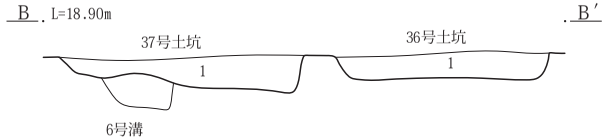




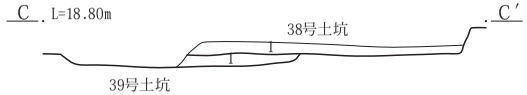
52号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒混入。



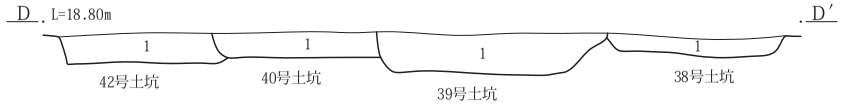
41号土坑E-E′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒も含む。



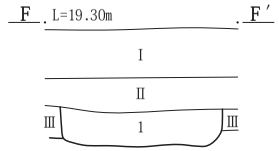
36号土坑B-B′
1　褐灰色土　ローム粒と炭化粒・焼土粒を極少量含む。
37号土坑B-B′
1　褐灰色土　ローム粒をやや多く含む。



38号土坑C-C′・D-D′
1　褐灰色土　ローム粒と炭化粒・焼土粒を極少量含む。
39号土坑C-C′・D-D′
1　褐灰色土　38号土坑よりややローム粒ブロックの混入が多い。



40号土坑D-D′
1　褐灰色土　41号土坑より炭化粒の混入が多い。
42号土坑D-D′
1　褐灰色土　41号土坑にローム粒ブロックが少量混入。

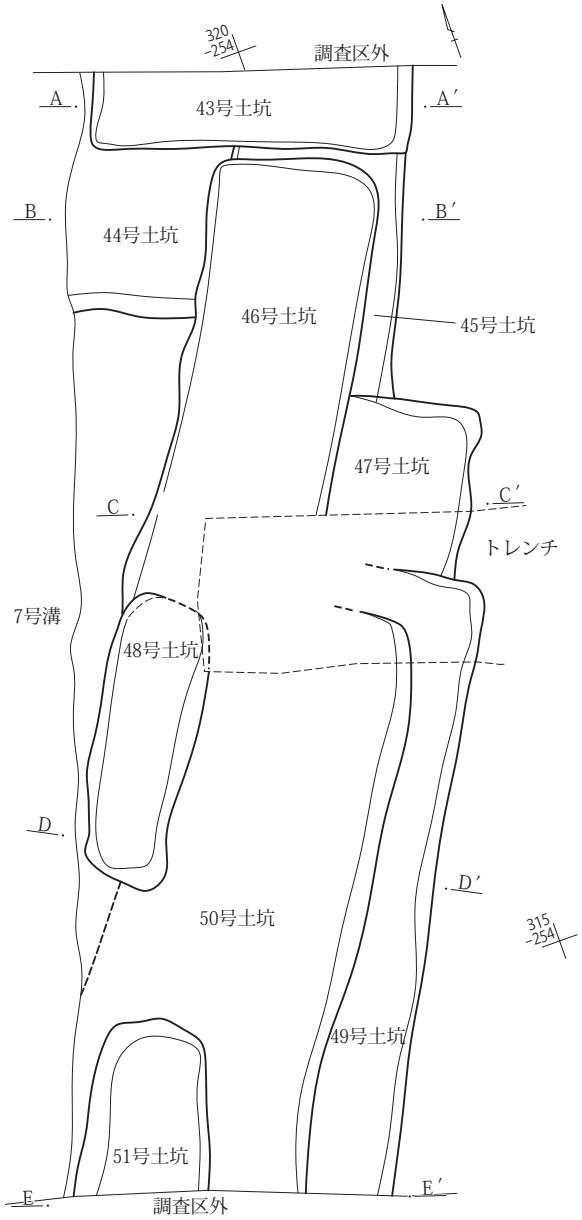


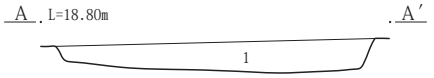
54号土坑F-F′
1　褐灰色土　茶褐色粒を多量に含む。

0　1：40　1m

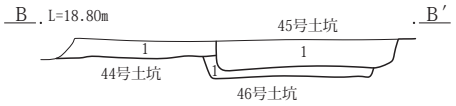
第40図　長方形土坑（８）

〈43～51号土坑〉

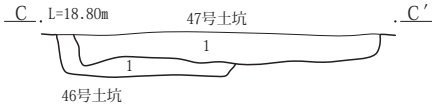




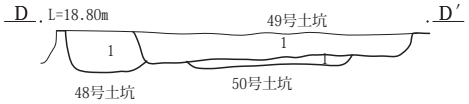
43号土坑A-A′
1　くすんだ灰褐色土とロームブロック混土、炭化物を少量含む。



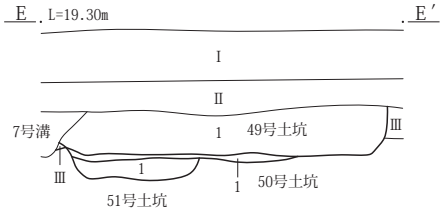
44号土坑B-B′
1　くすんだ灰褐色土とロームブロック混土、炭化物を少量含む。
45号土坑B-B′
1　くすんだ灰褐色土とロームブロック混土、炭化物を少量含む。
46号土坑B-B′
1　暗灰褐色土とロームブロック混土　炭化物を少量含み、やや硬質。



47号土坑C-C′
1　暗灰褐色土とロームブロック混土　炭化物を少量含み、やや硬質。
48号土坑C-C′
1　暗灰褐色土とロームブロック混土　炭化物を少量含み、やや硬質。



49号土坑D-D′・E-E′
1　褐灰色土　炭化粒･焼土粒を極少量含み､ローム粒･ブロックを含む。
50号土坑D-D′・E-E′
1　褐灰色土　49号土坑より炭化粒が多く、ローム粒・ブロックが少ない。

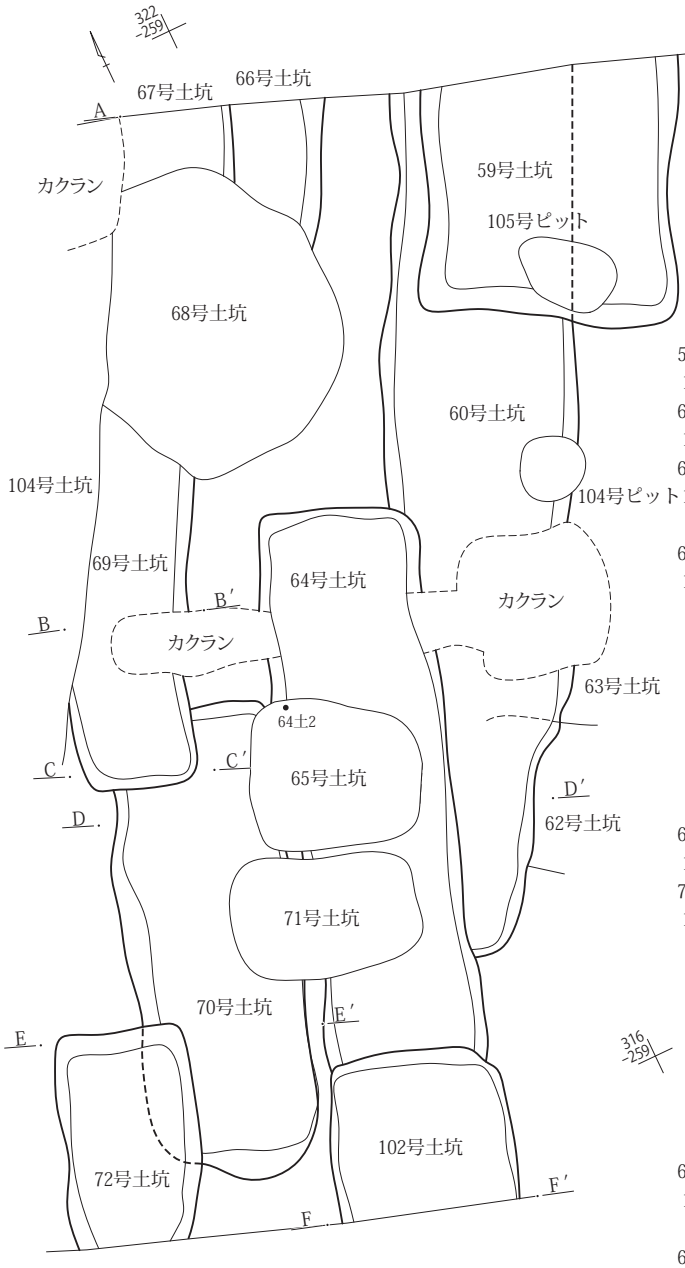


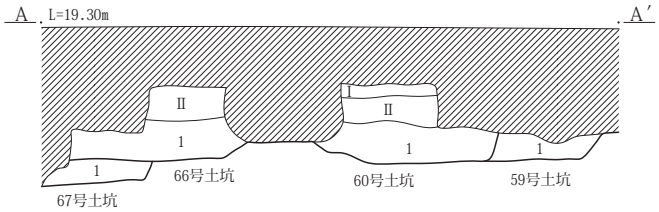
51号土坑E-E′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックを多量含む。

0　1：40　1m

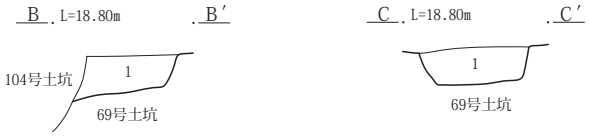
第41図　長方形土坑（９）

〈59・60・63・64・66・67・69・70・72・102号土坑〉

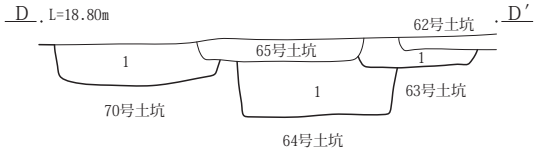




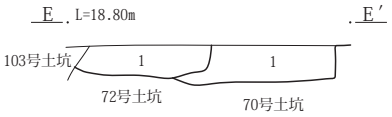
59号土坑A-A′
1　褐灰色土　ローム粒を少量含み、極少量の炭化粒・焼土粒を含む。
60号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量含み、ローム粒・ブロックを含む。
66号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒・ブロックを少量含む。
67号土坑A-A′
1　褐灰色土　66号土坑よりもローム粒が多く含み、ロームブロックの径も大きい。



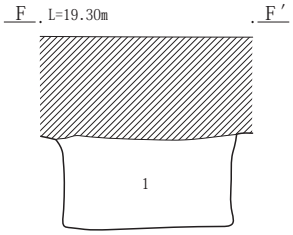
69号土坑B-B′・C-C′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒を含む。
70号土坑D-D′
1　褐灰色土　ロームブロックが多量混入、炭化粒・焼土粒を極少量含む。



63号土坑D-D′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒・ローム粒を極少量含み、ロームブロック（小径）が混入。
64号土坑D-D′
1　褐灰色土　ロームブロックが多量混入、炭化粒・焼土粒極少量含む。



70号土坑E-E′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックが混入。
72号土坑E-E′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒を含む。

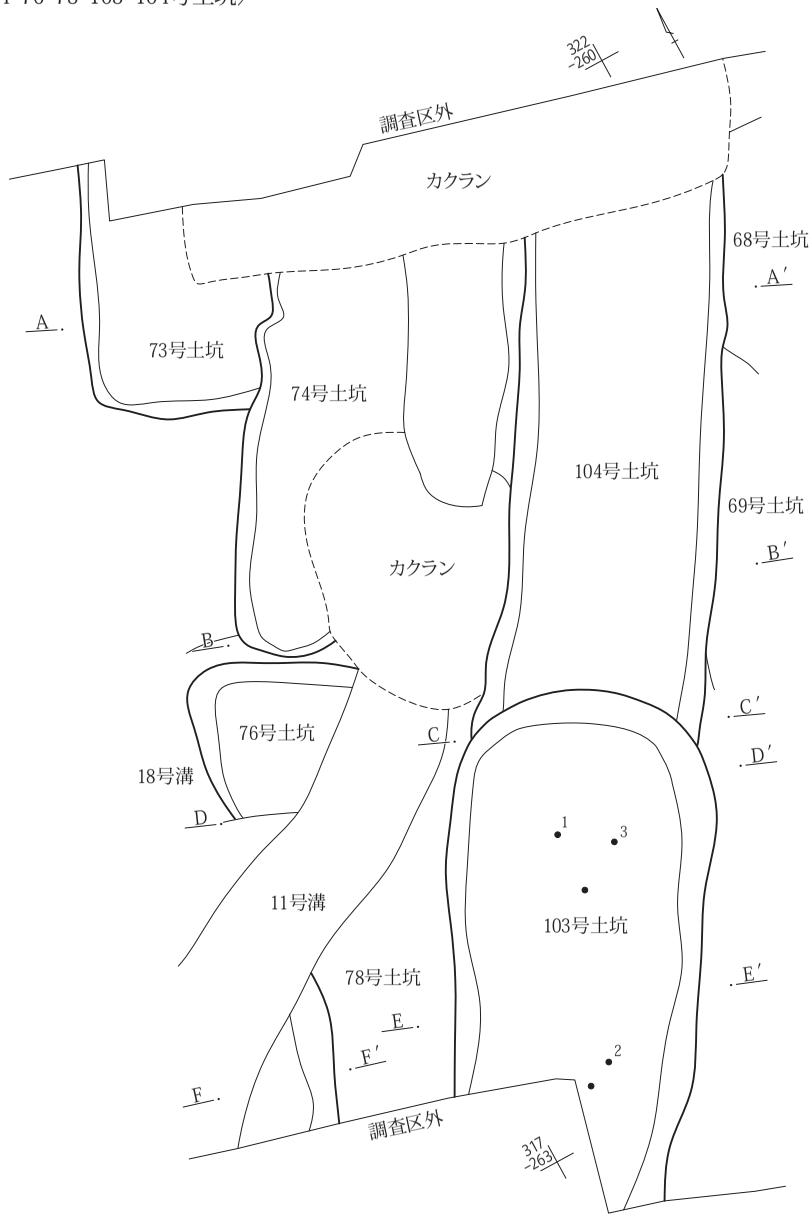


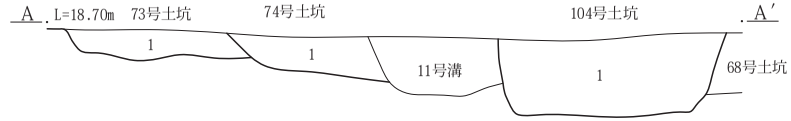
102号土坑F-F′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒を含む。

0　1：40　1m

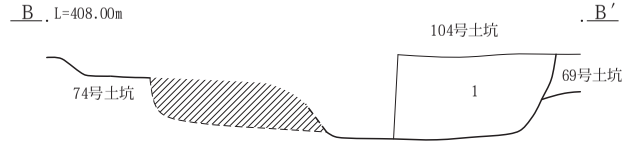
第42図　長方形土坑(10)

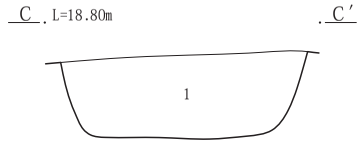
〈73・74・76・78・103・104号土坑〉

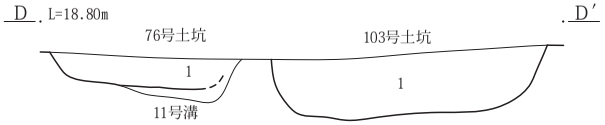




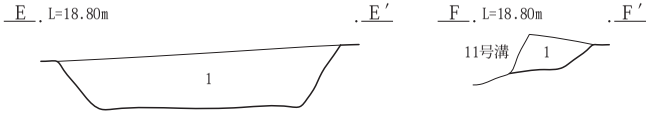
73号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量含み、ローム粒・ブロックが少量混入。
74号土坑A-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒が極少量、ローム粒・ブロックが少量含み、径の大きめなロームブロックが混入。
104号土坑A-A′～C-C′
1　褐灰色土　ローム粒を少量と炭化粒・焼土粒を極少量含む。







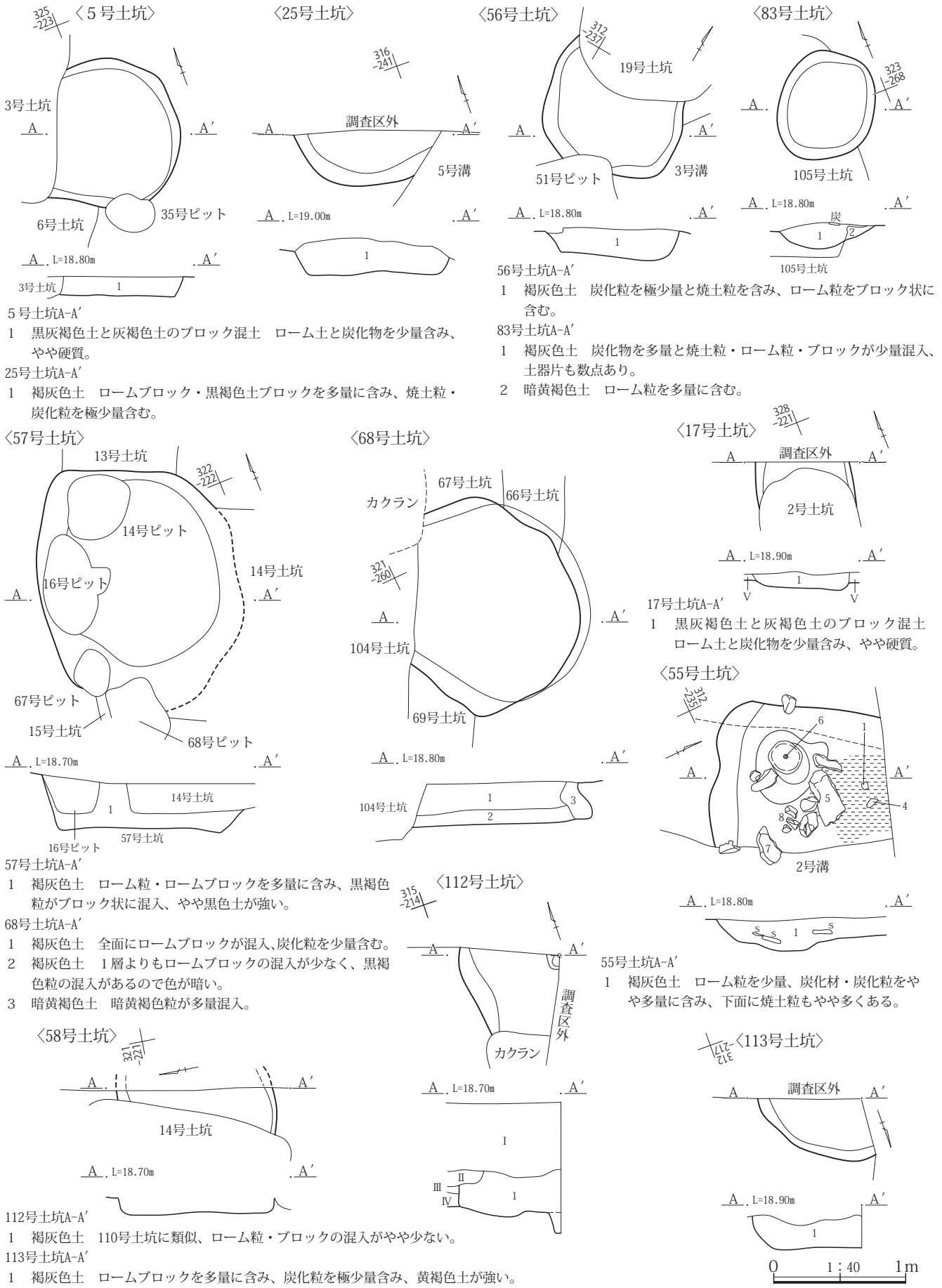
76号土坑D-D′
1　褐灰色土　炭化粒を少量とローム粒・ブロックが混入。



103号土坑D-D′・E-E′
1　褐灰色土　ローム粒を少量と炭化粒・焼土粒を極少量含む。
78号土坑F-F′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量含む。

0　1：40　1m

第43図　長方形土坑(11)



５号土坑A-A′

1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土　ローム土と炭化物を少量含み、やや硬質。

25号土坑A-A′

1　褐灰色土　ロームブロック・黒褐色土ブロックを多量に含み、焼土粒・炭化粒を極少量含む。

56号土坑A-A′

1　褐灰色土　炭化粒を極少量と焼土粒を含み、ローム粒をブロック状に含む。

83号土坑A-A′

1　褐灰色土　炭化物を多量と焼土粒・ローム粒・ブロックが少量混入、土器片も数点あり。

2　暗黄褐色土　ローム粒を多量に含む。

17号土坑A-A′

1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土　ローム土と炭化物を少量含み、やや硬質。

57号土坑A-A′

1　褐灰色土　ローム粒・ロームブロックを多量に含み、黒褐色粒がブロック状に混入、やや黒色土が強い。

68号土坑A-A′

1　褐灰色土　全面にロームブロックが混入､炭化粒を少量含む。

2　褐灰色土　１層よりもロームブロックの混入が少なく、黒褐色粒の混入があるので色が暗い。

3　暗黄褐色土　暗黄褐色粒が多量混入。

55号土坑A-A′

1　褐灰色土　ローム粒を少量、炭化材・炭化粒をやや多量に含み、下面に焼土粒もやや多くある。

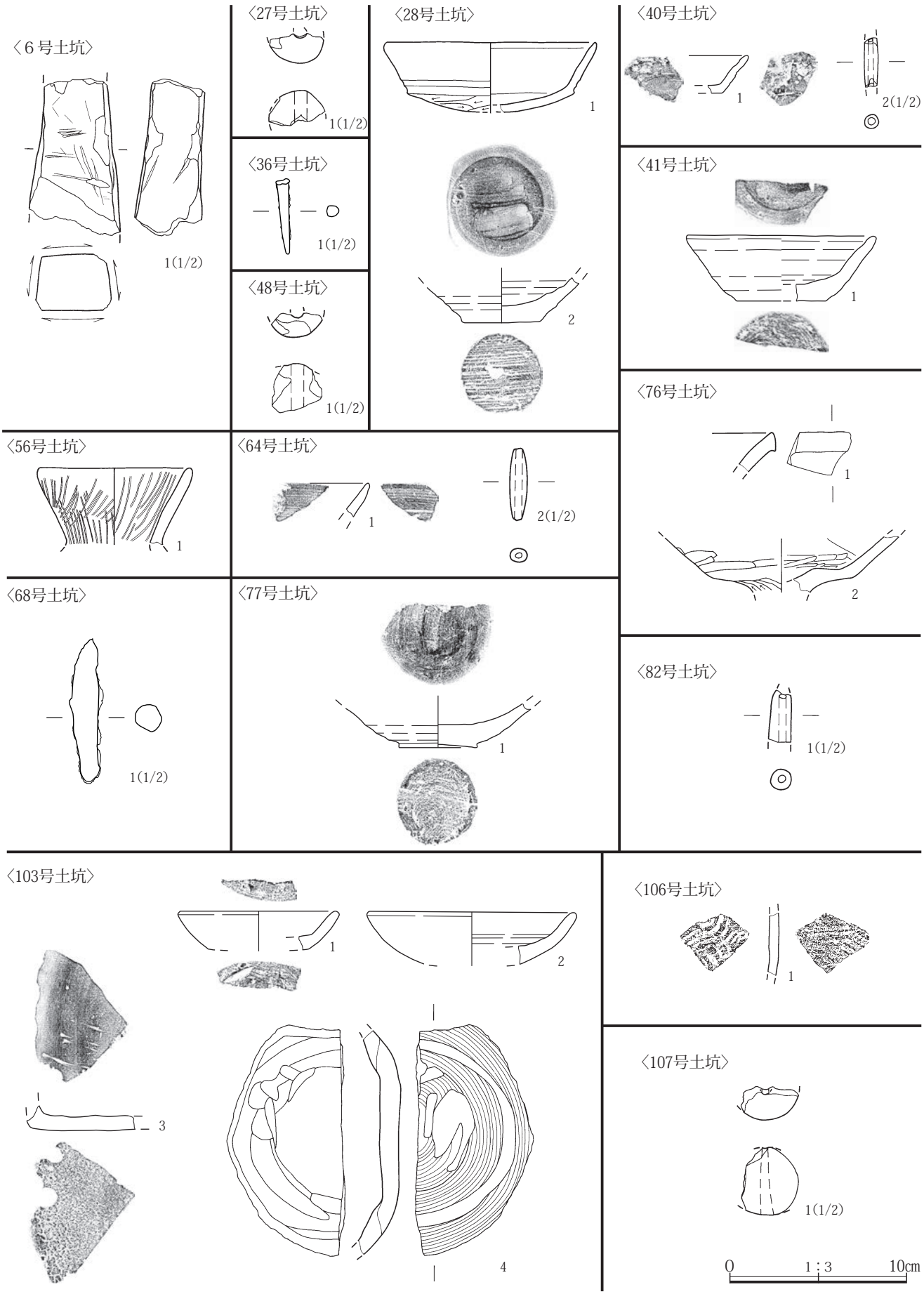
112号土坑A-A′

1　褐灰色土　110号土坑に類似、ローム粒・ブロックの混入がやや少ない。

113号土坑A-A′

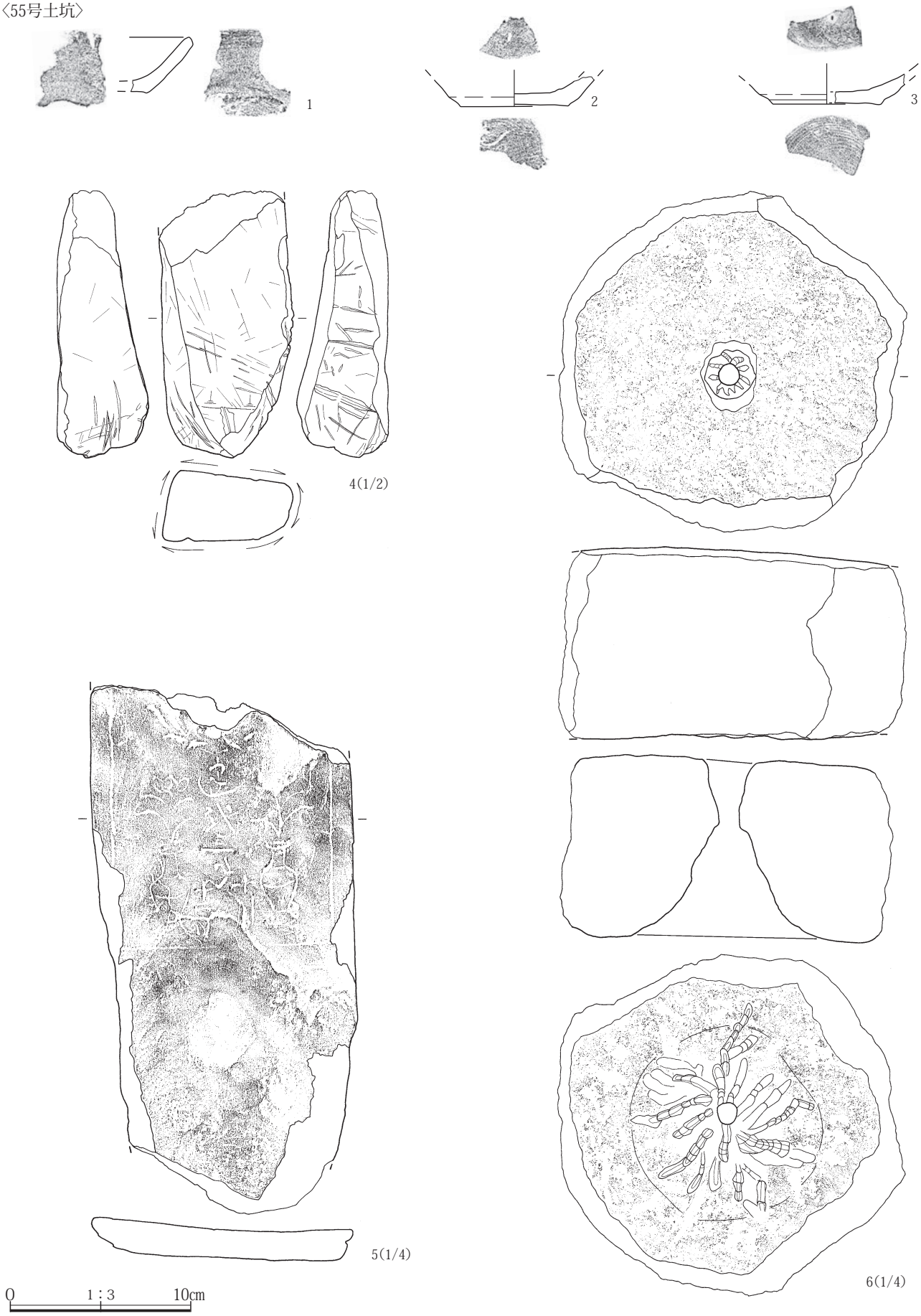
1　褐灰色土　ロームブロックを多量に含み、炭化粒を極少量含み、黄褐色土が強い。

第44図　円形土坑・不整形土坑

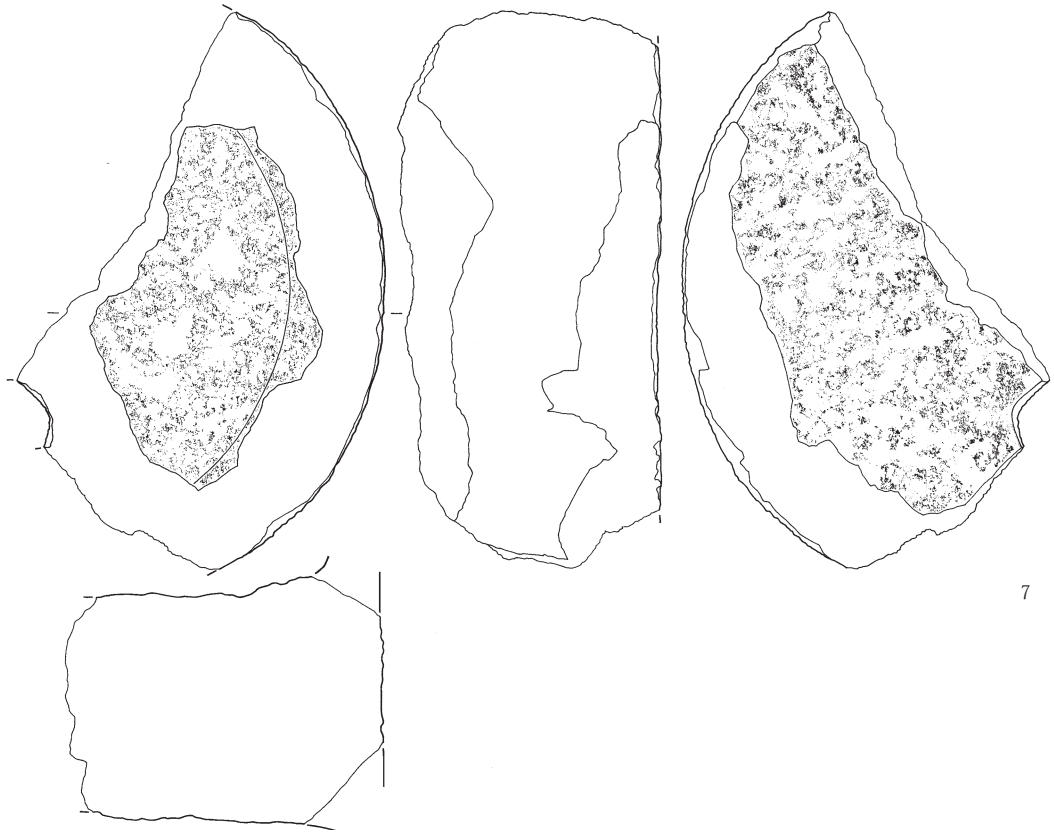


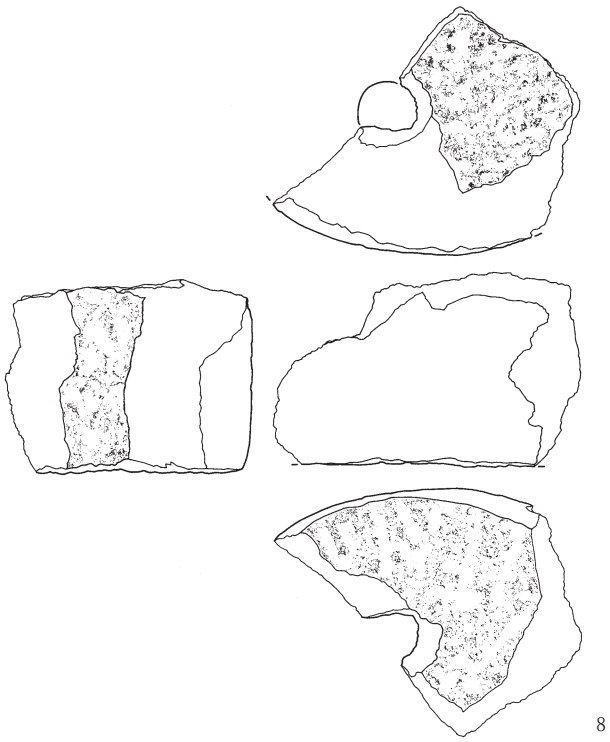
第45図　土坑出土遺物（１）

〈55号土坑〉



第46図　土坑出土遺物（２）





0　1：4　10cm

第47図　土坑出土遺物（３）

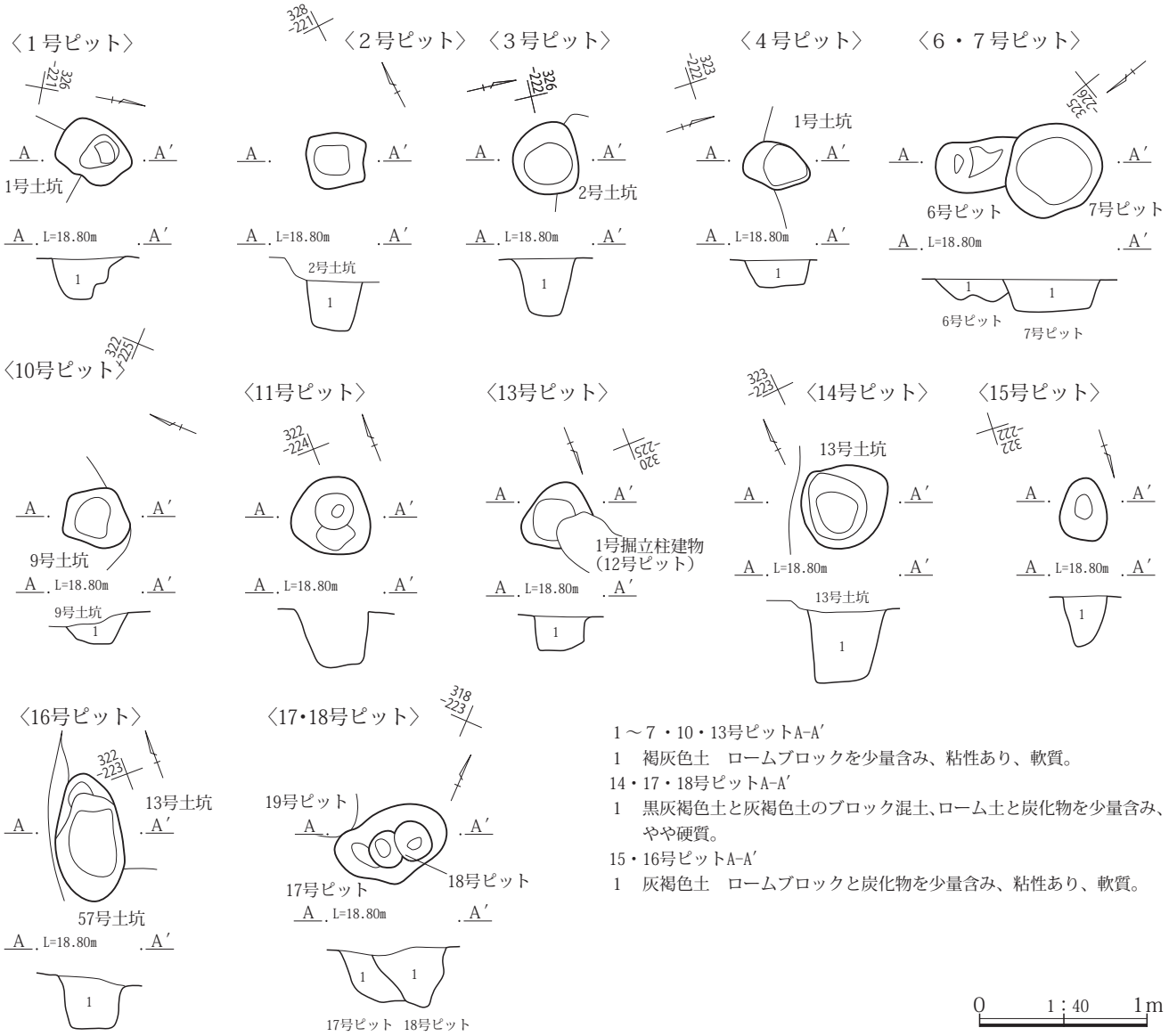
７．ピット（第48～55図、PL.15・18）

計122本のピットが確認されている。その内訳は１区57本（46.7％）、２区54本（44.3％）、７区11本（9.0％）であり、３～６区では確認されていない。

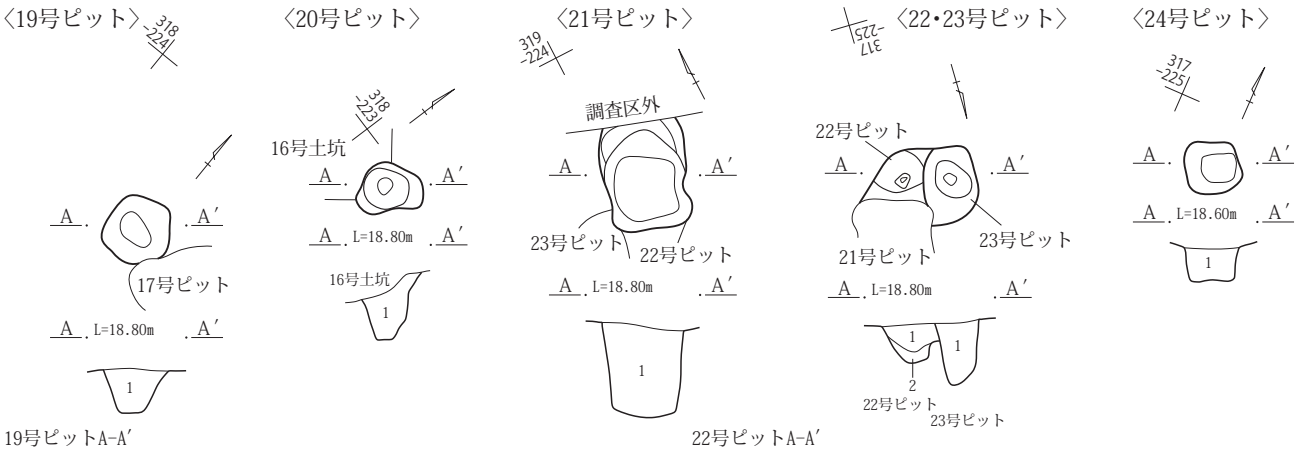
区別ピットの分布傾向としては、調査対象地の東側に集中するということになるが、調査区は東西に長く、西側にもピット分布域があり、東西二群からなるとするのが妥当であろう。

前項では、溝を地境溝として捉えることができるか検討してみた。この予測が妥当か、現状では結論づけられないが、あくまでもピットの多寡を検討する際の目安として、溝で区切られたピット数を比べてみると、11－16号溝間がピット39基、４・５－11号溝間がピット11基、４・５号溝より東ピット81基となり、調査区の中央付近のピット数が少ないのが分かる。掘立柱建物のピットとしたものは、大部分が深さ0.30mを超えているが、掘り上げたピットには深さ0.10m程度のものも多く、木の根を誤認したものもあるかもしれない。こうした可能性を踏まえならば、ピットの実数は現状の122本を下まわることが確実だが、これを差し引いてなお、ピットが東西二群に分布する傾向は変わらないものと思われる。

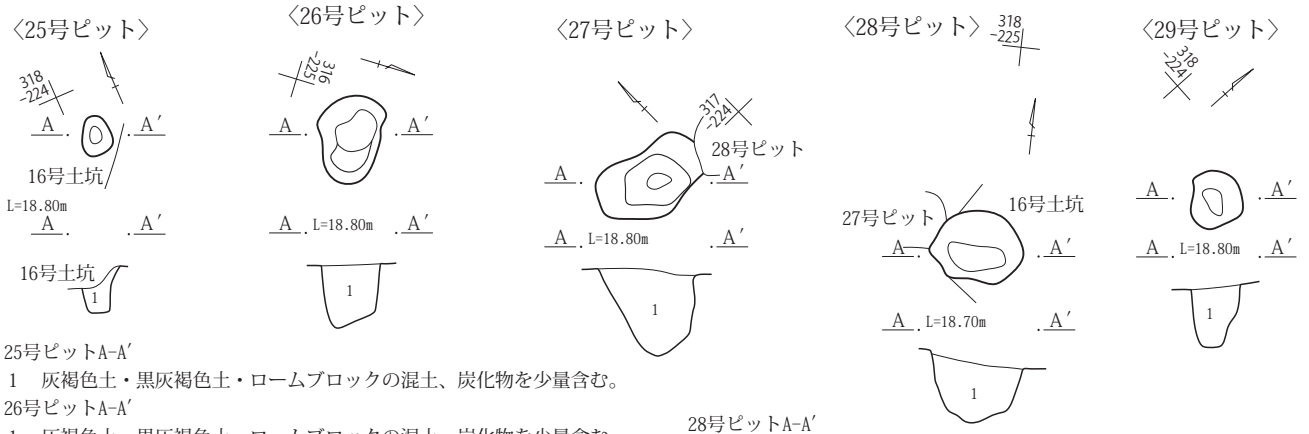
検出されたピットは径40cm弱、深さ30cm程度のものが多い。円形を基調とするもののほか、なかには方形を基調としたものもある。これが時期差を示しているのか判然とせず、これについて実態を明らかにすることはできなかった。



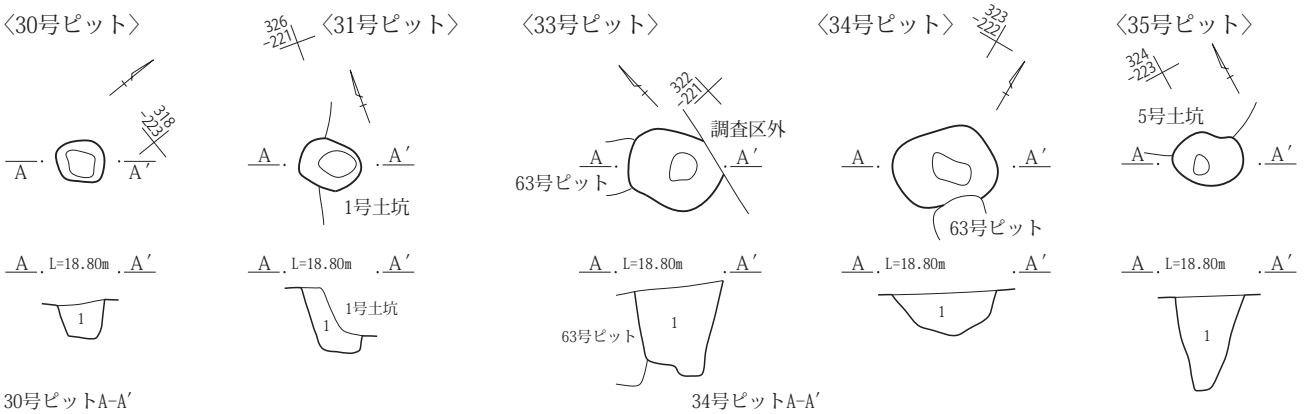
第48図　ピット（１）



19号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量含む。
20号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
21号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
22号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
2　灰褐色土
23号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
24号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。



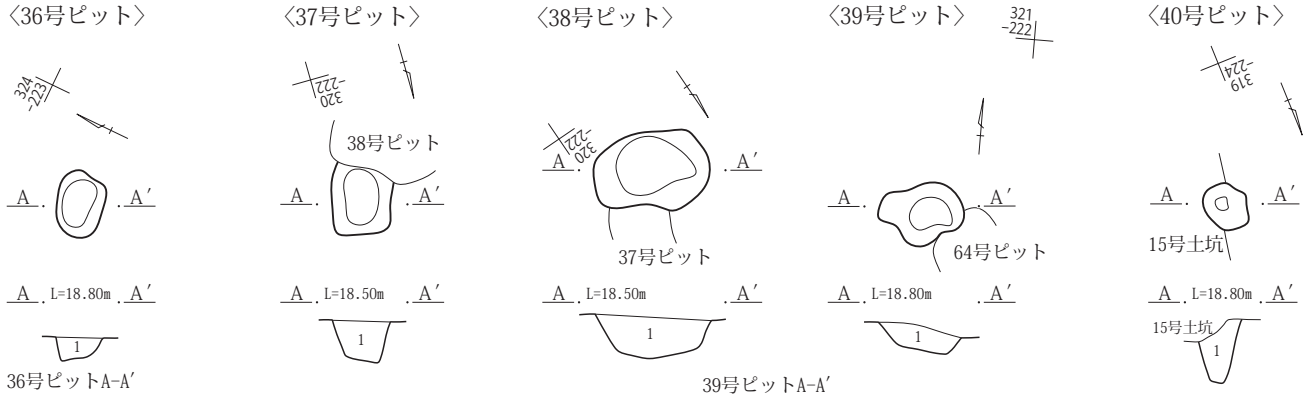
25号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
26号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
27号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
28号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
29号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。



30号ピットA-A′
1　灰褐色土・黒灰褐色土・ロームブロックの混土、炭化物を少量含む。
31号ピットA-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、粘性あり、軟質。
33号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量む。
34号ピットA-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、粘性あり、軟質。
35号ピットA-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、粘性あり、軟質。

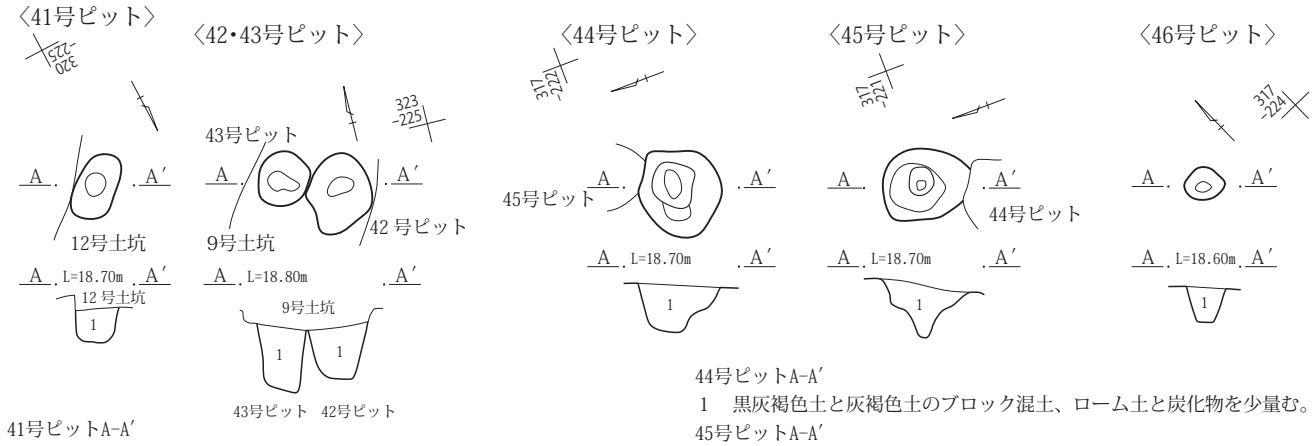
0　1：40　1m

第49図　ピット（２）



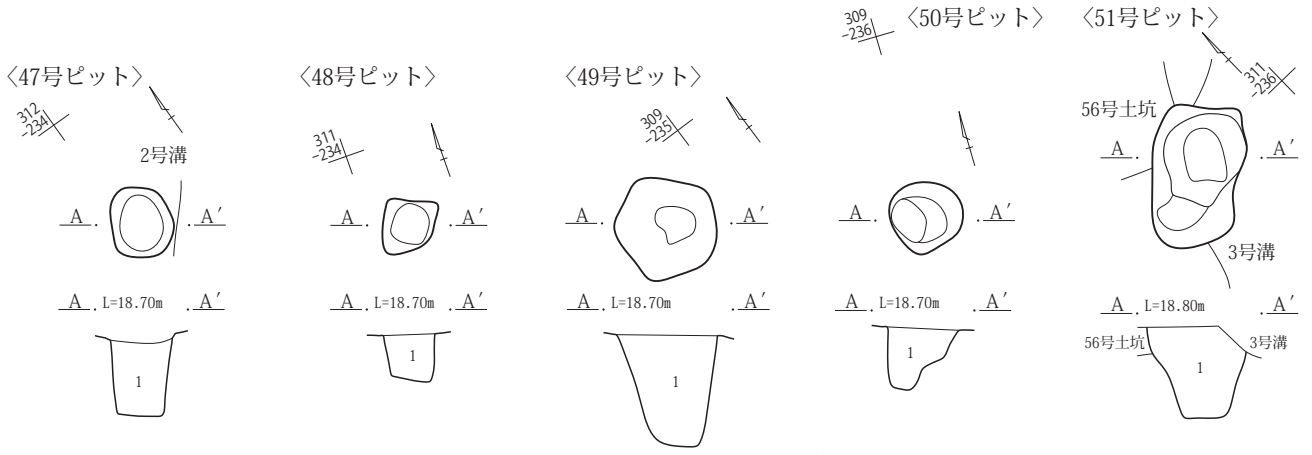
36号ピットA-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、粘性あり、軟質。
37号ピットA-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、粘性あり、軟質。
38号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量む。

39号ピットA-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、粘性あり、軟質。
40号ピットA-A′
1　灰褐色土　ロームブロックと炭化物を少量含み、粘性あり、軟質。



41号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量む。
42号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量む。
43号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量む。

44号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量む。
45号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量む。
46号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と灰褐色土のブロック混土、ローム土と炭化物を少量む。

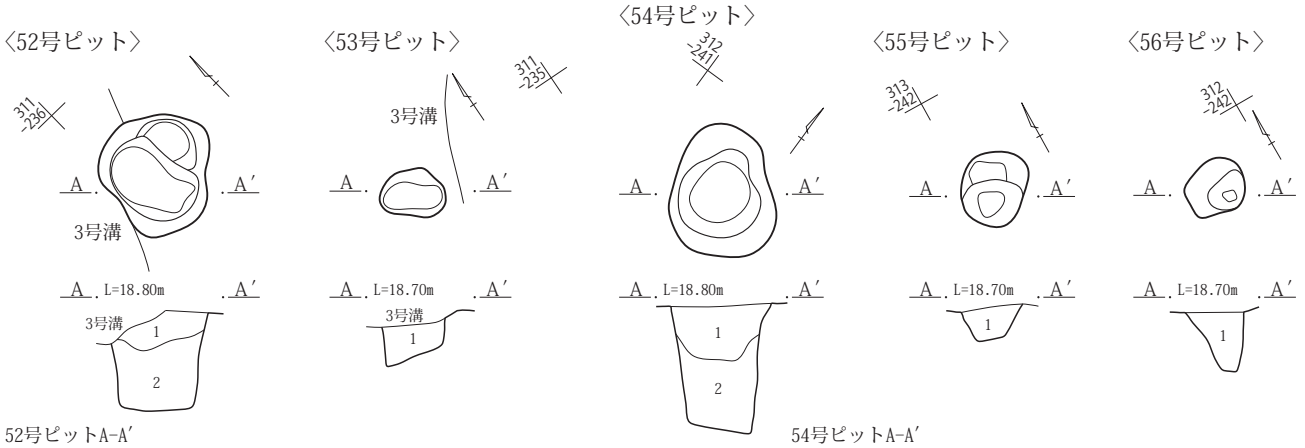


47号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と褐灰色土の混土、ロームブロック・炭化物を少量含み、ややしまりあり。
48号ピットA-A′
1　褐灰色土　ロームブロックを少量含む。
49号ピットA-A′
1　黒灰褐色土と褐灰色土の混土、ロームブロック・炭化物を少量含む。

50号ピットA-A′
1　褐灰色土　ロームブロックを少量含み、粘性あり、軟質。
51号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒・茶褐色粒を含む。

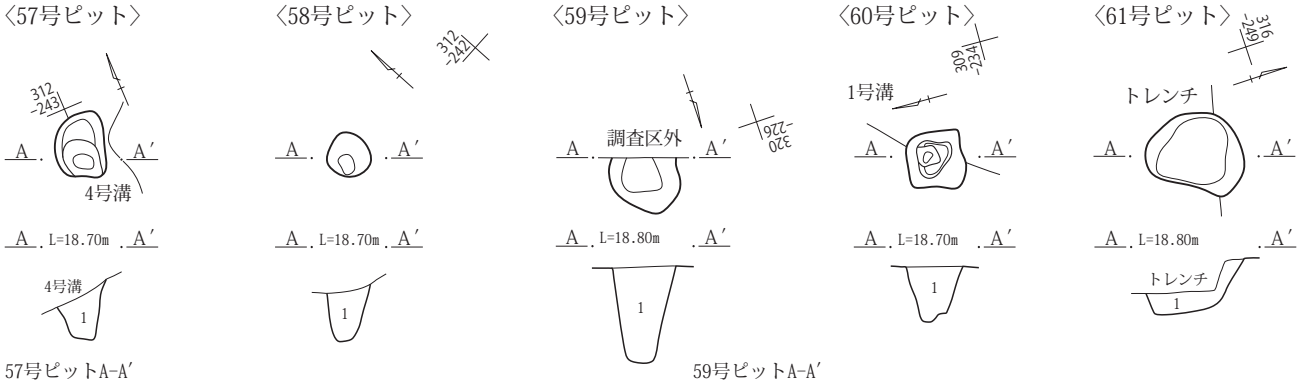
0　1：40　1m

第50図　ピット（３）



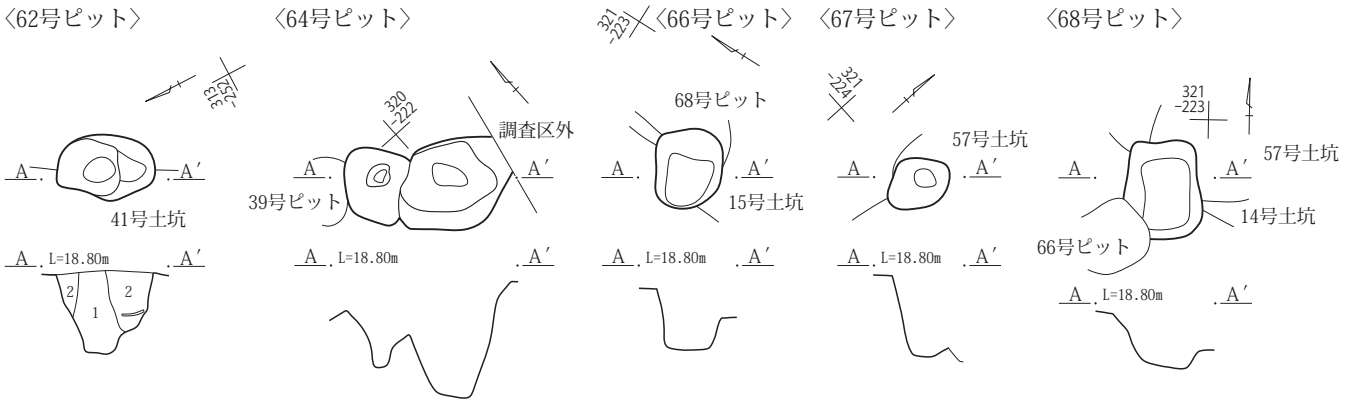
52号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックが混入。
2　褐灰色土　ローム粒・ブロックが１層より少ない。
53号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックが多量に混入。

54号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を少量とローム粒を含む。
2　褐灰色土　ローム粒・ロームブロックが１層より多い。
55号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒と炭化粒を極少量に含む。
56号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒を少量と炭化物を含む。



57号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒を極少量と炭化物を含む。
58号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒を極少量と炭化物を含む。

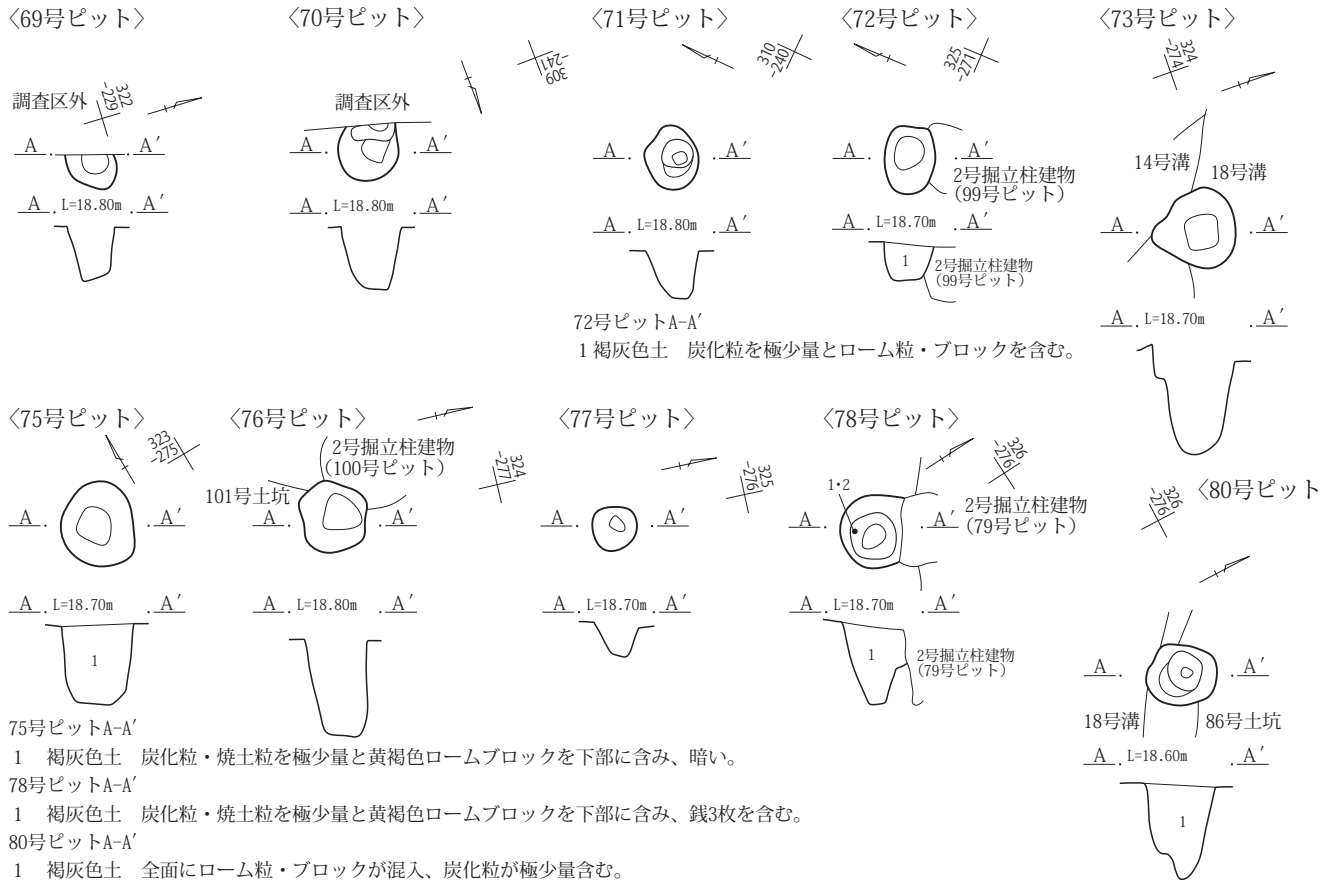
59号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックが多量に混入。
60号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒を極少量と炭化物を含む。
61号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒を極少量と炭化物を含む。



62号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックが多量に混入、炭化粒が少量含む。
2　褐灰色土　１層よりローム粒・ブロックが少なく、炭化粒・焼土粒が極少量に混入。

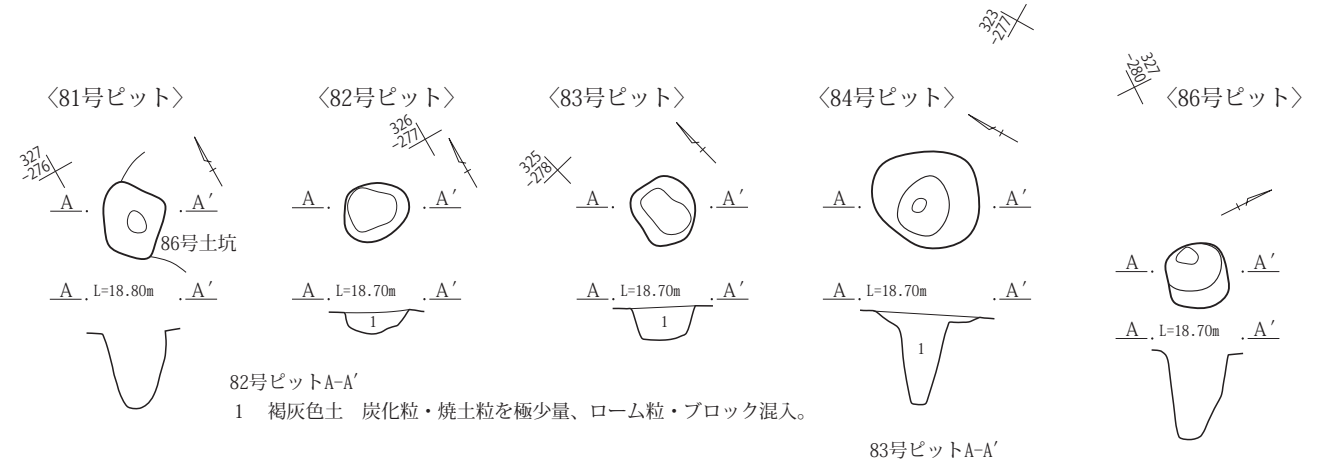
0　1：40　1m

第51図　ピット（４）



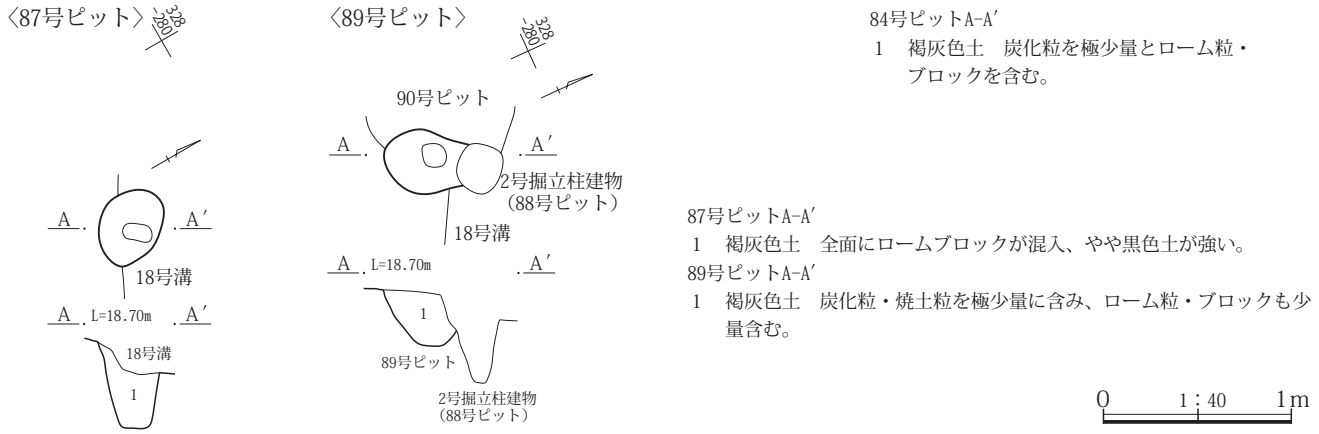
72号ピットA-A′
1 褐灰色土　炭化粒を極少量とローム粒・ブロックを含む。

75号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量と黄褐色ロームブロックを下部に含み、暗い。
78号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量と黄褐色ロームブロックを下部に含み、銭3枚を含む。
80号ピットA-A′
1　褐灰色土　全面にローム粒・ブロックが混入、炭化粒が極少量含む。



82号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量、ローム粒・ブロック混入。

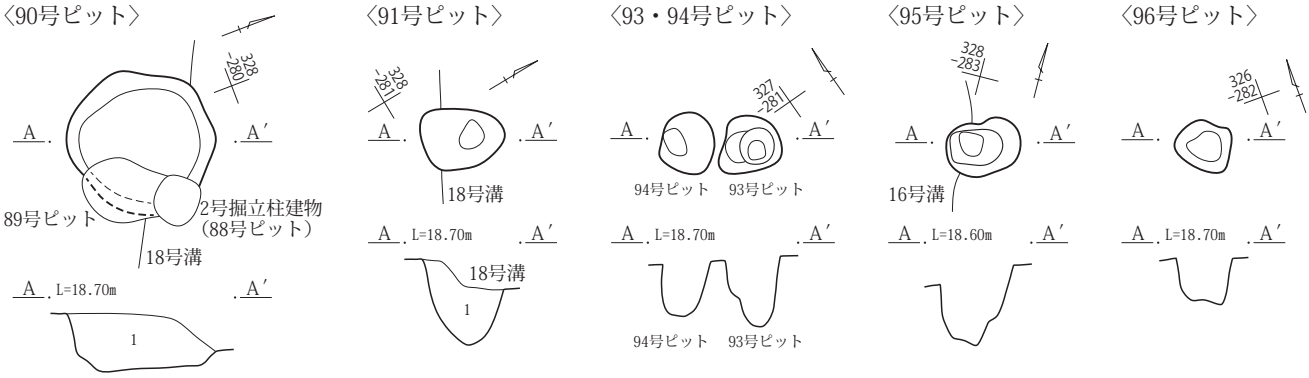
83号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒を極少量とローム粒・ブロックを含む。
84号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒を極少量とローム粒・ブロックを含む。



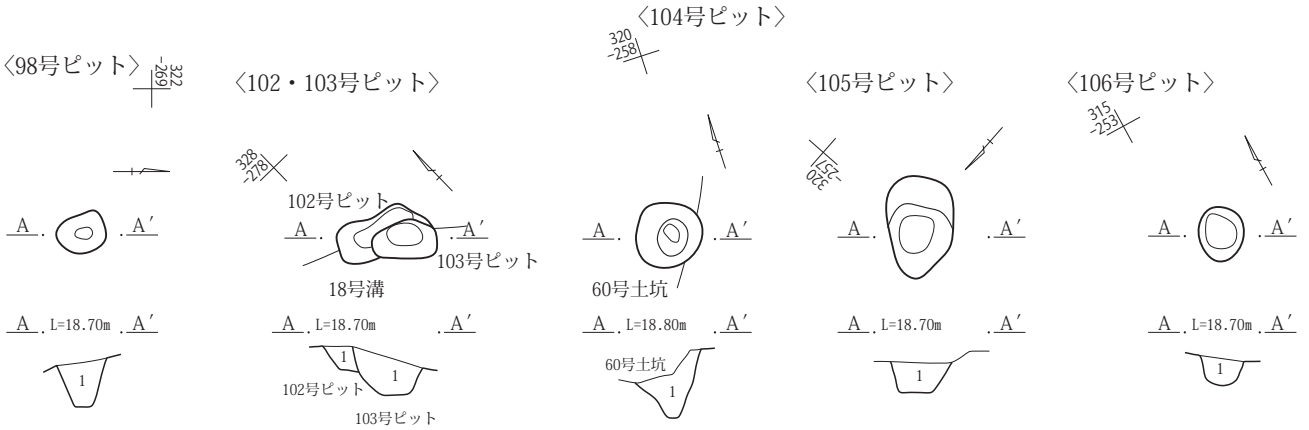
87号ピットA-A′
1　褐灰色土　全面にロームブロックが混入、やや黒色土が強い。
89号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量に含み、ローム粒・ブロックも少量含む。

0　1：40　1m

第52図　ピット（５）

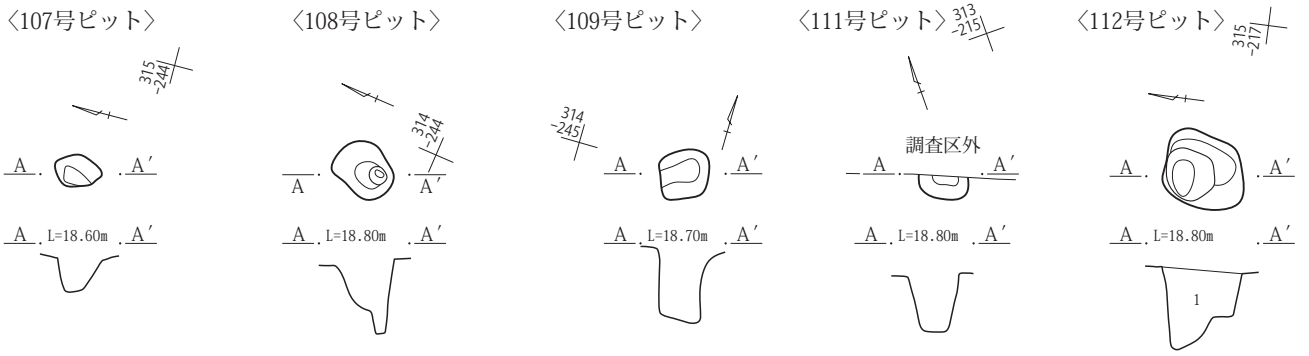


90号ピットA-A′
1　黒褐色土　黒色粒を多く含み、ローム粒・ブロックも少量含む。
91号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量に含み、ローム粒・ブロックも少量含む。



98号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックを含む。
102号ピットA-A′
1　褐灰色土　103号ピットよりローム粒・ブロックの混入が少ない。
103号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックを多量に含み、炭化粒・焼土粒が極少量含む。

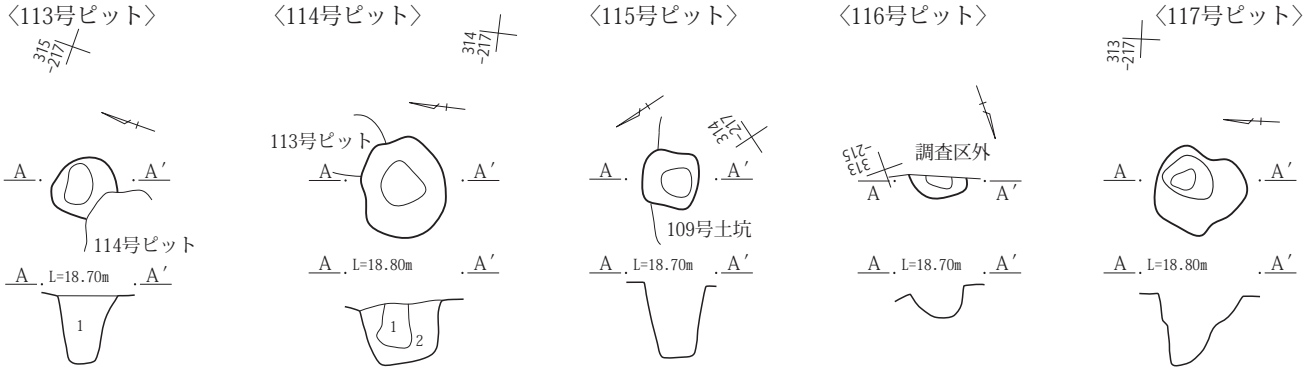
104号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックが少量混入。
105号ピットA-A′
1　褐灰色土　ローム粒・ブロックが少量混入。
106号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックが混入。



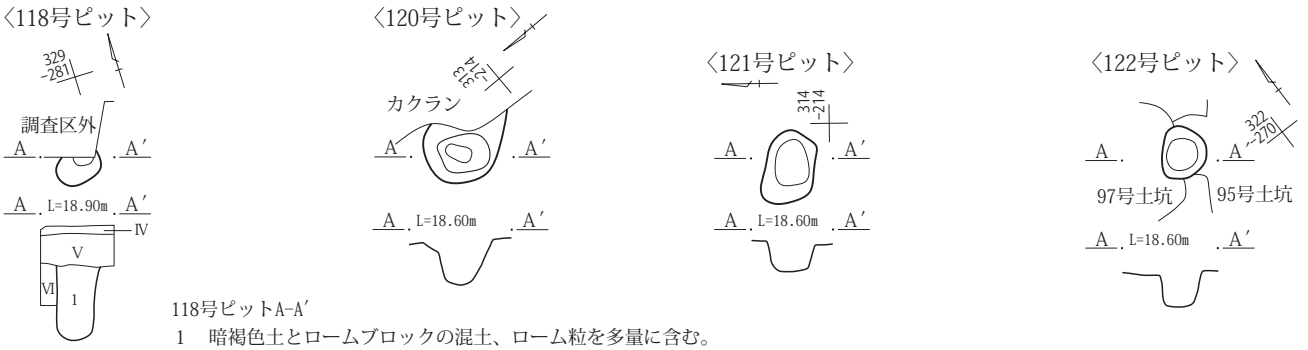
112号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック（小径）を含む。

0　1：40　1m

第53図　ピット（６）



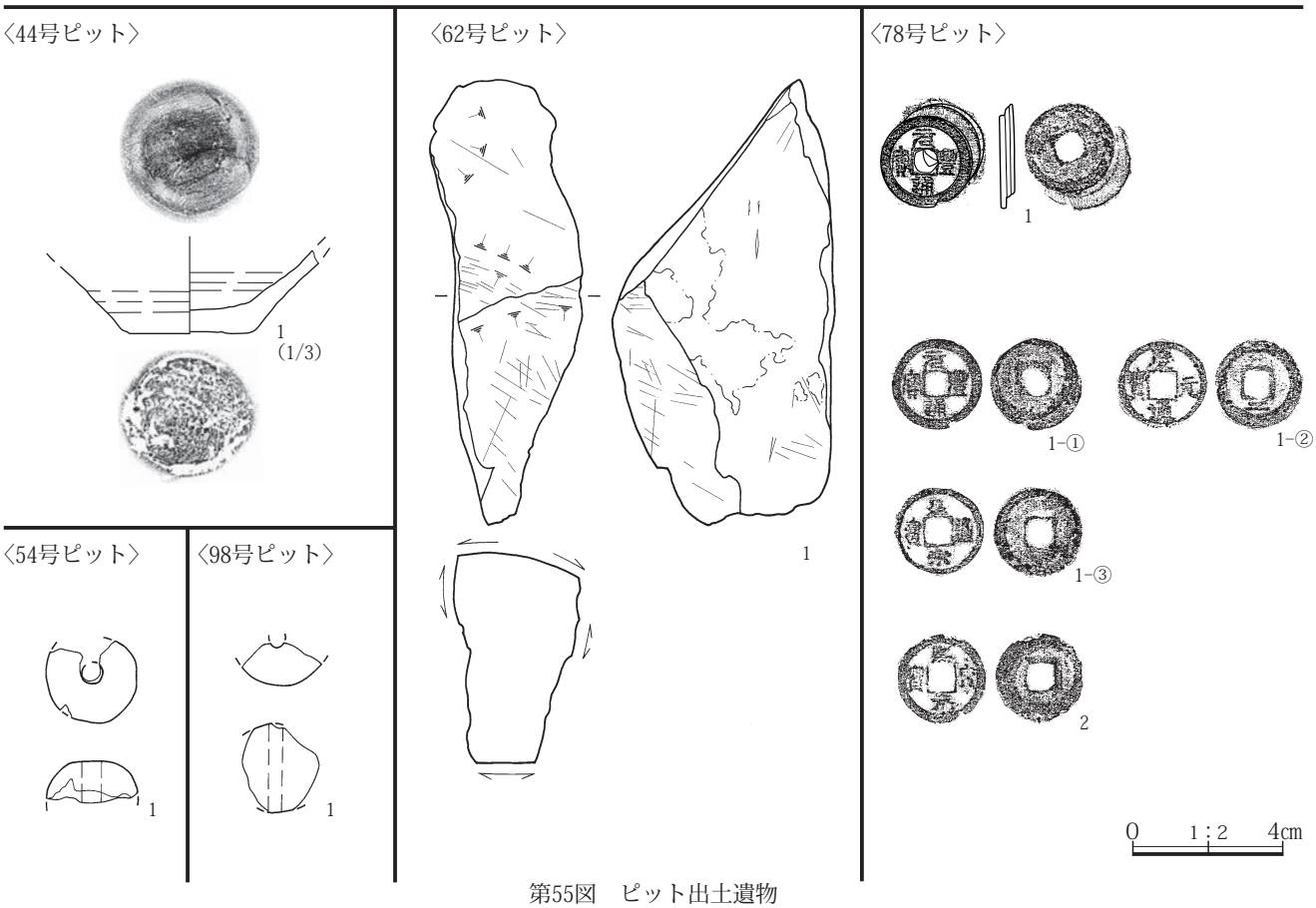
113号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)を含む。
114号ピットA-A′
1　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロック(小径)を含む。
2　褐灰色土　炭化粒・焼土粒を極少量とローム粒・ブロックを多混。



118号ピットA-A′
1　暗褐色土とロームブロックの混土、ローム粒を多量に含む。

0　1：40　1m

第54図　ピット（７）

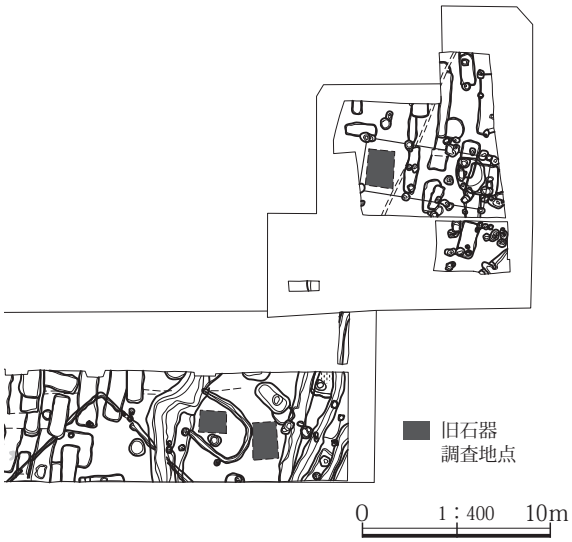


第55図　ピット出土遺物

第３節　包含層出土の遺物

１．旧石器時代

旧石器時代の遺構・遺物について、第 56 図の通り、３地点で確認調査をおこなった。冒頭、周辺遺跡の項でも述べたとおり、遺跡所在地周辺にはローム層が良好に堆積しており、多々良沼へ続く鞍掛地区の「古砂丘」では複数の旧石器遺跡が確認されている。こうしたことから本遺跡でも旧石器が確認されるものと期待していたが、当該期石器群についてその存在を確認することはできなかった。



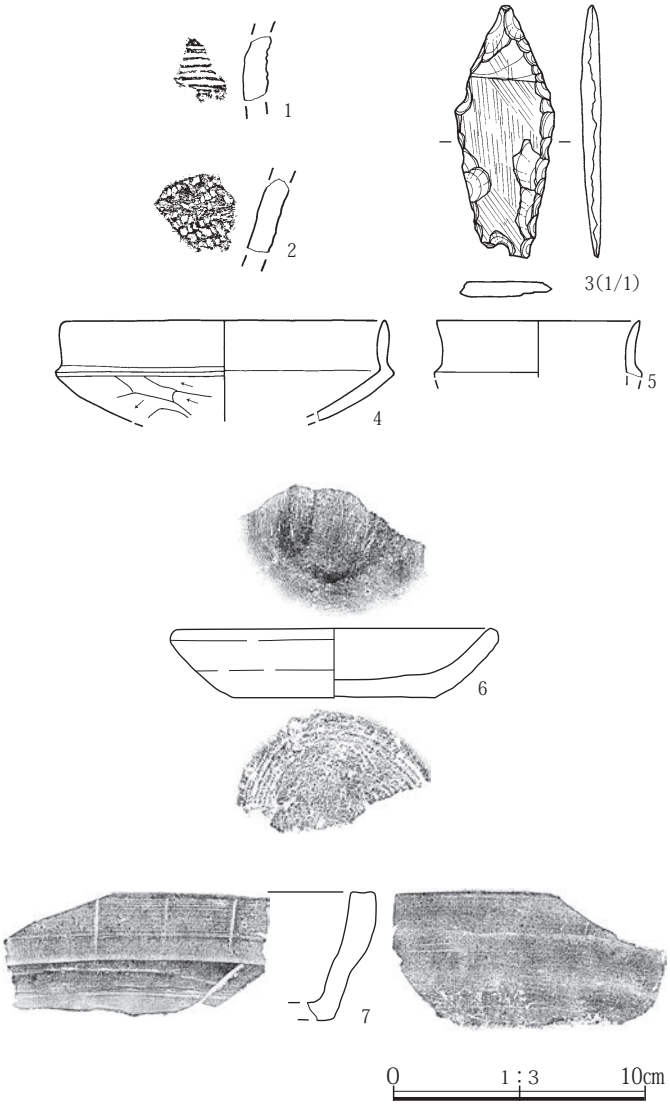
第56図　旧石器調査区図

２．包含層出土遺物(第57図)

縄文土器２点(第57図１・２)と石鏃１点(第57図３)が包含層から出土したほか、古墳時代杯類(第57図４・５)や、近世陶器(第57図６・７)が遺構外出土の遺物として出土している。なお、非掲載土師器片は、古墳時代竪穴建物から杯類27点(137g)、高杯類２点(51g)、甕類288点(2901g)が、土坑等から杯類301点(762g)、高杯類７点(117g)、甕類881点(4194g)が出土、非掲載須恵器片は古墳時代竪穴建物から壺類１点(２g)、土坑等から壺類８点(159g)、杯類11点(349g)が出土した。非掲載土師器片は竪穴建物が確認されている１・２区の出土量が多く、校舎北側の出土量が少ない。非掲載陶磁器類については、遺構別に出土量をカウントして第５表に示したので参照されたい。

縄文土器２点は小片だが、２点とも縄文時代前期土器片で、３区から出土した。第 57 図１が前期諸磯ｃ式土器片、２が諸磯ｃ式期並行の浮島式期の土器片である。第 57 図３は、縄文期磨製石鏃である。表裏面とも研磨したのち、周辺加工して石鏃に仕上げている。

上記の通り、縄文期遺物は少量だが、それが出土しているということは、本遺跡周辺域にも前期集落があるということを示唆する。土器片出土地は３区ということであるが、遺跡地西側には浅い谷が入り込んでおり、縄文期遺構は西側の浅い谷に面して広がるのかもしれない。縄文期遺構と中・近世遺構は分布域が異なるということだろう。



第57図　包含層出土遺物

第４章　調査の成果

第１節　中世関連遺構について

１．台遺跡の様相

掘立柱建物は１区の西端と２区で各１棟が見つかったが、ピットは２区の方が多く、分布から建物が２・３棟重複する可能性もうかがえる。屋敷地として考えると、１区の東端にある１～３号溝の一群と、４・５溝がともに南北軸を採り、区画溝としての機能が想定できる。最も後出となる３号溝と４号溝は、ほぼ並行関係にあり、区画として連携する溝とも思える。これらの溝からは、在地系の焙烙や土器皿が出土し、周辺が生活域である証左となる。２区を含む空間は、１～５号溝のいずれかを西辺とする屋敷遺構であった可能性が高い。

本遺構群で最も特徴的なものは、１区中央に集中する長方形～細長い長方形を呈する長方形土坑群であろう。重複も顕著であり、繰り返し作られたものである。主軸方位は20～30度前後北より東に振れる傾向で一致する。幅は50～100㎝が大半であるが、長さはバラツキがある。残存する深さは10～20㎝台が多く、概ね浅い傾向にあり、底面は極めて平坦に作られている。一見、「灰かき穴」に近似するが、火山灰を埋填した可能性はない。「粘土採掘坑」と考えた場合、求めている粘土が想定できない。可能性とすれば、いわゆる「イモ穴」と同様、一定期間相当量の物質を地下に埋納したものであろう。仮に、根菜類の貯蔵穴と考えた場合、一つの領域に面的に集中することは注目されよう。

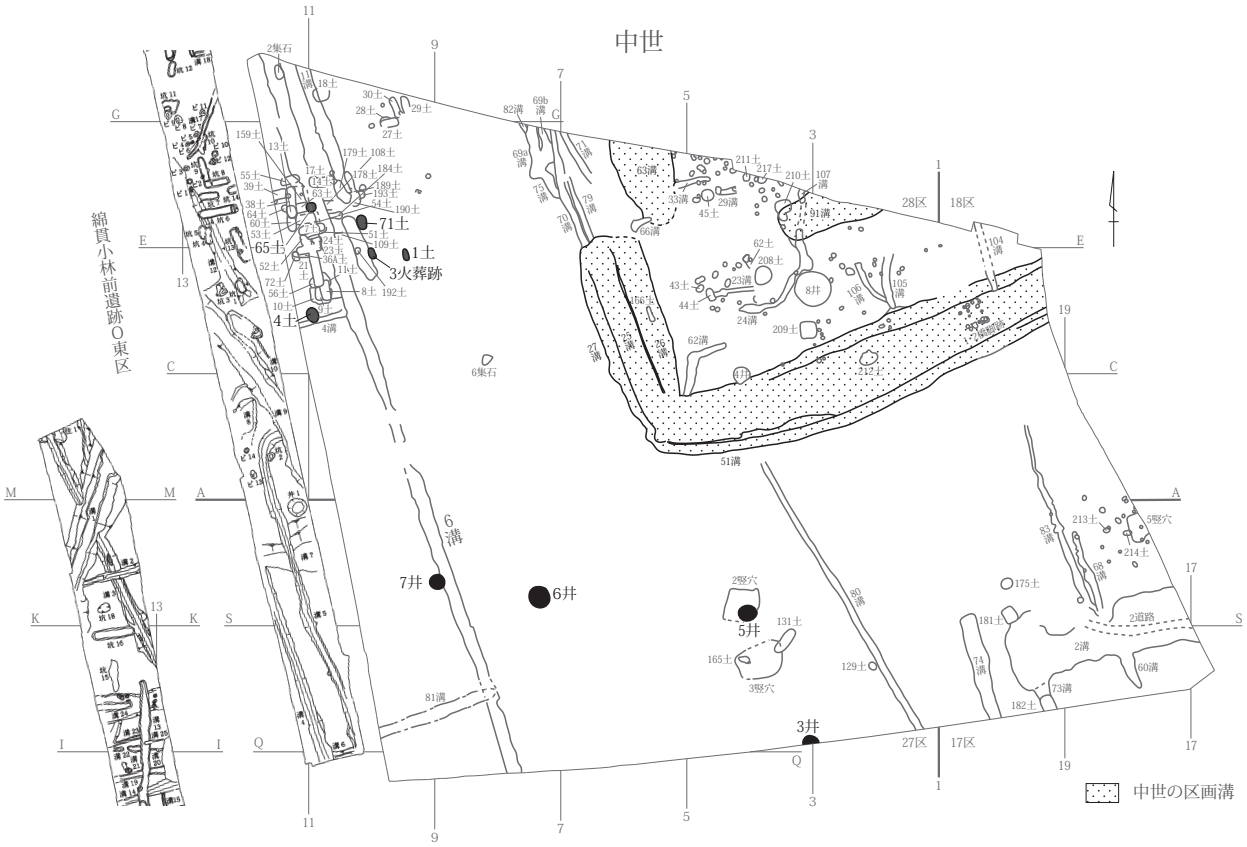
長方形土坑群の分布には、規則性が見られる。東端から21・22・27・24・29号土坑は南辺がほぼ直線的に並び、相互の間隔も等間隔に近い。また、西端から81・80・74・104・69・60号土坑は南辺が直線的にそろい、同じラインに重なって西から77・103・70・61号土坑は、逆に北辺が直線的にそろい、間隔も等間隔に近くなっている。このラインには隙間はないため、道や溝など境界となるものがあったとは思われない。若干の重複もあるが、北辺と南辺を相互に接しながら、同時期に設置された可能性も残るだろう。土坑の北辺や南辺がそろい、等間隔に並ぶ傾向は、複数の土坑が同時に設置された可能性を示唆していよう。なお、西端の土坑の南北辺が一致するラインの延長線上には軸方向は若干異なるが、18号溝が走向しており、何らかの境界認識をうかがうことができる。

18号溝と土坑の新旧関係を見ると、77号土坑は18号溝より前出だが、88号土坑は後出である。つまり、18号溝はこの土坑群と前後して、ほぼ同時期に作られた可能性が高い。一方、１区西端の掘立柱建物は東西軸を採る18号溝と重複関係にあり、状況から溝が後出と思われる。この溝は火葬跡である95号土坑や３号井戸よりも後出であるため、生活関連遺構よりも一段階新しい印象がある。しかし、２区では土坑が意識的に掘立柱建物の内外に作られている可能性が認められることから、改めて１区の掘立柱建物の周辺を見ると、長方形土坑群と意識的に距離を置いている状況がうかがえる。つまり、掘立柱建物と区画溝、井戸、長方形土坑で構成される遺構群は若干の前後関係はあるが、一連の遺構と見なしてよいこととなる。時期は、出土遺物から概ね16～17世紀と考えられる。

２．綿貫原北遺跡（高崎市）の事例

台遺跡の状況を理解するため、長方形土坑が多く調査された事例として綿貫原北遺跡を示す。この遺跡は、国道354号高崎玉村バイパス建設のために実施された調査である（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第556集『綿貫原北遺跡』2013年）。１区では中世から近世にわたる遺構群が発見された。

第58図上は、１区における中世の状況である。北東部に一辺50m級の中世屋敷あり、その20m西方に長方形土坑群が集中して作られている。この土坑群には長方形以外にも、火葬跡や土壙墓と推定される楕円形の土坑も含まれている。また、これと一部重複して南北に走向する６号溝は中世屋敷の外郭線と考えられ、この溝に対する境界意識が土坑の設営にも関係したと思われる。西に隣接する綿貫小林前遺跡Ｏ東区まで、この土坑群の分布は広

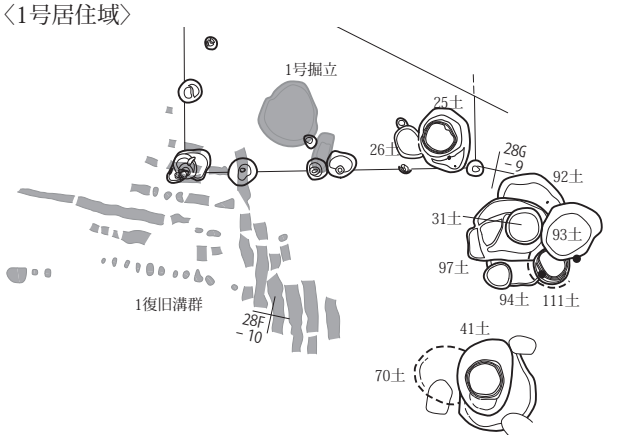


第58図　綿貫原北遺跡における長方形土坑の配置状況

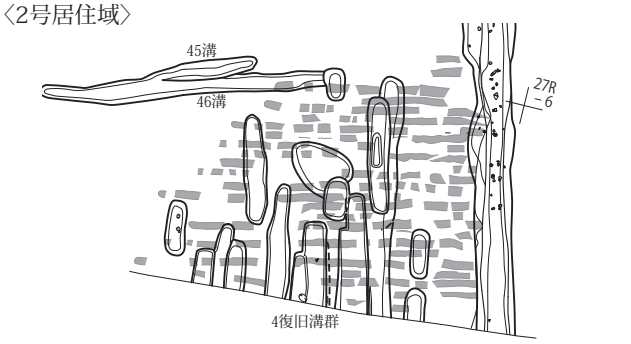
がっている。綿貫原北遺跡では、この土坑群の年代を出土遺物から中世とした。なお、２区や３区でも小規模な中世屋敷が調査されたが、長方形土坑は区画境に縦列するものはあるが、一定の範囲に集中する状況は見られない。

一方、第58図下１区の近世段階の全体図であり、中世屋敷であった部分以外が３つの居住域に分かれた状況を抽出して59図に示した。各居住域は、概ね掘立柱建物と桶埋設土坑(便所)が分布する領域と長方形土坑が作られる領域に分かれているものと考える。特に、２号居住域の場合、長方形土坑群の上層に浅間Ａ軽石を埋填した復旧溝群があり、この領域は畑地であったことの証左となる。こうした状況から、長方形土坑群は概ね畑作に関係する貯蔵遺構と考えてよいだろう。居住者は概ね零細な農民と推測するが、農地は他にもあるはずであり、ここで調査された畑は屋敷畑と見なされ、それゆえ貯蔵遺構が設営されたと考えたい。また、２号居住域の長方形土坑は南北軸を採るものばかりであり、３号居住域には直交するものがある点で異なっている。中世の状況は、３号居住域に類似している。

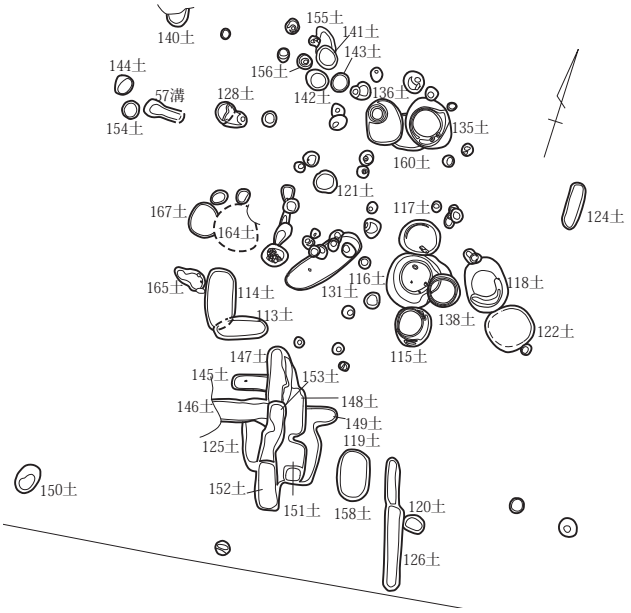
〈1号居住域〉



〈2号居住域〉



〈3号居住域〉



第59図　同・復旧坑の配置状況

近世の居住域の状況を踏まえて、改めて１区西端の中世段階の長方形土坑群を見ると、墓や火葬跡が含まれている点が大きく異なっている。近世段階では、元の中世屋敷内に同時期の墓地が集中しており、同じ居住者のものか確証はないが、墓域が別に設営されたことが想像される。したがって、近世の状況は畑地とそこに設営された貯蔵遺構の可能性が高いこととなる。その面で、中世段階で１区西端に設営された長方形土坑群を、食料に関係する貯蔵遺構とするのは躊躇してしまう。つまり、墓や火葬跡と共存可能な土坑である必要が求められるからだ。遺骸が埋葬される土地は、ある意味聖域であるとしても不浄な土地であり、忌避されるべき場所であろう。それゆえ、領域を限定する必要があり、埋蔵行為が繰り返されることとなる。問題は何を埋めるかであろうが、状況や形態から全てが墓であることは考えにくいし、火葬跡も同様である。何を埋めたかという問いには答えられないのが現状である。

３．まとめ

台遺跡１区で調査された長方形土坑群は、屋敷地の周辺に設営された貯蔵遺構であろう。綿貫原北遺跡の例を採れば、近世段階ならば畑地に設けられた根菜類の貯蔵施設となるが、中世段階を踏まえると火葬跡の存在も無視できない状況である。一方で、土坑の数量はかなり多く、綿貫原北遺跡と単純に比較できるものでもない。状況から複数が同時期に掘られた可能性が高く、個人レベ

ルを越えた行為であり、綿貫原北遺跡の近世段階とは状況が異なる。また、火葬跡は１基のみであり、土壙墓が見られないことから、不浄の領域として忌避されていたとも言い切れず、単純に前出の火葬跡が重複していた可能性も残る。やはり、台遺跡の場合は、屋敷地に隣接した貯蔵遺構という評価が最も理解しやすい。ただし、零細な農民によるものではなく、ある程度の集団行動であり、上層農民の関与或いは集団的管理を考える必要があるだろう。収穫物に対する収取体系としては、種籾の貸し付けなどが知られるが、根菜類についても何らかの形で、再生産する体系が作られていたのではないだろうか。

第２節　近世上三林村について

調査中、遺跡地が中世「赤岩道」に近接していることや、当地が古代「佐貫荘」の荘域にあり、土坑から出土した板碑に「建武三年」の紀年銘があり、中世遺跡としての調査成果が期待された。調査後１年余で、発掘調査報告書を作成することになったが、古墳時代後期の竪穴建物や平地建物を除けば、遺構の帰属年代が確定できておらず、調査成果のみから遺跡を評価するには限界があり、発掘データだけでは詳細な検討はできそうにないが、ここでは農業発達史的な視点から検討を行い、当地における中・近世上三林村の集落像を描く手がかりとしたい。

１．遺跡の概要（変遷）

本遺跡には旧石器がなく、縄文時代の遺物も前期土器片が２点ばかり出土しただけである。近接する旧野辺村の台地に弥生期の土器片が出土しており、同時期の集落が営まれた可能性がある。本遺跡も似た立地条件にあるが、弥生期土器片は出土していない。以下には古墳時代以後の集落動向について概要をまとめておこう。

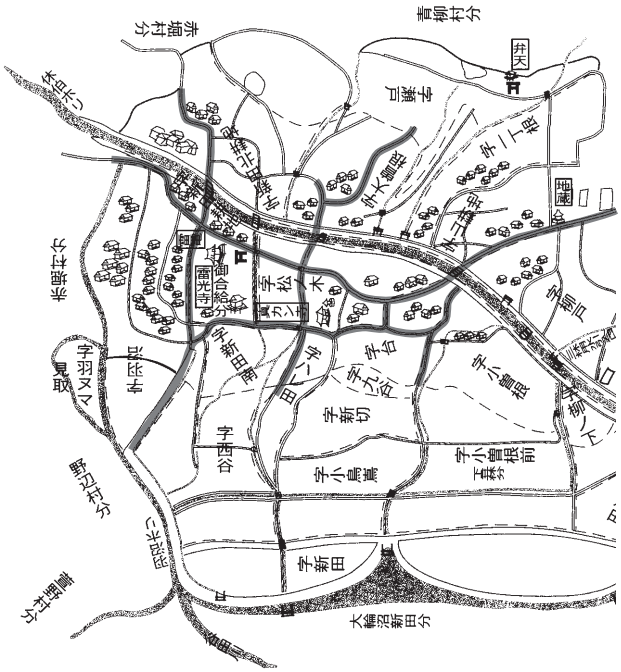
古墳・平安時代　本遺跡に農耕集落が営まれたのは古墳時代後期（６世紀代後半）のことである。本遺跡は東西300m・南北250mに広がるとされ、これまで竪穴建物７棟が確認（試掘調査を含む）されているが、いずれも重複しないことから、集落は比較的短期に廃絶されたものと思われる。続く平安時代の集落については現状では確認できていないが、出土遺物に平安期杯類があり、周辺域に平安期の集落が広がる可能性も否定できない。

本遺跡は６世紀代になり集落が営まれる「第１次新開集落」に相当する遺跡であり、生産域は遺跡地南側の低地部を想定するしかない。ただし、この低地部には旧利根川が流れており、当時利根川クラスの河川をコントロールするのは不可能とされるから、可耕地は必然的に台地両側に入り込んだ浅い窪地（第61図横線部）に限られてくる。おそらく、溜井灌漑による水田耕作が行われたのであろう。

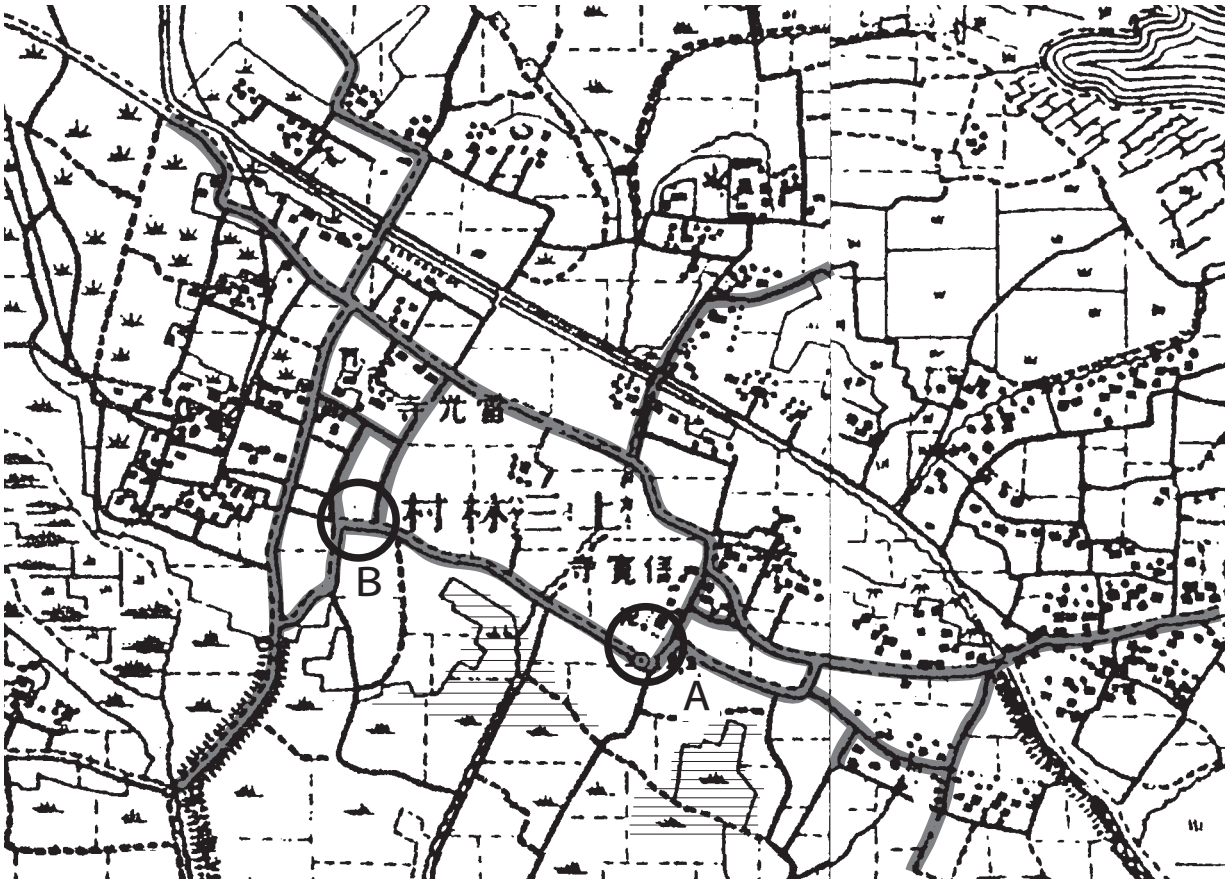
中・近世　発掘調査では火葬土坑や「建武三年」と銘の刻まれた板碑があり、掘立柱建物も中世遺構としての可能性が浮上した。中世関連の遺跡では遺物量が少なく遺構の時期決定も侭ならないことが圧倒的だが、本遺跡が古代「佐貫荘」の荘域内にあることはほぼ間違いないところであり、三林という地名が中世文献に登場することや、三林城と呼ばれる城館跡が上三林地区内にあることから古代より続く中世集落とすることができるだろう。

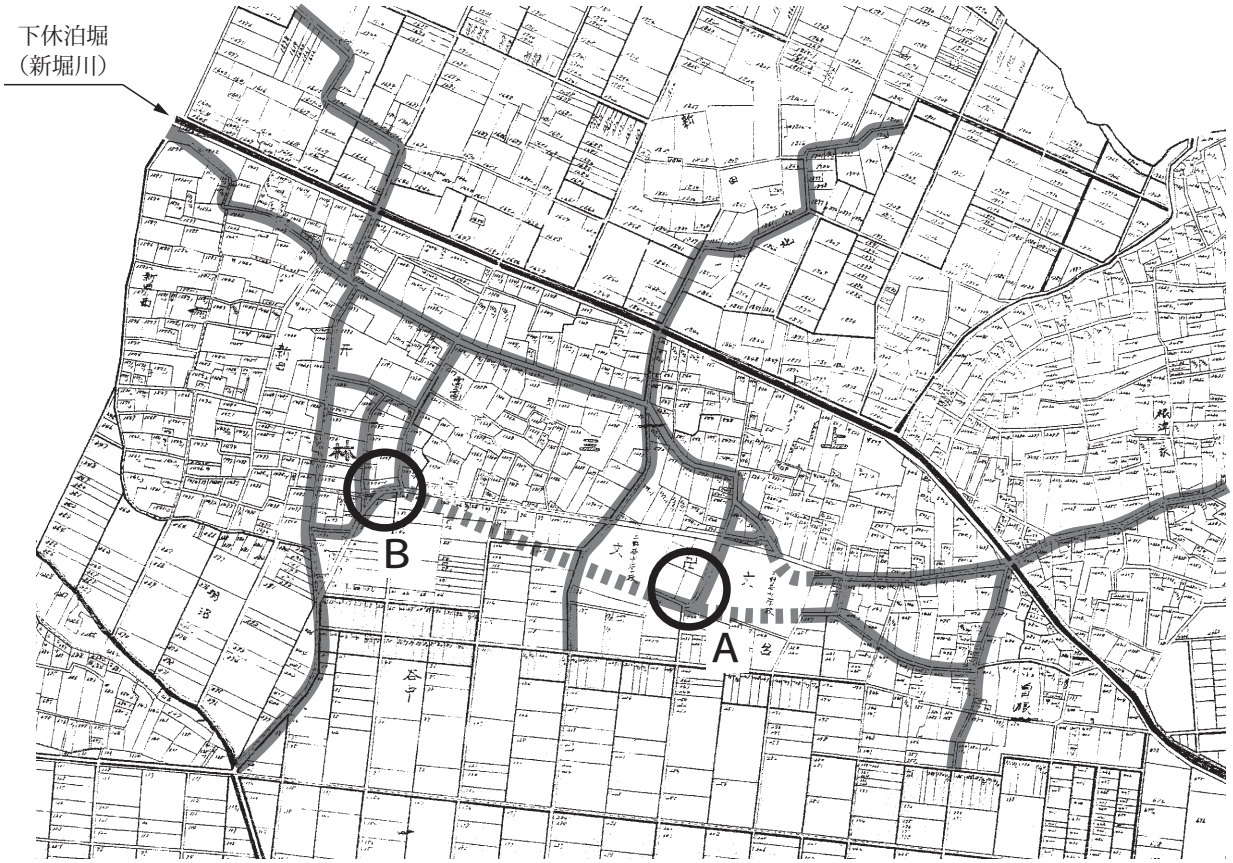
出土遺物の年代観は16～17世紀とされるものが多く、13世紀代や18世紀代の陶磁器類はほとんどないということであった。検出遺構についてもほぼ同時期のものとすることができよう。

２．近世後半期の上三林村



第60図　絵図に描かれた上三林村（一部加筆）





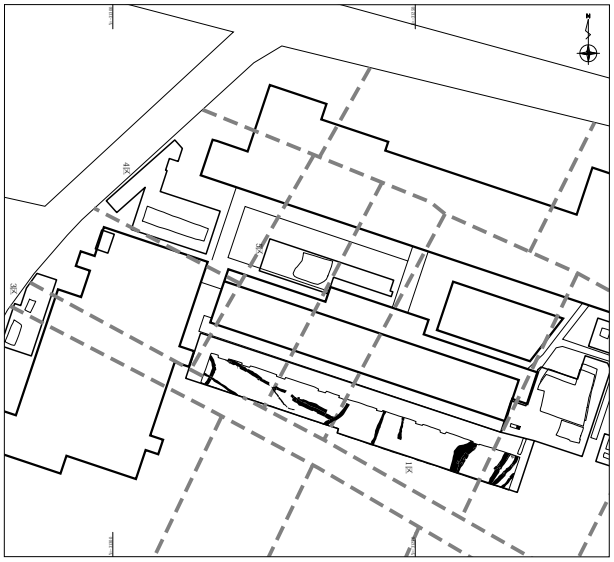
第61図　迅速測図に示された上三林村（上）と、上三林村の地割（下）

以上が発掘を通じ判明したことであるが、18世紀以後の上三林村について手掛かりを得ようとすれば、安政２年の封内経界図誌（第60図、イラスト図）や明治17年の迅速測図（第61図上）が参考になるだろう。これに基づき近世後半期の上三林村の様子を描いてみよう。

＜封内経界図誌＞　村内を下休泊用水（新堀川）が流れ、村を二分する。村には「真観寺」「雷光寺」２寺があり、雷電神社がある。下三林村から続く街道は直線的であるが、真観寺の手前で二手に分かれ、一方（北ルート）は雷光寺の北を抜け隣村（旧赤堀村）に至り、もう一方（南ルート）は寺の南側を抜ける。この南ルートは封内経界図誌には明瞭に描かれていないが、「羽沼堀」に続く土手を経て隣村「野辺村」に連絡したものと見られる。このほか、点在する屋敷群と堂宇、台地上の畑や低地部水田等が描かれている。

＜迅速測図＞　絵図に遅れること30年、明治13～17年に測図されたものだけに絵図の信頼性を検証することができる。絵図同様に、真観寺（迅速測図では「信寛寺」と表記）手前で街道が二股に分かれていることが良く分かる。北ルートは小さく折れて西進し、雷光寺の北を抜けるのに対して、南ルートは真観寺の手前で左に折れ、すぐまた右折するルートになっている。

近世後半期の街道　封内経界図誌では、微妙だが真観寺南の街道が湾曲して描かれている。これに対して、迅速測図（第61図、上）では寺の正面で街道が折れて描かれている。耕地図（第61図、下）には三野谷小学校（本遺跡）・中学校が明記されているが、学校建設により真観寺周辺の南ルートが分からなくなってしまっている。寺の正面に向かう街道を示す地境等は認めることができないが、寺域の南には街道と思われる小路（第61図のＡ）が描かれているのが分かる。この小路は現在も残り、道幅は車１台が通れる程度、幅１間ほどである。迅速測図では真観寺正面で左に折れ、すぐまた右折、そのまま西進「羽沼堀」の土手筋へ左折するように描かれているが、土手筋に向かう左折地点は雷光寺から南に下る街道の交差点（第61図のＢ）とした方が、資料（絵図・迅速測図・耕地図）には整合的である。結論として、南ルートは真観寺南を通り、これを直進して雷光寺から下る街道の交差点を左折して土手筋に向かうルートということになる。寺の南側を通る街道の延長には雷光寺南の交差点があり、これと



第62図　１区15・18号溝と耕地図境

同じライン上に15号溝（第62図）があることから、街道（南ルート）脇の溝になることも想定しておきたい。正確な位置関係については確認できていないが、公図には幅２間の長い土地区画があり、これが15・18号溝に挟まれた部分に当たる可能性も否定できない[註1]。

館林市史では中世「赤岩道」を県道85号線（「館林・深谷線」）の下に想定しているが、明治17年の迅速測図になく、耕地図には学校北に街道が示されていることから、明治期中頃から戦前にかけて造られた道路ということになる。中世「赤岩道」のルートは、再検討する必要があろう。

近世後半期の集落　絵図は若干デフォルメされているが、位置関係等は迅速測図と変わらず、近世後半期の上三林村が良く示されているように思う。上三林村の絵図を見ると東方の下三林村から続く街道沿いに集落[註2]があり、谷田川沿いや下休泊用水（新堀川）から分岐した用水沿いにも集落があり、これが集まり村を形成していたのが分かる。近世上三林村には境界こそ示されていないが、「古上三林村」と「新上三林村」があり、それぞれに名主が置かれたという。上三林村には「新田北」「新田」「新田西」等の小字名が雷光寺周辺域にある。絵図に描かれた集落や街道等は迅速測図に一致しており、ほぼ正確に近世末の村の様子を図化したものと思われ、村の石高は元禄期以後も変わらないことから、結果的に元禄期以後の集落配置も絵図と大差はなかったように思う。以上により、真観寺と雷光寺の間に広がる畑を境に村名を呼び分けたのではないかと考えたい。

３．近世前半期の上三林村

中世の邑楽郡については古代末になり「佐貫荘」が立荘、これが中世に引き継がれたとされる。歴史地理学者は、近世三林村の集落は中世集落を土台に成立、これが近代に繋がるとして、新しい要素を消去することで中世集落までさかのぼることができるという。

まず、水田開発については古嶋敏雄や木村礎の研究が参考になる。木村(『日本村落史』1978)は、当初の水田耕作が排水中心であり、これが古墳時代以後に灌漑中心となるとした。そして、古墳時代後期になり、谷地水田が溜井灌漑により開発され、古代条理水田の施工を経て、中世の谷地水田全面開発が達成、戦国・近世初期に至り本格的な河川灌漑がおこなわれたとした。そして、近世前半期(元禄期)には大河川中流域の開発が、下流域の開発は明治期になり実現したと整理した。この見解は古嶋(『近世日本農業の構造1943』)を意識したものであろうが、木村は古嶋説を実際より遅れ気味にみているとした。これについては、発掘調査と分布調査を踏まえた農業発達史的な見解(能登1984・1989)があり、初期の水田適地開発から谷戸田欠水地域への進出(第１次新開集落、溜井灌漑)、これに続いて谷戸田の全面開発が行われたとした(平安期、第２次新開集落)。この仮説は具体的かつ説得的であり、県内農耕集落を分布論的に解説する場合は、みなこれに従っている。中世以後の水田開発については、現在も歴史地理学の成果を超えるものはない。その開発規模は概して小規模であり、在地領主によるものが主体を占めたという。

中世集落は散居的、集村的、豪族屋敷的、環濠集落的なものがあり、さまざまである。中世的な屋敷の一つに「在家」がある。在家の長が名主であり、在家には下人や所従が暮したというが、別に居を構えるケースもあったという。歴史地理学の言う中世的枠組とは在地領主による名主・名田体制にあるとされ、近世においてはこうした隷属的農民層の自立化(本百姓化)が図られたとされている。

用水整備については、先に述べたように、中世においては在地領主による小規模開発が主体で、耕地の分散傾向は明らかであった。そのため、地域間を貫く用水整備は遅れ、当然耕地は増えず生産は停滞気味であった。これが中世というべきだろうが、木村(前掲1978年)や古嶋が指摘したように、戦国期以後、各地で用水整備が本格化したというのが全国的な趨勢といえるであろう。

以上を踏まえて近世前半期の集落像について想定されるところを述べてみたい。

前半期集落　中世末から近世初頭は新田開発と用水路の開削時期が重なり、生産量が大きく伸びた時期である。館林藩内の新田開発は、村の石高を見ると分かりやすく、藩内村々の石高は元禄期(元禄15年の検地帳、1702年)にピークがある。石高が増えたことで６ヵ村が分村され、これによりほぼ新田開発が完了したものとみなすことができる。文献にも渡良瀬川の河川敷の開発が行われたとあり、開発できそうなところはすべて手を入れたということであろう。以後、石高は元禄期石高を維持[註3]していることから、前半期においてすでに後半期集落同様の塊村が形成されていたと考えたい。問題は中世末から近世初頭で、あらたに分家や新田村が生まれるなど、社会は拡大傾向にあり、活況を呈していたものと思われる。

建物　近世後半期の屋敷には母屋があり、厠・納屋など付属建物があり、母屋に近接して井戸がセットとなっているのが通例である。当地では、前半期に新田開発を終えており、前半期も後半期も屋敷構えはほとんど変わらないであろう。ただし、新田村では屋敷面積や建物サイズが平準化されており、古村では中世的建物と近世的建物が入り混じっているのが実態と思われる。ところで、本遺跡１・２号掘立柱建物は、いかにも小規模である。建物全体が把握できたとはいいがたく、調査区外にも建物が広がる可能性は否定できないが、迅速測図や絵図によるかぎり、調査地は集落から外れており、果して屋敷跡を潰して畑地に替えるようなことがあるのであろうか。地目を変えることは、余程のアクシデントがないかぎり通常はないように思う。１・２号柱掘立柱建物は16～17世紀の建物にはちがいないが、現状で建物を性格づける材料は得られてはいない[註4]。今後、発掘調査で具体的な実態解明が期待されよう。

用水整備　館林市域の用水では休泊堀の整備が重要である。休泊堀は太田市矢場堰(渡良瀬川)より取水する幹線用水路で、途中矢場川や韮川にも分水させ、流域33ヵ村に農業用水が供給されている。また、休泊堀には上休泊堀と下休泊堀があり、共に大谷休泊が完成したとされる

が、受益地は広域に及んでおり休泊一代で完成したと考え難く、より以前から用水整備を継続していたと考えたい。上休泊堀ルートは、戦国期城館跡「小泉城」の脇を流れており、いかにも戦略的である。通水を可能にしたのは広域の政治的安定にあり、多々良沼の水を逆流させるなど(PL．１)、技術的にも相当なレベルにあり、より強固な政治力を感じる。最終的完成は大谷休泊によるとしても、先にも述べたとおり受益地が広域に及んでおり、結果的にそうなったと考えたい[註5]。

近世になり、館林藩領では利根川および渡良瀬川の築堤、矢場川の瀬替え等が行なわれている。利根川などの築堤工事は幕府直轄事業で行われたものであり、天正18年(1590年)から正保年間まで50年を要したとある。矢場川を付け替えたのは館林藩主綱吉(寛文四年、1667年)のころであり、これにより渡良瀬川低地帯の開発が進展したのだろう。検地帳には、「見取畑」等の記載あるほか、絵図にも「流作場」の記載があり、17世紀中頃には大規模河川の河川敷まで開発の手が及んだことを示している。これにて館林藩領の新田開発は終了になる。

４．まとめ

発掘では掘立柱建物・井戸・溝・土坑など16～17世紀の遺構が発見されている。このことから、本遺跡は集落域、屋敷地としての土地利用が想定されるのであるが、調査データによるかぎり、少なくとも近世後半期まで屋敷が継続した形跡は認め難い。歴史地理学では、集落は散村から集村へ向かうとされ、屋敷が途絶えることは想定していない。絵図や迅速測図を見ると、真観寺西には屋敷が描かれていないことから、理論上は新田開発を契機に屋敷を別に移したと考えておきたい[註6]。

上三林村が「古村」であることは、絵図や迅速測図を見れば、一瞥して明らかである。村の歴史は当然中世までさかのぼることになるが、中世の村の様子について知る材料はほとんどない。唯一、「建武三年」銘の板碑があるだけであるが、これも石臼とともに廃棄されたもので、当時のものではない。とはいえ14世紀、近在に板碑を造立できるほどの有力者がいたというのも否定できない事実であり、領主クラスの屋敷を中心に有力農民の屋敷が散在する程度は想定していいのかもしれない。そして、これが核となり、絵図や迅速測図に見る塊状集落が形成されたとしておこう。

本文中でも指摘したところであるが、遺構の年代観が明らかにできないことは致命的で、検討は将来的課題とせざるを得ないが、農業発達史的には①台地内の谷戸田で行われた水田耕作、②古代・中世における生産域の拡大、③利根川など氾濫原の新田開発等を明らかにすることが当面の課題になるだろうと考えている。②については、「佐貫荘」成立以後の生産域拡大ということになるが、文献は歴代の盛衰が覗われる程度で、小領主的荘園経営が垣間見えるだけである。投入労働力に限界はあったのであろうが、可能な限り生産域の拡大を推し進めたはずである。今後とも用水整備については注視していきたい。

註１　第62図は調査区図と地籍図の道路境界を重ね合わせ、トレースしたものである。精度的に問題があり、溝と耕地図が完全一致するとは言い切れないのが現状である。溝に重なるように見えるが、参考程度のデータとしていただきたい。

註２　ここでいう集落とは、複数の屋敷がひとつのまとまりを形成したもの(屋敷群)を指している。これがいくつか集まり村を形成したのであろう。

註３　なお、城下周辺の谷越村・新宿村・小桑原村などでは天保期石高が元禄期石高の17～38％減となっている。何か原因があるのだろうが、このことについての検討は稿を改め検討する予定である。

註４　掘立柱建物を新田開発前の屋敷と見れば、古村の建物という見方もできるかもしれない。仮に、17世紀の建物ということなら真観寺付属施設としての可能性も視野に入れておきたい。

註５　休泊堀は新田堀と並ぶ広域用水路で、東長岡戸井口遺跡の堀など古代から用水堀整備の痕跡が残されていることから、受益地は広域に及び、徐々に受益地を広げていったというのが実態であろう。

註６　中世末から近世初期の集落において、近世後半期になり畑に地目が変わることもあるのだろうか。このことについて具体的に確認できていないが、法則的には、仮にあったとしてもエピソードということになる。

木村礎　『日本村落史』弘文堂1978年
古嶋敏雄『近世日本農業の構造』1943年
館林市史編纂委員会『館林の原始古代・中世』2015年
館林市史編纂委員会『近世館林の歴史』2016年
能登健　『よみがえる中世』平凡社1989年
能登健　『新里村の遺跡』新里村教育委員会1984年

第２表　遺物観察表

１号堅穴建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第11図 PL.16	1	土師器 杯	一部欠	口	13.0	高	3.8	細砂/暗灰黄/良好	口縁部はヨコナデ。内面は板状工具によるナデ。体部外面は斜位ヘラケズリ。底部外面はヘラケズリ。やや乱れた放射状ヘラミガキ。外面はヘラケズリ。	
				底	―					
第11図 PL.16	2	土師器 杯	口縁部一部欠	口	12.3	高	3.7	細砂/にぶい黄橙/良好	口縁部はヨコナデ。底部内面は放射状のヘラミガキ。底部外面はヘラケズリ。	
				底	―					
第11図 PL.16	3	土師器 杯	カマド内 口縁部一部欠	口	12.2	高	4.9	細砂・粗砂/にぶい黄橙/良好	底部内面はナデ、口縁部ヨコナデで、内面の下部は強いヨコナデにより凹線状に窪む。上半のヨコナデは、内外面同一箇所でナデ上げる。底部外面はヘラケズリ。	
				底	―					
第11図 PL.16	4	土師器 杯	2/3	口	6.5	高	3.6	細砂・粗砂少量/橙/良好	口縁部はヨコナデ。内面の器表は剥離部分多い。口縁部外面上位は浅い凹線状に窪む。内面の口縁部中位と底部境はロクロ目状に浅く窪む。底部外面はヘラケズリ。	
				底	―					
第11図 PL.16	5	土師器 高杯	カマド内 台部一部欠	口	13.8	高	10.4	粗砂・細砂少量/橙/良好	口縁部と脚端部付近はヨコナデ。杯部内面はヘラミガキ。脚部外面上位から杯部外面は縦位ヘラケズリで、口縁部外面にヘラナデ状に工具があたる。脚部天井部は抉るようなヘラケズリ。	
				台	12.0					
第11図 PL.16	6	土師器 鉢	1/3	口	17.8	高	12.5	細砂・粗砂/灰褐/良好	口縁部はヨコナデ。体部内面はナデ。底部内面はヘラナデ。体部から底部外面はヘラケズリで体部外面の器表は摩滅。	
				底	―					
第11図 PL.16	7	土師器 甕	カマド内 一部欠	口	18.2	高	23.0	細砂・粗砂/灰黄褐/良好	口縁部はヨコナデ。内面は板状工具によるナデ。体部外面は斜位ヘラケズリ。底部外面はヘラケズリ。	
				底	2.7					
第12図 PL.16	8	土師器 甕	口縁部～体部上位1/2	口	22.0	高	―	粗砂/橙/良好	口縁部はヨコナデ、体部外面は幅広の縦位ヘラケズリ。体部内面はナデ。	
				底	―					
第12図 PL.16	9	土師器 甕	カマド内 口縁部～体部	口	20.7	高	―	細砂・粗砂/にぶい橙/良好	口縁部はヨコナデ。体部内面はナデ。体部外面は縦位ヘラケズリ。	
				底	―					
第12図 PL.16	10	土師器 甕	カマド内 口縁部～体部	口	20.8	高	―	細砂・粗砂/灰黄褐/良好	口縁部はヨコナデ。体部内面は板状工具によるナデ。体部外面は斜位ヘラケズリ。	
				底	―					
第12図 PL.16	11	土師器 甕	カマド内 口縁部～体部	口	20.1	高	―	細砂・粗砂/灰黄褐/良好	口縁部はヨコナデ。体部内面はナデで、器表やや剥離。体部外面は斜位ヘラケズリ。	
				底	―					
第12図 PL.17	12	土師器 甕	カマド内 口縁部一部.底部欠	口	23.0	高	―	細砂・粗砂/にぶい黄橙/良好	口縁部はヨコナデ。内面口縁部以下は板状工具によるナデ。体部外面の器表はヘラケズリであるがやや摩滅。	
				底	―					
第12図 PL.17	13	土師器 甕	カマド内 一部欠	口	20.6	高	35.2	細砂・粗砂/にぶい黄褐/良好	口縁部はヨコナデ。口縁部以下の内面はナデ。口縁部以下の外面は縦位ヘラケズリ。	
				底	4.3					
第12図 PL.17	14	土師器 長胴甕	口縁部～体部下位	口	22.8	高	―	細砂・粗砂/にぶい黄橙/良好	口縁部は大きく開く。口縁部はヨコナデ。体部内面はナデ。体部外面は斜位と縦位ヘラケズリ。	
				底	―					

2号堅穴建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第14図 PL.17	1	土師器 杯	口縁部1/2	口	14.6	高	―	細砂・粗砂少量/橙/良好	口縁部は外反し、端部を上方に小さくつまみ上げる。器表はやや摩滅。内面はヘラミガキ。体部外面以下はヘラケズリ。	
				底	―					
第14図	2	土師器 杯	口縁部1/7	口	13.7	高	―	細砂/にぶい黄橙/良好	口縁部は短く、底部も浅い。口縁部はヨコナデで、底部内面に間隔を開けた幅広のヘラミガキ。底部外面はヘラケズリ。復元径がやや大きい可能性がある。	
				底	―					
第14図	3	土師器 杯	口縁部片	口	―	高	―	細砂・粗砂少量/灰黄褐/良好	内面から口縁部外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。	
				底	―					
第14図	4	土師器 杯	口縁部片	口	―	高	―	細砂・粗砂/にぶい褐/良好	内面から口縁部はヨコナデ。口縁部下の段差は明瞭で底部外面はヘラケズリ。	
				底	―					
第14図	5	土師器 杯	口縁部1/8	口	10.8	高	―	細砂少量/橙/良好	口縁部は直線的に開く。口縁端部内面は極低い段をなして尖る。口縁部はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。残存率が低く、口径は誤差が生じている。	
				底	―					
第14図	6	土師器 坩	口縁部1/4	口	9.8	高	―	粗砂少量/橙/良好	口縁部はヨコナデ。端部とくびれ部付近のヨコナデはやや強め。	
				底	―					
第14図	7	土師器 鉢	口縁部小片	口	―	高	―	細砂・粗砂少量/にぶい黄橙/良好	体部内面から口縁部外面はヨコナデ。口縁端部のヨコナデは強い。体部内面中位はナデ。体部外面はヘラケズリ。	
				底	―					
第14図	8	土師器 鉢か	口縁部片	口	―	高	―	粗砂/橙/良好	口縁部はヨコナデ。内外面の口縁部下はヘラナデ。	
				底	―					
第14図	9	土師器 壺	口縁部1/8	口	18.7	高	―	細砂・粗砂/橙/良好	口縁部は外反。内外面に幅の狭いヘラミガキ。	
				底	―					
第14図	10	土師器 壺	体部～底部片	口	―	高	―	細砂・粗砂/橙/良好	内面は板状工具によるナデ。外面はヘラケズリ。内面調整は丁寧。	
				底	―					

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第14図	11	土師器 壺か甕	底部	口 底	— 3.7	高	—	細砂/にぶい黄橙/良好	内面はハケ目。外面は縦位ヘラナデ。底部外面は中央が窪み、蛇の目高台状をなす。	
第14図 PL.17	12	土師器 壺	体部一部、底部完	口 底	— 5.0	高	—	細砂・粗砂/にぶい黄橙/良好	内面は丁寧なヘラケズリで単位が不明瞭。外面は粘土紐の継ぎ目に粘土をなでつけている。このなでつけは下位屈曲部に顕著である。体部外面下端から底部外面はヘラケズリ。	
第14図 PL.17	13	鉄製品 不明	ほぼ完形か	縦 横	9.1 1.2	厚 重	0.3 7.0		断面形状は四角形で先端部は細くなっていく。もう一方の端部は広がる。全体が反っているが、使用時の状況かは不明。	

3号堅穴建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第15図	1	土師器 壺か甕	体部下位～底部片	口 底	— 6.1	高	—	細砂・粗砂/にぶい橙/良好	内外面はヘラケズリ。	
第15図 PL.17	2	土製品 球状土錘	完形	短 長	2.1 2.3	高	2.5	細砂微量/橙/良好	乾燥時か焼成時の亀裂が認められる。孔内に線状痕が認められ、棒状の物に粘土を丸めて成形する。	重さ９g

4号堅穴建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第16図 PL.17	1	土師器 杯	口縁部3/4欠	口 底	12.3 —	高	4.9	細砂・粗砂/橙/良好	口縁部は外傾して開く。底部内面付近から口縁部外面はヨコナデ。口縁部外面中位に浅い凹線１条巡る。底部外面はほぼ一方向のヘラケズリ。	
第16図	2	土師器 杯	口縁部片	口 底	— —	高	—	細砂微量/にぶい橙/良好	口縁部はヨコナデ。胎土は緻密。	
第16図	3	土師器 杯	口縁部片	口 底	— —	高	—	粗砂微量/灰褐/良好	口縁部はヨコナデ。胎土に赤色粒含む。	
第16図	4	土師器 甑	底部片	口 底	— 4.8	高	—	粗砂/灰/良好	外面はヘラケズリ。内面と円孔内面はナデ。円孔直径は3.0㎝。	
第16図	5	土師器 甑	底部片	口 底	— 3.7	高	—	細砂・粗砂/黄褐/良好	内外面の器表は摩滅。底部に焼成前の円孔。円孔の直径は2.5㎝。	
第16図 PL.17	6	土製品 球状土錘	完形	短 長	2.7 3.0	高	2.2	細砂少量/橙/良好	棒状物に粘土を付けて団子状に成形。芯を抜く際に動かした痕が端部に残る。	重さ15g

19号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第18図 PL.17	1	土師器 高杯か	台部	口 底	— 9.0	高	—	細砂・粗砂少量/橙/良好	柱部ナデの後、裾部ヨコナデ。外面は幅広のヘラミガキを間隔を開けて施す。	

1号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第24図	1	土器 皿	口縁部片	口 底	— —	高	—	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい褐	口縁部下位で外反し、口縁部は僅かに内湾。	
第24図	2	土器 焙烙	口縁部から底部片	口 底	— —	高	4.9	黒色鉱物、赤色粒含む/黒褐	断面中央は黒褐色、器表付近はにぶい橙色、器表は黒褐色。内面中央浅い沈線１条巡る。口縁端部上面は幅広く僅かに窪む。外面下位から底部外面の器表は縮緬状。	江戸時代

2号井戸出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第24図	1	土師器 坩	口縁部片	口 底	7.2 —	高	—	細砂少量/明赤褐/良好	口縁部はヨコナデで、口縁端部のヨコナデは強い。	

1号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第27図	1	土器 焙烙	底部1/2	口 底	— (16.0)	高	—	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい橙	器表は灰黄色。平底。外面の器表は縮緬状。	江戸時代か
第27図	2	土器 すり鉢	体部片	口 底	— —	高	—	細砂微量含む/褐灰	断面は黒色、器表付近は灰黄褐色。内面は５本一単位のすり目を交差するように施す。	16～17世紀 3溝2と同一個体の可能性あり

2号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第27図	1	土器 皿	1/6	口 底	(10.5) (6.4)	高	3.3	黒色鉱物含む/橙	器壁は厚く、口縁部は直線的に開く。底部外面回転糸切り。残存が少なく底部内面のナデや外面の圧痕は不明。	江戸時代

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第27図	2	土器 皿	口縁部から底部 1/6	口 底	(11.2) (6.8)	高	2.1	黒色鉱物含む/にぶい橙	外面の器表は橙色。器壁は厚く、口縁部は広く開く。底部内面にナデ。底部外面は回転糸切り後圧痕。	江戸時代
第27図 PL.17	3	土器 皿	口縁部1/4、底部1/3	口 底	(11.6) (7.9)	高	3.1	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい橙	器壁はやや厚く、内外面のロクロ目は目立たない。底部内面にナデ。底部外面は回転糸切り後浅い圧痕。底部外面周縁ヘラケズリか。	江戸時代
第27図 PL.17	4	土器 皿	体部～底部1/2	口 底	— 4.4	高	—	黒色鉱物含む/浅黄橙	底部内面周縁のロクロ目は顕著。底部内面は強いナデ。底部外面は回転糸切りであるが、圧痕が深く回転方向不明。	中世
第27図 PL.17	5	砥石	ほぼ完形	長 幅	(7.4) 3.5	厚 重	3.2 56.0	砥沢石	表面と左右両側面に比較的平坦で滑らかな面が認められ砥面と判断した。	
第27図 PL.17	6	砥石	不明	長 幅	(12.5) (14.8)	厚 重	(2.2) 400.0	緑色片岩	最下部が残存し上部は欠損する。	

3号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第27図	1	土器 焙烙	口縁部から底部 片	口 底	— —	高	6.0	黒色鉱物含む/黒褐	断面中央は黒褐色、器表付近はにぶい黄橙色、器表は黒褐色。内面中央幅広く深い凹線１条巡る。口縁端部上面は幅広く僅かに窪む。外面下位から底部外面の器表は縮緬状。	16世紀～17世紀か
第27図	2	土器 すり鉢	体部片	口 底	— —	高	—	細砂微量含む/灰黄褐	断面は黒色、器表付近は灰黄褐色。内面は５本以上を一単位としたすり目。	16～17世紀 1溝1と同一個体の可能性あり
第27図	3	龍泉窯系青磁 碗	体部片	口 底	— —	高	—	夾雑物含まない/灰オリーブ	外面に鎬連弁文。内外面に青磁釉。	13世紀
第27図	4	土師器 甑	底部片	口 底	— 5.4	高	—	細砂少量/にぶい橙/良好	内面はヘラナデ。底部内面から円孔内面はヘラケズリ。外面はナデ。円孔直径は1.5㎝。	
第27図 PL.17	5	銭貨 元豊通寶か	1/2	縦 横	2.340 (1.475)	厚 重	1.5 1.2		劣化が激しく、銭種が明瞭ではない。上に「元」、右に縦長の文字(「豊」か)がやや見える。面の彫は深く、輪は明瞭。背も劣化が見られるが、輪、郭は判断ができる。	
第27図 PL.17	6	鉄製品 刀子	一部	縦 横	1.2 (2.2)	厚 重	0.2 2.1		茎の一部、刀身の一部が残存。全体がさびで覆われる。	
第27図 PL.17	7	鉄製品 釘	脚部欠損	縦 横	2.7 0.8	厚 重	0.3 1.8		頭が厚くさびで覆われている。破損部から四角形の断面形状が確認できる。	

4号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第28図	1	土器 皿	底部1/2	口 底	— (5.2)	高	—	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい黄橙	一部黄灰色。内面はロクロ目顕著。底部内面はナデ。底部外面は右回転糸切り後に圧痕。	中世

5号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第28図 PL.17	1	土器 皿	口縁部1/2、底部完	口 底	(10.8) 5.1	高	3.6 ～ 4.2	黒色鉱物含む/浅黄橙	歪む。内面のロクロ目顕著。底部内面はナデ。底部外面は回転糸切りの後圧痕。	中世
第28図	2	土師器 壺	口縁部片	口 底	— —	高	—	細砂・粗砂少量/にぶい黄橙/良好	口縁部はヨコナデ。頸部外面にヘラケズリ時の工具による擦れ痕認められる。	

16号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第30図	1	須恵器 甕	口縁部片か	口 底	— —	高	—	細砂少量/黄灰/還元炎	外面の器表は黒色。内外面はヨコナデか、ロクロを使用したヨコナデ。	

19号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第31図 PL.17	1	瀬戸・美濃陶器 天目碗	1/3	口 底	(11.2) (4.4)	高	6.3	鉱物類含む/灰黄	口縁部はやや長く、端部は外反。内面から体部下位に鉄釉。釉は茶色で黒色が禾目となる。露胎部は回転篦削りで削り出し高台。高台内の削りは浅い。	大窯４か

18号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第32図	1	須恵器 杯	口縁部1/8	口 底	10.8 —	高	—	細砂/黄灰/還元炎	口縁部は外湾し、端部は肥厚。	
第32図	2	灰釉陶器 椀か皿	底部片	口 底	— —	高	—	細砂微量/灰白/良好	底部外面側の器表は剥離。高台は欠損。	東濃産

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第32図	3	須恵器 壺か	体部片	口 底	— —	高	—	細砂・粗砂微量/ 黄灰/還元炎	外面はロクロ目目立ち、上部にカキ目。	
第32図 PL.17	4	土器 皿	口縁部1/2、底部完	口 底	(12.1) 5.1	高	3.8	黒色鉱物含む/浅黄橙	体部外面下位と内面のロクロ目顕著。底部内面は一方向のやや強いナデ。底部外面は回転糸切りの後圧痕。	中世

6号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図 PL.17	1	砥石	1/2	長 幅	(5.9) (3.5)	厚 重	(2.5) 61.8	砥沢石	表裏面と左右両側面に砥面が認められる。表面には線条痕が比較的多く認められる。	

27号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図	1	土製品 球状土錘	1/4	短 長	— —	高	—	細砂微量/にぶい橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	

28号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図	1	土師器 杯	口縁部～底部 1/6	口 底	11.8 —	高	—	細砂少量/橙/良好	口縁部はヨコナデ。口縁端部内面は緩い段差状を呈する。外面口縁部下凹線状に窪む。底部外面はヘラケズリ。	
第45図 PL.17	2	土器 皿	体部下位から底部	口 底	— 4.5	高	—	黒色鉱物含む/浅黄橙	内外面のロクロ目顕著。底部内面は一方向のナデ。底部右回転糸切り後に圧痕。	中世

36号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図 PL.17	1	鉄製品 釘	完形	縦 横	2.85 0.53	厚 重	0.45 1.1		頭が折られた釘。縦方向の劣化の割れが生じている。角釘。	

40号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図	1	土器 皿	口縁部から底部片	口 底	— —	高	—	黒色鉱物含む/黒	体部は僅かに外反。底部回転糸切り無調整。	
第45図 PL.17	2	土製品 土錘	一部欠	短 長	— 0.6	長	—	細砂微量/橙/良好	芯径0.25㎝、最大径0.6㎝の棒状小型錘。	

41号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図	1	土器 皿	口縁部1/8、底部1/3	口 底	(10.7) (5.2)	高	3.7	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい橙	内面はにぶい黄橙色。内面のロクロ目顕著。底部内面にナデ。底部回転糸切り後に圧痕か。	中世

48号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図	1	土製品 球状土錘	破片	短 長	— —	高	—	細砂微量/橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	

56号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図	1	土師器 壺	口縁部1/4	口 底	8.4 —	高	—	細砂少量/橙/良好	口縁部は頸部から立ち上がり気味に開くが、上半は僅かに内湾気味となる。内外面にヘラミガキ。	

64号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図	1	土器 皿	口縁部片	口 底	— —	高	—	黒色鉱物含む/にぶい黄橙	口縁部はやや内湾。	中世か
第45図 PL.17	2	土師器 土錘	完形	短 長	0.46 0.6	長	2.7	細砂微量/黄橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	重さ1g

68号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第45図	1	鉄製品 不明	端部欠損か	縦 横	5.46 1.36	厚 重	1.0 11.5		棒状の鉄製品。両端部が欠損しているか。一方の端部は潰れているような形をしている。全体に劣化によるひびが広がる。詳細は不明。	

76号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	1	土師器 甕	口縁部片	口 底	— —	高	—	細砂少量/灰/還元炎	口縁部外面下部は小さく下方に突き出る。内面に自然釉薄くかかる。	
第45図	2	土師器 高杯	杯部1/4	口 底	— —	高	—	細砂・粗砂/にぶい橙/良好	杯部稜線は縦位ヘラケズリで作出する。体部内外面はヘラナデ。	

77号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.17	1	土器 皿	体部1/2、底部完	口 底	— 4.4	高	—	黒色鉱物含む/浅黄橙	外面のロクロ目顕著。底部内面は一方向のナデ。底部外面右回転糸切り後に圧痕。	中世

82号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.17	1	土製品 土錘	1/2	短 長	0.7 0.9	長	—	細砂微量/橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	

103号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	1	土器 皿	口縁部1/4	口 底	(4.0) —	高	—	黒色鉱物含む/にぶい黄橙	高は低く、ロクロ目は目立たない。	江戸時代
第45図	2	土器 皿	口縁部1/6	口 底	(11.7) —	高	—	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい橙	内面下半のロクロ目顕著。内面は底部と体部の境不明瞭。	江戸時代
第45図	3	土器 焙烙	底部片	口 底	— —	高	—	黒色鉱物少量含む/にぶい黄橙	底部外面からの断面円錐形の穿孔痕２箇所、内面からの断面円錐形の穿孔痕１箇所残る。いずれも未完通。	江戸時代か
第45図	4	須恵器 横瓶か	体部片	口 底	— —	高	—	細砂/灰/還元炎	体部に蓋をするように接合。接合部内面はナデ。外面はカキ目の後一部ナデ。	

106号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	1	須恵器 甕	体部片	口 底	— —	高	—	細砂少量/断面にぶい褐、器表灰/還元炎	外面は叩き目。内面は当て具痕。	

107号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.17	1	土製品 球状土錘	1/3	短 長	— —	長 –	2.5	細砂微量/にぶい黄橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	

55号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第46図	1	土器 皿	口縁部から底部片	口 底	— —	高	3.1	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい橙	ロクロ目は目立たない。底部回転糸切り無調整か。	江戸時代
第46図	2	土器 皿	底部1/4	口 底	— (6.0)	高	—	黒色鉱物含む/にぶい橙	底部内面にナデ。底部外面右回転糸切り後圧痕か。	江戸時代か
第46図	3	土器 皿	底部1/4	口 底	- (6.0)	高	-	黒色鉱物、赤色粒含む/にぶい褐	底部内面にナデ。底部外面右回転糸切り後圧痕か。	江戸時代か
第46図 PL.18	4	砥石	2/3	長 幅	(9.9) (5.0)	厚 重	3.4 174.3	砥沢石	表裏面と左右両側面に砥面が認められる。各砥面には断面Ｖ字形の線条痕が比較的多く認められる。	
第46図 PL.18	5	板碑	1/2	長 幅	(39.0) (19.6)	厚 重	3.2 3556.0	緑色片岩	一尊種字板碑の下半部。主尊は欠損して不明。枠線と薬研彫り連座の一部が残る。中央連座下に「建武三年」その下に十月十三日と紀年銘を記す。紀年銘の左右に線刻で華瓶を刻む。線刻等は比較的鮮明で、摩耗は少ない。線刻に工具差はない。	
第46図 PL.18	6	石臼	4/5	長 幅	(25.5) (25.1)	厚 重	14.0 12700.0	粗粒輝石安山岩	表面のすり合わせ面は非常に滑らかであり挽き目の痕跡は認められない。軸孔は内部に段差が認められ両面穿孔と考えられる。底面の軸孔周辺から孔内部にかけては棒状工具痕が明瞭に認められ加工痕と考えられる。	
第47図 PL.18	7	石臼(上)	1/3	長 幅	(19.4) (29.5)	厚 重	(14.0) 7950.0	二ッ岳石	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が認められない。供給孔の一部が認められる。	
第47図 PL.18	8	石臼(上)	1/6	長 幅	(16.0) (13.1)	厚 重	10.3 2056.0	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。供給孔は中央付近で段違いになっており両面穿孔と考えられる。	

44号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第55図 PL.18	1	土器 皿	体部下位以下	口 底	— 5.2	高	—	黒色鉱物含む/浅黄橙	内面のロクロ目顕著。底部内面は一方向のやや強いナデ。底部外面は右回転糸切りの後、内底ナデ時の押圧により糸切り痕不鮮明となる。	中世

54号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第55図	1	土製品 球状土錘	1/3	短 長	— —	長	—	細砂微量/橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	

62号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第55図 PL.18	1	砥石	完形	長 幅	11.8 4.1	厚 重	5.9 230.7	砥沢石	表面は全体的に非常に滑らかであり細かい線条痕が多数認められ主要な砥面と考えられる。表面は研ぎ減りにより著しい山形を呈する。裏面と左右両側面には滑らかな部分と細かい線条痕が散在し便宜的な砥面と考えられる。	

78号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第55図 PL.18	1	銭貨		縦 横	2.8 3.8	厚 重	0.3		3枚が癒着した状態で出土していた。3枚はややずれて重なる。	
第55図 PL.18	1-①	銭貨 元豊通寶	完形	縦 横	2.462 2.510	厚 重	0.146 3.2		背側が癒着した状態で出土した。面の彫は深く、字、輪、郭が明瞭。背側が癒着部分は劣化が激しい。	
第55図 PL.18	1-②	銭貨 慶元通寶	完形	縦 横	2.407 2.356	厚 重	0.130 2.7		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背二。面が皇宋通寶と面同士で癒着し、背は元豊通寶と背側で癒着する。	
第55図 PL.18	1-③	銭貨 皇宋通寶	完形	縦 横	2.348 2.366	厚 重	0.115 2.0		面が癒着し、背側が見える状態で出土する。面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。	
第55図 PL.18	2	銭貨 熙寧元寶	完形	縦 横	2.377 2.385	厚 重	0.154 2.7		面の彫が深く、輪、郭は明瞭。背の彫はやや浅く、一部輪、郭が不明瞭な部分がある。	

98号ピット出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第55図	1	土製品 球状土錘	1/4	短 長	— —	長	2.3	細砂微量/橙/良好	棒状芯に粘土を貼り付けるように成形。表面はナデ。	

包含層出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備　考
第57図 PL.18	1	縄文土器 深鉢	胴部破片						半截竹管状具の集合沈線文を横位に施す。内外面共にやや風化。中量の円磨度の進んだ乳白色珪質岩片と少量の石英・赤色岩片を含むやや緻密な胎土。	諸磯ｃ式
第57図 PL.18	2	縄文土器 深鉢	胴部破片						LR縄文を横位・多段に施文。中量の円磨度の進んだ長石・乳白色珪質岩片と少量の雲母・角閃石・石英の粗・細砂を含む。	諸磯ｃ式併行
第57図 PL.18	3	磨製石鏃	完形	長 幅	3.4 1.3	厚 重	0.3 1.1	珪質頁岩	表裏面の中央には広く研磨面が認められる。表裏面の縁辺部には全体的に剥離痕が認められる。表面の上部には一部に研磨が及ぶ剥離面が認められるが、全体的に剥離面の方が研磨面よりも新規に形成されている。	
第57図	4	土師器 杯	1/8	口 底	12.6 —	高	—	細砂微量/にぶい黄橙/良好	器表は部分的に黒色。内面屈曲部付近から口縁部外面はヨコナデ。底部外面はヘラケズリ。	
第57図	5	須恵器 小壺か	口縁部1/8	口 底	7.8 —	高	—	細砂微量/灰/還元炎	口縁部は外湾。外面口縁部下は段が付く。	
第57図 PL.18	6	土器 皿	1/3	口 底	(12.6) (8.0)	高	2.6	黒色鉱物含む/にぶい橙	器壁はやや厚く、内外面のロクロ目は目立たない。高は低く、口縁部は開く。底部内面にナデ。底部外面は回転糸切り痕は内面のナデ時に潰れる。	江戸時代
第57図	7	土器 焙烙	1/3	口 底	— —	高	5.1	黒色鉱物、赤色粒少量含む/暗灰、黄灰	断面中央は暗灰色、器表付近はにぶい黄橙色、器表は暗灰色から黄灰色。内面中位に低い段。口縁端部正面は幅広く、僅かに窪む。外面上位に接合痕、下位以下の器表は縮緬状。	江戸時代

第３表　土坑計測値一覧表

土坑番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
1	2	X=24,323 ～ 24,326 Y=-31,220・-31,221	長方形	3.22	(0.91)	0.29	N-21°-E		1(?)・4(?)・31(?)		かわらけ？
2	2	X=24,325 ～ 24,327 Y=-31,220・-31,221	長方形	1.67	0.78	0.15	N-12°-E	17(?)	2(?)・3(?)		
3	2	X=24,323 ～ 24,327 Y=-31,222・-31,223	長方形	3.98	0.59	0.19	N-22°-E	5(古)・6(古)			
5	2	X=24,323・24,324 Y=-31,222・-31,223	略円形	1.12	(0.93)	0.12	N-22°-E	3(新)・6(?)	35(?)		
6	2	X=24,322 ～ 24,324 Y=-31,223・-31,(1)X224	長方形	(1.77)	0.87	0.06	N-28°-E	3(新)・5(?)	32(新)・36(?)		
7	2	X=24,325・24,326 Y=-31,223・-31,(1)X224	長方形	0.91	(0.72)	0.14	N-71°-W	8(?)			
8	2	X=24,323 ～ 24,325 Y=-31,224・-31,225	方形	(1.78)	0.48	0.05	N-22°-E	7(?)	5(?)		
9	2	X=24,321 ～ 24,323 Y=-31,224 ～ -31,226	長方形	2.44	0.70	0.12	N-28°-E		5(1掘立)・10(?)・42(?)・43(?)		ピットは土坑調査中の確認
10	2	X=24,326・24,327 Y=-31,227	長方形	(0.69)	0.53	0.06	N-40°-E				短軸側の立上がり不明瞭
11	2	X=24,325・24,326 Y=-31,226 ～ -31,228	長方形	1.66	0.72	0.11	N-68°-W		8(1掘立)		
12	2	X=24,320・24,321 Y=-31,224・-31,225	長方形	1.32	0.58	0.12	N-40°-E	18(古)	41(?)		ピットは土坑調査中の確認 かわらけ１
13	2	X=24,321 ～ 24,323 Y=-31,221 ～ -31,223	長方形	1.98	0.86	0.12	N-27°-E	14(古)・57(古)	14(?)・16(?)		ピットは土坑調査中の確認 焙烙１
14	2	X=24,320 ～ 24,322 Y=-31,221 ～ -31,223	略方形	1.61	1.58	0.22	N-28°-E	13(新)・15(?)・57(古)・58(?)	37(?)・38(?)・68(?)		ピットは土坑調査中の確認 かわらけ１
15	2	X=24,319・24,320 Y=-31,222・-31,223	長方形	(1.25)	0.91	0.20	N-22°-E	14(?)・57(?)	40(?) 65(?)～68(?)		土坑・ピットの新旧不明
16	2	X=24,316 ～ 24,318 Y=-31,223 ～ -31,225	長方形	1.89	0.92	0.15	N-32°-E		20(?)・24(?)・25(?)・28(?)・46(?)		ピットは土坑調査中の確認
17	2	X=24,320・24,321 Y=-31,224・-31,225	長方形	0.74	(0.31)	0.08	N-69°-W	2(?)			
18	2	X=24,320・24,321 Y=-31,224・-31,225	長方形	1.76	0.82	0.08	N-29°-E	12(新)	59(?)		
19	1	X=24,311 ～ 24,313 Y=-31,236・-31,237	長方形	1.96	1.06	0.28	N-35°-W	56(?)			古墳後期土坑？
21	1	X=24,314 ～ 24,316 Y=-31,242 ～ -31,244	長方形	(1.71)	0.93	0.16	N-22°-E	22(古)			
22	1	X=24,314 ～ 24,316 Y=-31,244・-31,245	長方形	(2.68)	0.95	0.19	N-31°-E	21(新)			
24	1	X=24,314 ～ 24,316 Y=-31,247・-31,248	長方形	2.30	0.91	0.37	N-29°-E	33(古)・35(古)			
25	1	X=24,315 Y=-31,240・-31,241	略円形	1.10	0.42	0.20	N-71°-W			5(新)	
26	1	X=24,312 ～ 24,314 Y=-31,250・-31,251	長方形	(1.54)	0.68	0.19	N-25°-E				古墳時代建物に重複
27	1	X=24,314 ～ 24,317 Y=-31,245 ～ -31,247	長方形	(2.89)	1.00	0.25	N-22°-E				
28	1	X=24,316・24,317 Y=-31,247 ～ -31,249	長方形	(1.82)	0.95	0.20	N-57°-W	29(新)			
29	1	X=24,314 ～ 24,318 Y=-31,246 ～ -31,248	長方形	(3.49)	0.76	0.25	N-23°-E	28(古)・30(古)・31(?)			
30	1	X=24,316 ～ 24,318 Y=-31,247 ～ -31,249	長方形	(1.46)	1.10	0.32	N-23°-E	29(新)・31(?)			
31	1	X=24,315 ～ 24,317 Y=-31,248・-31,249	長方形	(0.94)	0.94	0.31	N-23°-E	29(新)・30(?)			
32	1	X=24,311 ～ 24,313 Y=-31,247・-31,248	長方形	(1.93)	0.89	0.18	N-23°-E	34(?)・35(新)			古墳時代建物に重複
33	1	X=24,312 ～ 24,314 Y=-31,248 ～ -31,250	長方形	(2.82)	0.98	0.29	N-24°-E	24(?)・34(新)・35(新)			古墳時代建物に重複
34	1	X=24,311 ～ 24,313 Y=-31,248・-31,249	長方形	(1.04)	0.60	0.21	N-22°-E	32(新)・33(古)・35(新)			古墳時代建物に重複

土坑計測値一覧表

土坑番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
35	1	X=24,312～24,314 Y=-31,246～-31,249	略方形	(2.03)	1.82	0.14	N-67°-W	24(?)・32(古)・33(古)・34(古)			古墳時代建物に重複
36	1	X=24,316～24,318 Y=-31,249～-31,251	長方形	(2.34)	1.14	0.18	N-24°-E				
37	1	X=24,316～24,319 Y=-31,250～-31,252	長方形	(2.31)	1.39	0.16	N-24°-E	52(?)		6(新)	北壁側で土坑主軸が異なる。土坑の切り合い？
38	1	X=24,313～24,315 Y=-31,249～-31,251	長方形	(2.36)	0.99	0.18	N-31°-E	39(古)			
39	1	X=24,314～24,316 Y=-31,250～-31,252	不整形	2.35	1.31	0.20	N-39°-E	38(新)・40(古)・41(?)			
40	1	X=24,315・24,316 Y=-31,252・-31,253	長方形	(1.11)	(0.80)	0.12	N-34°-E	39(新)・41(?)・42(古)		6(新)	
41	1	X=24,313～24,315 Y=-31,251～-31,253	長方形	(1.87)	1.35	0.20	N-30°-E	39(?)・40(?)	62(?)・106(?)		
42	1	X=24,314～24,317 Y=-31,252～-31,254	長方形	2.76	0.97	0.15	N-29°-E	40(新)・54(?)		6(新)	
43	1	X=24,319・24,320 Y=-31,253・-31,254	長方形	1.68	(0.45)	0.16	N-71°-W	44(?)・45(?)			
44	1	X=24,318～24,320 Y=-31,254・-31,255	不整形	(1.26)	(0.82)	0.13	N-22°-E	43(?)・45(?)・46(?)		7(新)	
45	1	X=24,318・24,319 Y=-31,253・-31,254	長方形	(1.28)	0.91	0.17	N-25°-E	43(?)・46(古)・47(新)			
46	1	X=24,317～24,319 Y=-31,253～-31,255	長方形	(2.38)	0.91	0.23	N-30°-E	44(?)・45(新)・47(新)・48(?)			
47	1	X=24,317・24,318 Y=-31,253・-31,254	不整形	(0.89)	0.75	0.16	N-27°-E	45(?)・46(?)・49(?)			
48	1	X=24,315～24,317 Y=-31,255・-31,256	長方形	(1.51)	0.53	0.23	N-30°-E	46(?)・50(?)			
49	1	X=24,314～24,317 Y=-31,253～-31,255	長方形	(3.30)	(1.20)	0.13	N-28°-E	47(?)・48(古)・50(古)			
50	1	X=24,314～24,317 Y=-31,254～-31,256	長方形	(3.11)	(1.30)	0.18	N-30°-E	48(新)・49(新)・51(古)		7(新)	
51	1	X=24,314・24,315 Y=-31,255・-31,256	長方形	(0.91)	0.73	0.11	N-23°-E	49(新)・50(新)			
52	1	X=24,318・24,319 Y=-31,252	長方形	(0.65)	(0.58)	0.11	N-17°-E	37(?)		6(新)	
53	1	X=24,310・24,311 Y=-31,245～-31,248	不明	2.39	(0.34)	0.31	N-73°-W				古墳時代建物に重複
54	1	X=24,313・24,314 Y=-31,253～-31,255	長方形	(0.81)	0.81	0.11	N-29°-E	42(?)			
55	1	X=24,311～24,313 Y=-31,233・-31,234	不明	(1.35)	(1.09)	0.20	N-26°-E			2(古) 3(新)	板碑・石臼・焙烙・かわらけ
56	1	X=24,311 Y=-31,236・-31,237	略円形	(1.05)	(0.85)	0.16	N-85°-E	19(?)			調査順は19→56、新旧不明
57	2	X=24,320～24,322 Y=-31,222・-31,223	略円形	1.80	1.50	0.46	N-21°-E	13(新)・14(新)・15(?)	14(?)・16(新)・67(?)・68(?)		
58	2	X=24,320・24,321 Y=-31,221	不明	1.28	(0.35)	0.14	N-12°-W	14(新)			
59	1	X=24,319～24,321 Y=-31,256～-31,258	長方形	(1.42)	1.36	0.20	N-25°-E	60(新)	105(?)		
60	1	X=24,318～24,321 Y=-31,257～-31,259	長方形	(2.68)	1.05	0.15	N-25°-E	59(古)・64(?)	104(?)		
61	1	X=24,315～24,317 Y=-31,257～-31,259	長方形	(2.28)	0.73	0.45	N-28°-E	62(新)			
62	1	X=24,316・24,317 Y=-31,258・-31,259	長方形	1.11	0.83	0.07	N-60°-W	61(古)・63(古)			
63	1	X=24,316～24,318 Y=-31,258・-31,259	長方形	(1.63)	(0.68)	0.21	N-25°-E	62(新)・64(古)・65(新)			
64	1	X=24,316～24,319 Y=-31,258～-31,260	長方形	(2.89)	0.91	0.44	N-17°-E	60(?)・65(新)・71(新)・102(?)			
65	1	X=24,317・24,318 Y=-31,259・-31,260	長方形	0.81	0.80	0.10	N-65°-W	64(古)・70(古)			
66	1	X=24,320・24,321 Y=-31,258・-31,259	長方形	(0.78)	(0.46)	0.18	N-25°-E	67(古)・68(?)			
67	1	X=24,321 Y=-31,258・-31,259	長方形	(0.30)	(0.57)	0.19	N-25°-E	66(新)・68(新)			

土坑番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
68	1	X=24,319～24,321 Y=-31,258～-31,260	略円形	1.64	(1.25)	0.35	N-23°-E	66(新)・67(新)・69(?)・104(新)			
69	1	X=24,318～24,320 Y=-31,259～-31,260	長方形	(1.99)	(0.63)	0.28	N-21°-E	68(?)・70(古)・104(新)			
70	1	X=24,316～24,318 Y=-31,260・-31,261	長方形	2.53	0.94	0.20	N-19°-E	65(新)・69(新)・71(新)・72(新)			72土坑より古い
71	1	X=24,317 Y=-31,259・-31,260	長方形	0.99	0.64	0.21	N-70°-E	64(古)・70(古)			
72	1	X=24,316・24,317 Y=-31,261・-31,262	長方形	1.14	0.70	0.14	N-19°-E	70(古)			70土坑より新しい
73	1	X=24,321・24,322 Y=-31,262・-31,263	不整形	(1.32)	(1.00)	0.11	N-25°-E	74(新)			
74	1	X=24,319～24,321 Y=-31,261～-31,263	長方形	(2.05)	(0.83)	0.26	N-33°-E	73(古)		11(新) 18(?)	
76	1	X=24,319・24,320 Y=-31,262・-31,263	不整形	(0.83)	(0.82)	0.19	N-53°-W			11(?) 18(?)	焙烙1・かわらけ1
77	1	X=24,318～24,320 Y=-31,263～-31,265	長方形	2.34	0.94	0.21	N-24°-E			11(古) 18(古)	
78	1	X=24,317・24,318 Y=-31,265・-31,266	長方形	(0.80)	(0.55)	0.18	N-19°-E			11(新)	焙烙1
79	1	X=24,322・24,323 Y=-31,262・-31, 263	略円形	0.83	(0.27)	0.17	N-71°-W	80(古)			
80	1	X=24,321～24,323 Y=-31,263・-31,264	長方形	(1.99)	0.93	0.20	N-28°-E	79(新)			
81	1	X=24,321～24,323 Y=-31,264～-31,266	長方形	(1.79)	1.05	0.23	N-30°-E				
82	1	X=24,323・24,324 Y=-31,268・-31,269	長方形	1.48	0.99	0.19	N-31°-E	105(古)・108(古)			
83	1	X=24,322・24,323 Y=-31,268	略円形	0.82	0.73	0.12	N-30°-E	105(古)			覆土中に炭化物多量に含む
85	1	X=24,325・24,326 Y=-31,273・-31,274	略円形	0.96	0.95	0.19	N-60°-W	86(古)・87(?)			他の遺構より新しい
86	1	X=24,325・24,326 Y=-31,274・-31,275	長方形	1.58	0.88	0.13	N-40°-W	85(新)	80(?)・81(新)		
87	1	X=24,325・24,326 Y=-31,273・-31,274	長方形	0.76	(0.50)	0.14	N-71°-W	85(?)			
88	1	X=24,318～24,320 Y=-31,266～-31,268	長方形	(1.56)	0.90	0.20	N-17°-E			18(古)	
89	1	X=24,325・24,326 Y=-31,283・-31,284	長方形	1.94	(0.52)	0.12	N-26°-E			15(?) 16(新)	
90	1	X=24,324～24,326 Y=-31,282～-31,284	長方形	(2.57)	(0.46)	0.16	N-29°-E			15(?) 16(新)	
91	4	X=24,351～24,353 Y=-31,291～-31,293	長方形	(2.10)	0.70	0.17	N-42°-E				
93	4	X=24,350 Y=-31,290・-31,291	長方形	(1.01)	(0.40)	0.19	N-62°-W			17(新)	
94	4	X=24,349・24,350 Y=-31,284・-31,285	長方形	(1.52)	0.67	0.19	N-33°-E				
97	1	X=24,322 Y=-31,270・-31,271	長方形	1.02	0.73	0.28	N-64°-W	95(古)・106(新)	122(?)	18(?)	95号土坑は1号火葬土坑
98	5	X=24,342～24,345 Y=-31,265～-31,268	長方形	(3.31)	1.15	0.20	N-31°-E				かわらけ1
100	1	X=24,324・24,325 Y=-31,278～-31,280	長方形	1.78	0.72	0.07	N-70°-W				
101	1	X=24,322・24,323 Y=-31,276・-31,277	長方形	(1.40)	0.81	0.13	N-13°-E		76(新)・100(2掘立?)		
102	1	X=24,315・24,316 Y=-31,259・-31,260	長方形	(0.85)	0.98	0.44	N-17°-E	64(?)			
103	1	X=24,316～24,319 Y=-31,261～-31,263	長方形	(2.73)	1.40	0.23	N-30°-E	104(?)			
104	1	X=24,318～24,321 Y=-31,259～-31,262	長方形	(3.12)	1.09	0.31	N-30°-E	68(古)・69(古)・103(?)			
105	1	X=24,322・24,323 Y=-31,268・-31,269	長方形	(1.44)	0.77	0.24	N- 0°	82(新)・83(新)・108(古)		18(?)	
106	1	X=24,322～24,325 Y=-31,269～-31,271	長方形	(3.45)	1.01	0.18	N-33°-E	97(古)・107(古)			かわらけ1

土坑計測値一覧表

土坑番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
107	1	X=24,322・24,323 Y=-31,269・-31,270	長方形	(0.57)	0.50	0.12	N-25°-W	106(新)・108(?)			
108	1	X=24,322・24,323 Y=-31,268～-31,270	長方形	(1.29)	1.10	0.14	N-90°	82(新)・105(?)・107(?)			
109	7	X=24,313・24,314 Y-31,216・-31,217	長方形	(0.84)	0.75	0.15	N-56°-W		115(新)		
110	7	X=24,314・24,315 Y=-31,215・-31,216	長方形	(0.95)	0.89	0.17	N-20°-E			19(新)	
111	7	X=24,313・24,314 Y=-31,215	長方形	(1.15)	(0.43)	0.10	N-20°-E		116(新)	19(新)	
112	7	X=24,313・24,314 Y=-31,213	不整形	(0.73)	(0.65)	0.21	N-90°				
113	7	X=24,312・24,313 Y=-31,218	略円形	(0.77)	(0.46)	0.10	N-70°-W				
114	7	X=24,311・24,312 Y=-31,216・-31,217	長方形	1.22	(0.68)	0.66	N-71°-W				

第４表　ピット計測値一覧表

ピット番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
1	2	X=24,326 Y=-31,220	略円形	0.43	0.33	0.33	N-25°-E	1(古)			
2	2	X=24,327 Y=-31,221	略円形	0.33	0.32	0.29	N-63°-W	2(新)			
3	2	X=24,325・24,326 Y=-31,221	略円形	0.42	0.38	0.36	N-78°-W	2(古)			
4	2	X=24,323 Y=-31,221	略円形	0.40	0.28	0.14	N-18°-E	1(?)			
5	2	X=24,323・24,324 Y=-31,225	略円形	0.58	0.41	0.72	N-5°-W	8(古)・9(古)			1号掘立柱建物柱穴
6	2	X=24,325・24,326 Y=-31,225・-31,226	不明	(0.43)	0.30	0.17	N-40°-E		7(新)		
7	2	X=24,325 Y=-31,225・-31,226	略円形	0.58	0.55	0.21	N-0°		6(古)		
8	2	X=24,324・24,325 Y=-31,227	略円形	0.50	0.49	0.50	N-15°-E	11(?)			1号掘立柱建物柱穴
9	2	X=24,321 Y=-31,226	略円形	0.40	0.40	0.36	N-0°				1号掘立柱建物柱穴
10	2	X=24,321・24,322 Y=-31,224・-31,225	略円形	0.40	0.35	0.19	N-25°-W	9(?)			
11	2	X=24,321 Y=-31,223・-31,224	略円形	0.46	0.45	0.31	N-67°-W				
12	2	X=24,320 Y=-31,224	略円形	0.47	0.28	0.31	N-34°-W		13(古)		1号掘立柱建物柱穴
13	2	X=24,320 Y=-31,224	略円形	0.42	0.31	0.20	N-90°		12(1号掘立柱建物、新)		
14	2	X=24,321・24,322 Y=-31,222・-31,223	略円形	0.50	0.48	0.49	N-65°-W	13(新)			
15	2	X=24,322 Y=-31,222	略円形	0.36	0.28	0.32	N-18°-E				
16	2	X=24,321・24,322 Y=-31,223	略円形	0.75	0.39	0.33	N-13°-E	13(?)・57(?)			
17	2	X=24,316・24,317 Y=-31,222・-31,223	不明	0.30	(0.19)	0.30	N-41°-W		18(新)・19(?)		
18	2	X=24,316・24,317 Y=-31,222・-31,223	不明	(0.48)	0.37	0.35	N-47°-E		17(古)・19(?)		
19	2	X=24,317 Y=-31,223	略円形	0.36	0.35	0.24	N-40°-W		17(?)・18(?)		
20	2	X=24,317・24,318 Y=-31,222	略円形	0.35	0.25	0.33	N-35°E	16(新)			
21	2	X=24,317・24,318 Y=-31,223・-31,224	不明	(0.56)	0.44	0.47	N-16°-E		22(古)・23(古)		
22	2	X=24,317・24,318 Y=-31,224・-31,225	不明	(0.27)	(0.25)	0.27	N-30°-E		21(新)・23(新)		

ピット番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
23	2	X=24,317・24,318 Y=-31,224・-31,225	不明	0.30	0.28	0.34	N-15°-E		21(新)・22(古)		
24	2	X=24,316 Y=-31,224	略円形	0.29	0.27	0.19	N-66°-E	16(新)			
25	2	X=24,317 Y=-31,223	略円形	0.21	0.15	0.24	N-15°-E	16(新)			
26	2	X=24,316 Y=-31,224・-31,225	略円形	0.46	0.31	0.32	N-74°-E				
27	2	X=24,316・24,317 Y=-31,224	不明	0.59	0.36	0.43	N-90°		28(新)		
28	2	X=24,316・24,317 Y=-31,224・-31,225	略円形	0.48	0.38	0.34	N-83°-E	16(新)	27(古)		
29	2	X=24,317 Y=-31,223	略円形	0.30	0.26	0.34	N-50°-W				
30	2	X=24,317 Y=-31,223	略円形	0.25	0.22	0.19	N-38°-E				
31	2	X=24,325 Y=-31,220・-31,221	略円形	0.32	0.25	0.35	N-46°-W	1(新)			
32	2	X=24,322・24,323 Y=-31,222・-31,223	不明	0.67	0.60	0.40	N-67°-W	6(古)			1号掘立柱建物柱穴
33	2	X=24,321・24,322 Y=-31,221	略円形	(0.47)	0.42	0.44	N-46°-W		63(古)1号掘立柱建物		
34	2	X=24,322 Y=-31,221・-31,222	略円形	0.51	0.41	0.20	N-34°-E		63(?)1号掘立柱建物		
35	2	X=24,323 Y=-31,222・-31,223	略円形	0.37	0.28	0.50	N-61°-W	5(古)			
36	2	X=24,323 Y=-31,223	略円形	0.32	0.25	0.13	N-85°-E	6(古)			
37	2	X=24,320 Y=-31,221・-31,222	略円形	(0.39)	0.30	0.24	N-18°-E	14(古)	38(新)		
38	2	X=24,320 Y=-31,222	略円形	0.61	0.42	0.22	N-64°-W	14(古)	37(古)		
39	2	X=24,319・24,320 Y=-31,222	不明	0.46	0.33	0.15	N-85°-E		64(古)		
40	2	X=24,319 Y=-31,223	略円形	0.25	0.23	0.31	N-0°	15(新)			
41	2	X=24,320 Y=-31,224・-31,225	略円形	0.36	0.21	0.28	N-48°-E	12(新)			
42	2	X=24,322 Y=-31,225	略円形	0.42	0.35	0.39	N-13°-E	9(新)			
43	2	X=24,322・24,323 Y=-31,225	略円形	0.29	0.26	0.41	N-13°-E	9(新)			
44	2	X=24,316 Y=-31,222・-31,223	略円形	0.46	0.43	0.26	N-70°-E		45(古)		
45	2	X=24,316・24,317 Y=-31,221	略円形	(0.41)	0.37	0.32	N-20°-E		44(新)		
46	2	X=24,316・24,317 Y=-31,224	略円形	0.21	0.17	0.18	N-46°-W	16(新)			
47	1	X=24,311 Y=-31,233・-31,234	略円形	0.37	0.32	0.37	N-32°-E			2(新)	
48	1	X=24,310 Y=-31,233	略円形	0.30	0.27	0.24	N-20°-E				
49	1	X=24,308 Y=-31,235	略円形	0.54	0.53	0.59	N-36°-E				
50	1	X=24,307・24,308 Y=-31,235・-31,236	略円形	0.38	0.37	0.31	N-73°-W				
51	1	X=24,310・24,311 Y=-31,236・-31,237	略方形	0.76	0.49	0.48	N-44°-E	56(古)		3(新)	
52	1	X=24,310 Y=-31,235・-31,236	略円形	0.62	0.59	0.54	N-30°-E			3(新)	
53	1	X=24,310・24,311 Y=-31,235・-31,236	略円形	0.34	0.26	0.24	N-34°-E			3(新)	
54	1	X=24,311 Y=-31,240	略円形	0.70	0.53	0.64	N-42°-W				
55	1	X=24,312 Y=-31,241・-31,242	略円形	0.40	0.32	0.18	N-28°-E			5(?)	

ピット計測値一覧表

ピット番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
56	1	X=24,311 Y=-31,242	略円形	0.31	0.29	0.38	N-90°			5(?)	
57	1	X=24,311 Y=-31,242・-31,243	略円形	0.35	0.26	0.29	N-0°			4(新)	
58	1	X=24,311・24,312 Y=-31,242	略円形	0.23	0.23	0.34	N-0°			4(新)	
59		X=24,319・24,320 Y=-31,225	略円形	0.37	(0.30)	0.49	N-71°-W	18(古)			
60	1	X=24,309 Y=-31,234	略方形	0.30	0.30	0.31	N-0°			1(古)	
61	1	X=24,315 Y=-31,248	略円形	0.51	0.43	0.30	N-18°-E				
62	1	X=24,313 Y=-31,251・-31,252	略円形	0.52	0.34	0.38	N-28°-E	41(古)			
63	2	X=24,321・24,322 Y=-31,251	略円形	0.32	0.28	0.45	N-47°-W		33(新)・34(新)		1号掘立柱建物柱穴
64	2	X=24,319・24,320 Y=-31,221・-31,222	不明	0.88	0.48	0.60	N-48°-W		39(新)		
65	2	X=24,319 Y=-31,222・-31,223	略円形	0.35	0.28	0.35	N-67°-W	15(?)			1号掘立柱建物柱穴
66	2	X=24,320 Y=-31,223	略円形	0.42	0.34	0.32	N-59°-E	15(?)	68(古)		
67	2	X=24,320・24,321 Y=-31,223	略円形	0.30	0.26	0.43	N-20°-E	57(新)			
68	2	X=24,320 Y=-31,223	略円形	0.56	0.41	0.29	N-0°	14(古)・57(古)	66(新)		
69	2	X=24,321 Y=-31,228	略円形	0.25	(0.19)	0.29	N-17°-E				
70	1	X=24,308・24,309 Y=-31,239・-31,240	略円形	0.33	(0.29)	0.42	N-70°-W				
71	1	X=24,310 Y=-31,240	略円形	0.33	0.28	0.26	N-68°-E				
72	1	X=24,325 Y=-31,271	略円形	0.36	0.26	0.18	N-68°-E		99(2号掘立柱建物、古)		
73	1	X=24,323・24,324 Y=-31,272・-31,273	略円形	0.44	0.42	0.58	N-20°-E			14(古)・18(古)	
74	1	X=24,322 Y=-31,275	略円形	0.42	0.36	0.43	N-55°-W				2号掘立柱建物柱穴
75	1	X=24,322・24,323 Y=-31,275	略円形	0.44	0.38	0.44	N-30°-E				
76	1	X=24,322・24,323 Y=-31,276・-31,277	略円形	0.38	0.32	0.49	N-76°-W	101(古)	100(2号掘立柱建物、古)		
77	1	X=24,324 Y=-31,275・-31,276	略円形	0.23	0.23	0.18	N-0°				
78	1	X=24,325 Y=-31,275・-31,276	略円形	0.38	(0.33)	0.44	N-57°-W		79(2号掘立柱建物、新)		
79	1	X=24,325 Y=-31,275・-31,276	略円形	0.37	0.24	0.38	N-57°-W		78(古)	18(?)	2号掘立柱建物柱穴
80	1	X=24,325 Y=-31,275	略円形	0.37	0.32	0.58	N-26°-E	86(古)		18(?)	
81	1	X=24,326 Y=-31,275	略円形	0.38	0.32	0.37	N-30°-E	86(古)			
82	1	X=24,325 Y=-31,277	略円形	0.33	0.31	0.12	N-60°-W				
83	1	X=24,324 Y=-31,277	略円形	0.35	0.32	0.16	N-0°				
84	1	X=24,322・24,323 Y=-31,277・-31,278	略円形	0.54	0.51	0.49	N-30°-W				
85	1	X=24,326 Y=-31,277・-31,278	略円形	0.41	0.35	0.49	N-14°-W			18(?)	2号掘立柱建物柱穴
86	1	X=24,326・24,327 Y=-31,278・-31,279	略円形	0.34	0.32	0.46	N-64°-W				
87	1	X=24,327 Y=-31,279	略円形	0.41	0.32	0.49	N-43°-W			18(新)	
88	1	X=24,327 Y=-31,279	略円形	0.25	0.23	0.47	N-65°-W		89(古)・90(古)	18(新)	2号掘立柱建物柱穴

ピット番号	区	位置(グリッド)	形状	規模(m)			長軸方位	重複			備考(出土遺物ほか)
				長径	短径	深さ		土坑	ピット	溝	
89	1	X=24,327 Y=-31,279	不明	(0.40)	0.34	0.29	N-24°-E		88(新)・90(古)	18(新)	
90	1	X=24,327 Y=-31,279・-31,280	略円形	0.79	(0.74)	0.26	N-20°-E		88(新)・89(新)	18(新)	
91	1	X=24,328 Y=-31,280	略円形	0.42	0.31	0.45	N-30°-E			18(新)	
93	1	X=24,326・24,327 Y=-31,281	略円形	0.32	0.30	0.38	N-54°-W				
94	1	X=24,326・24,327 Y=-31,281	略円形	0.33	0.28	0.30	N-34°-E				
95	1	X=24,327 Y=-31,282・-31,283	略円形	0.40	0.28	0.37	N-64°-E			16(新)	
96	1	X=24,325 Y=-31,282	略円形	0.30	0.27	0.23	N-69°-W				
97	1	X=24,324・24,325 Y=-31,280・-31,281	略方形	0.98	0.49	0.26	N-48°-E				２号掘立柱建物柱穴
98	1	X=24,321 Y=-31,268	略円形	0.26	0.20	0.25	N-０°			18(新)	
99	1	X=24,324・24,325 Y=-31,271	略円形	0.36	0.32	0.29	N-69°-E		72(新)		２号掘立柱建物柱穴
100	1	X=24,323 Y=-31,277	略円形	0.56	0.45	0.42	N-15°-E	101(古)	76(新)		２号掘立柱建物柱穴
101	1	X=24,321 Y=-31,273	略円形	0.47	0.47	0.16	N-０°				２号掘立柱建物柱穴
102	1	X=24,327 Y=-31,277・-31,278	不明	0.48	0.22	0.13	N-69°-W		103(新)	18(新)	
103	1	X=24,327 Y=-31,277	略円形	0.33	0.20	0.22	N-47°-W		102(古)	18(新)	
104	1	X=24,318・24,319 Y=-31,257・-31,258	略円形	0.35	0.34	0.35	N-72°-W	60(新)			
105	1	X=24,319・24,320 Y=-31,257	略円形	0.53	0.34	0.26	N-32°-W	59(新)			
106	1	X=24,314 Y=-31,252	略円形	0.28	0.23	0.17	N-26°-E	41(新)			
107	1	X=24,315 Y=-31,244	略円形	0.23	0.16	0.18	N-13°-W				
108	1	X=24,314 Y=-31,244	略円形	0.32	0.25	0.44	N-22°-E				
109	1	X=24,313・24,314 Y=-31,244	略円形	0.26	0.25	0.39	N-74°-E				
111	7	X=24,312 Y=-31,215	不明	0.26	(0.19)	0.28	N-72°-W				
112	7	X=24,315 Y=-31,217	略円形	0.43	0.41	0.45	N-７°-W				
113	7	X=24,314 Y=-31,217	略円形	0.35	0.31	0.37	N-20°-W		114(?)		
114	7	X=24,314 Y=-31,217・-31,218	略円形	0.54	0.44	0.30	N-82°-E		113(?)		
115	7	X=24,314 Y=-31,216・-31,217	略方形	0.30	0.30	0.39	N-33°-E	109(古)			
116	7	X=24,313 Y=-31,215	不明	0.30	(0.12)	0.18	N-70°-W	111(古)			
117	7	X=24,312 Y=-31,217・-31,218	不明	0.48	0.47	0.37	N-４°-W				
118	7	X=24,328 Y=-31,281	略円形	0.24	0.16	0.42	N-68°-E			18(新)	
119	1	X=24,328 Y=-31,281	不明	0.35	(0.22)	0.20	N-73°-W				２号掘立柱建物柱穴
120	7	X=24,313 Y=-31,213・-31,214	不明	0.37	(0.28)	0.25	N-39°-E				
121	7	X=24,314 Y=-31,214	略円形	0.38	0.26	0.16	N-90°				
122	1	X=24,322 Y=-31,270	略円形	0.27	0.23	0.20	N-28°-E	95(古)・97(古)		18(?)	95号土坑は１号火葬土坑

第５表　非掲載遺物一覧表(陶磁器類)

区	層位・面	遺構番号	遺構種	中世																近世																	
				中国磁器		中国陶器		国産施釉陶器		国産焼締陶器		在地系鉢・鍋		在地系皿		在地系器種不詳		瓦		中国磁器		中国陶器		国産磁器		国産施釉陶器		国産焼締陶器		在地系焙烙・鍋		在地系皿		在地系その他		瓦	
				点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
1		20	土坑																											1	25						
1		24	土坑																																		
1		26	土坑																																		
1		44	土坑																																		
1		53	土坑																																		
1		55	土坑											1	6															1	10	3	8				
1		76	土坑																															1	19		
1		78	土坑																															1	2		
1		106	土坑											1	2																						
1		1	溝											2	9															5	119	1	5				
1		2	溝									4	181																	4	93	14	75	3	16		
1		3	溝									2	70																	2	31						
1		4	溝																											1	24						
1		11	溝					1	2																												
1		18	溝											1	49											1	2					1	35				
1												1	10													3	9			4	30	4	29				
2		1	住居																																		
2		1	土坑																																		
2		3	土坑																																		
2		6	土坑																																		
2		12	土坑											1	8																						
2		13	土坑									1	9																								
		14	土坑																													1	16				
2		17	ピット									1	15																			1	4				
2		20	ピット																													1	4				
2		44	ピット																																		
2																																					
2	表土																													1	3						
3		南側																								1	5										
3		南側カクラン																																			
5		98	土坑																																		
6												1	6																	2	46	1	5				
7		19	溝																											2	9						
7		114	ピット																																		
7		遺構確認面												1	16											1	1			5	56						
7		カクラン																																			
8A												1	26																	3	40						
8B																														2	36						
計				0	0	0	0	1	2	0	0	11	317	7	90	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	17	0	0	33	522	27	181	5	37	0	0

中世	19	409																		近世	71	757															

写 真 図 版

1　遺跡遠景（矢印が遺跡）

2　鞍掛地区に残る旧利根川流路

3　下休泊用水（逆川合流地点、旧赤堀村）

4　屋敷林が残る集落遠景（旧野辺村）

5　長良神社（下三林地区）

1　１区全景、西から

2　１区全景（東側）

3　１区全景（中央）

4　１区全景（西側）

5　２区（調査前の状況）

6　２区全景、南西から

1　３区(調査前の状況)

2　３区全景、南東から

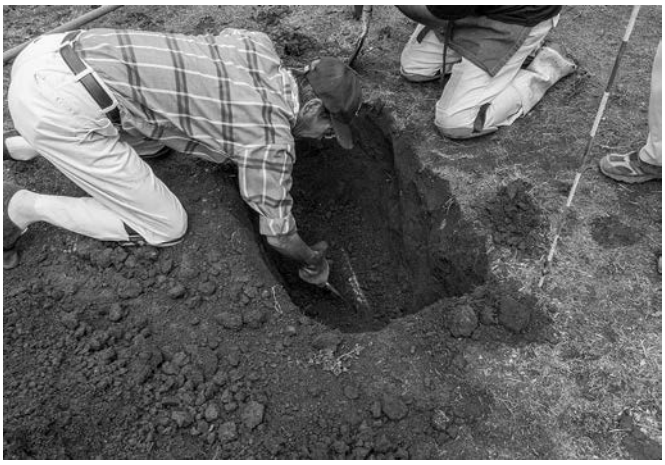
3　４区(調査前の状況)

4　４区全景、南東から

5　５区(調査前の状況)

6　５区全景、北西から

7　７区(調査前の状況)、南東から



8　埋設物の確認作業

1　１号竪穴建物土層堆積状態、北から

2　同・カマド全景、南から

3　同・遺物出土状態（１）、南東から

4　同・遺物出土状態（２）、北から

5　２号竪穴建物全景、南西から

1　２号竪穴建物土層堆積状態、北から

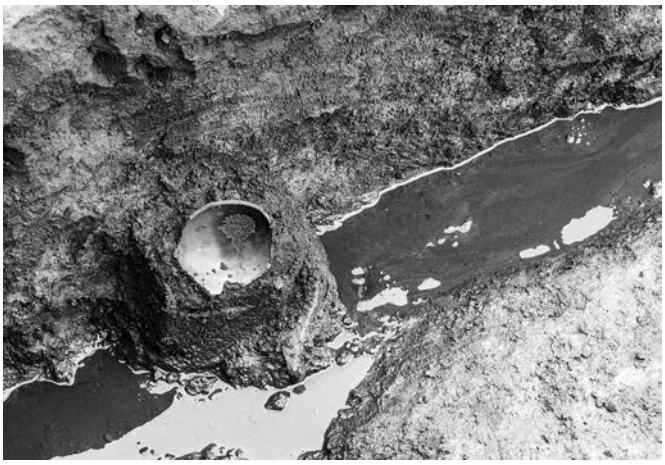
2　同・遺物出土状態（１）、南西から

3　同・遺物出土状態（２）、南西から

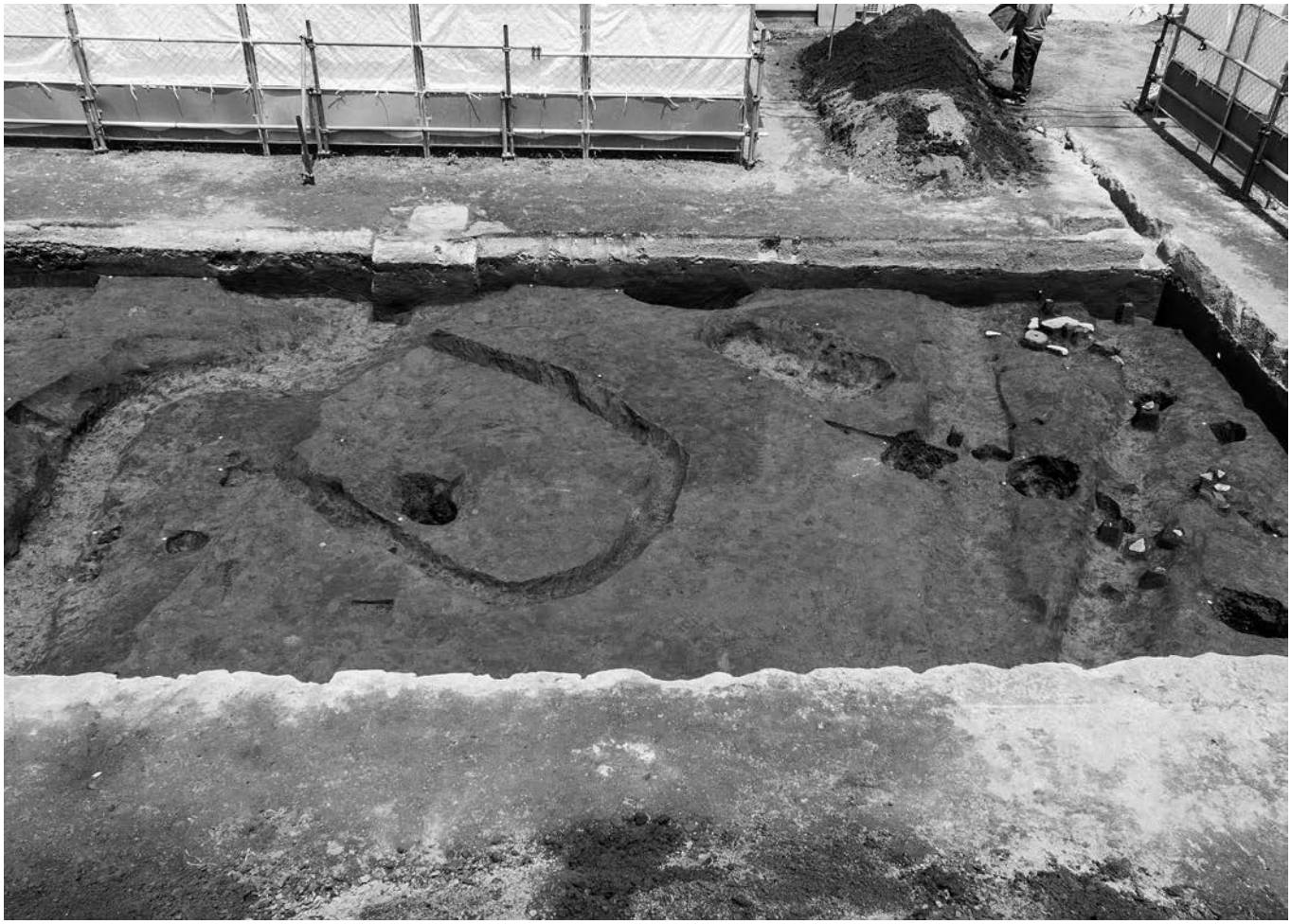
4　同・掘り方全景、南西から

5　４号竪穴建物全景、南東から

1　4号竪穴建物土層堆積状態、南西から



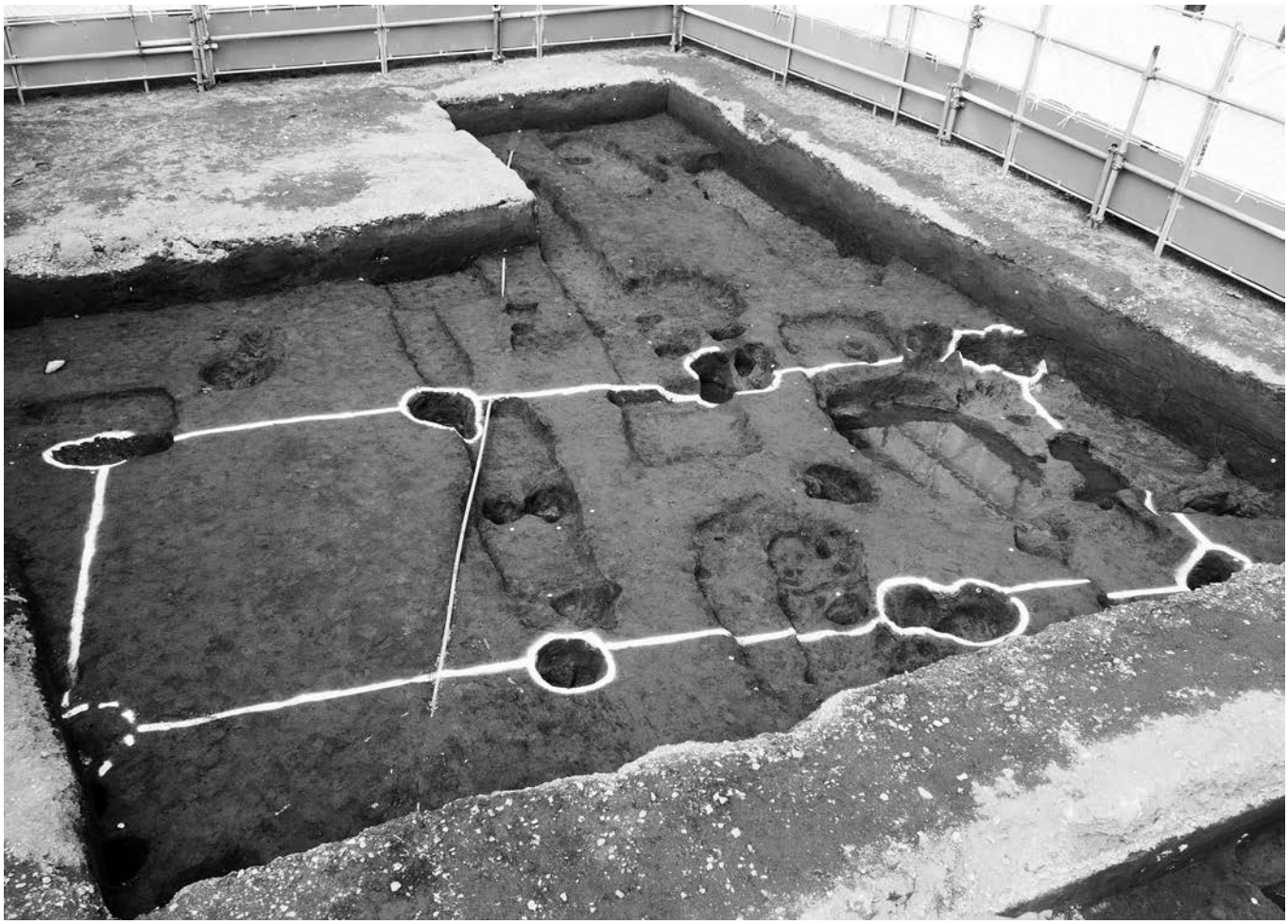
2　同・遺物出土状態



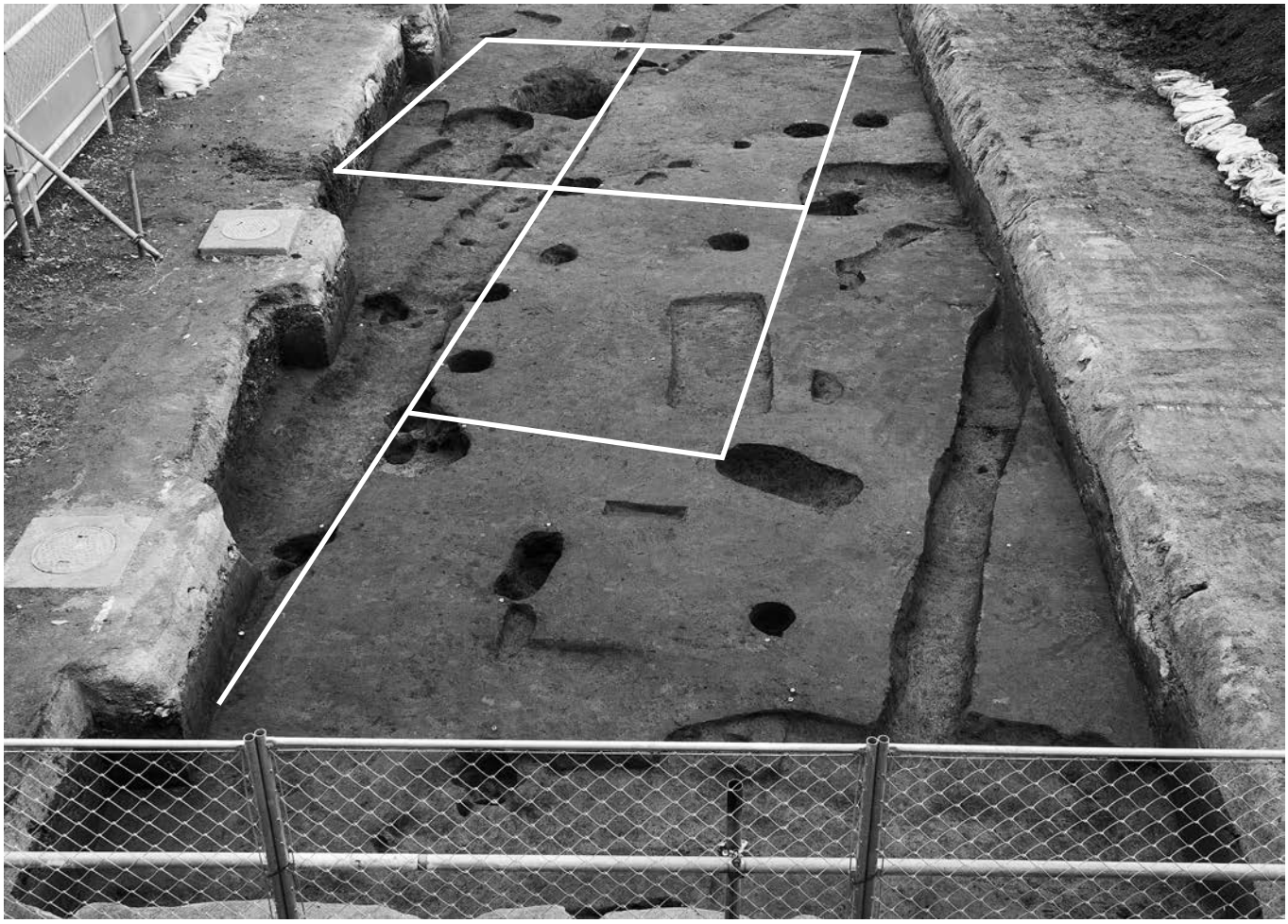
3　1号平地建物(中央)と19号土坑(右上)、南西から

4　1号平地建物全景、北西から

5　19号土坑全景、北東から

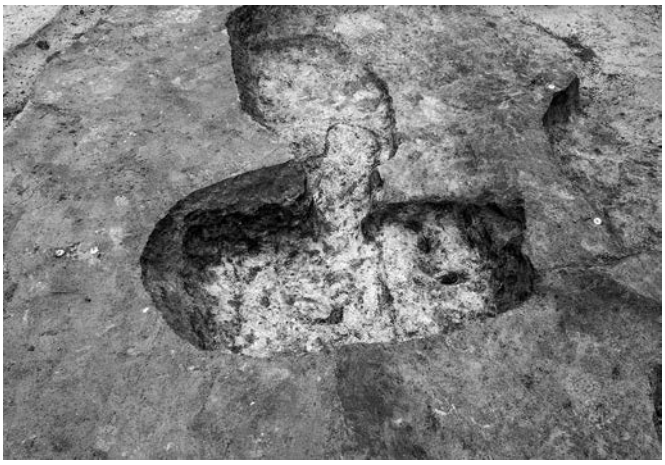


1　1号掘立柱建物全景、南から



2　2号掘立柱建物全景、西から

1　１号火葬土坑全景、東から



2　同・掘り方全景、東から

3　同・骨片等出土状態、東から

4　同・通風孔赤化状態、東から

5　１号井戸全景、南から

6　２号井戸全景、南から

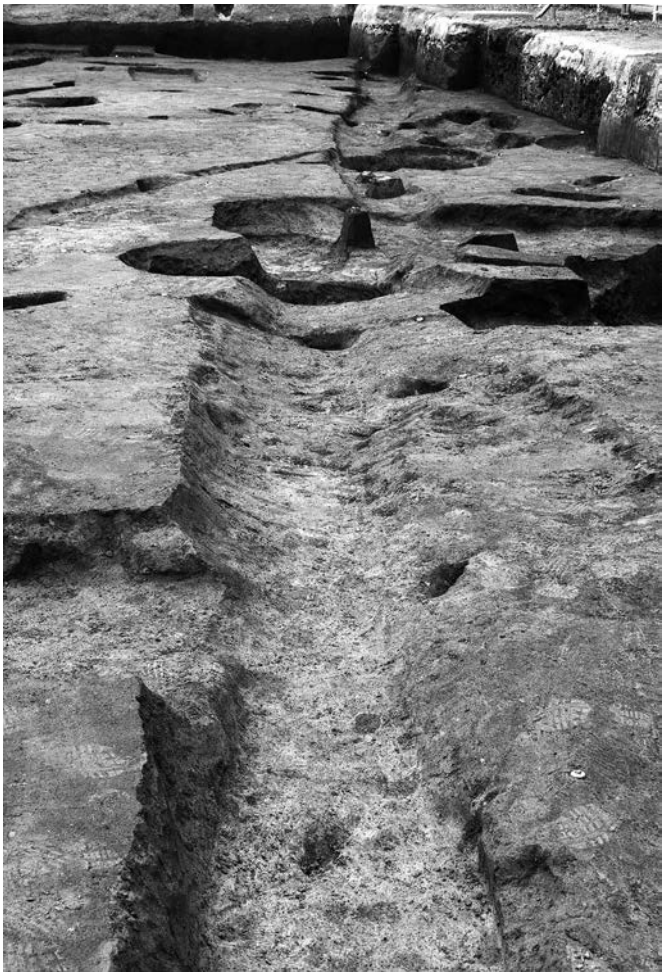
7　３号井戸全景、東から

8　４号井戸土層堆積状態、南から

1　1～3号溝全景、南から

2　4・5号溝全景、南から

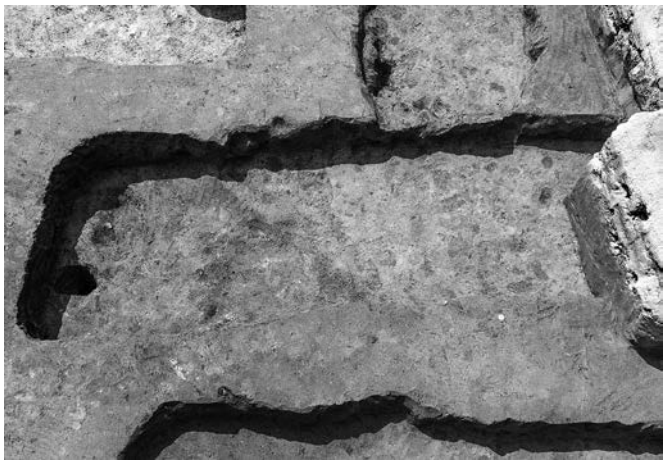
3　15号溝全景、東から



4　18号溝全景、東から

5　21・22号土坑全景、東から

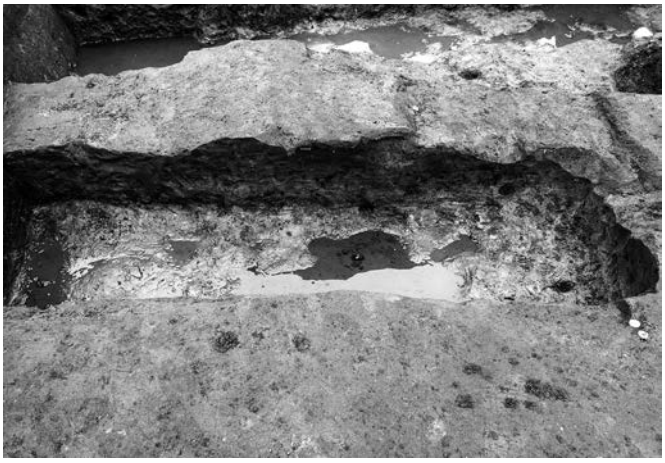
6　24号土坑全景、東から



1　27号土坑全景、東から

2　49号土坑全景、北から

3　60号土坑全景、南から



4　61号土坑全景、東から

5　64号土坑全景、南西から

6　70土坑全景、西から

7　62号土坑全景、北から

8　72号土坑全景、北から

1　1区中央西の土坑群、南から

2　1区中央東の土坑群（1）、南から

2　1区中央東の土坑群（2）、南から

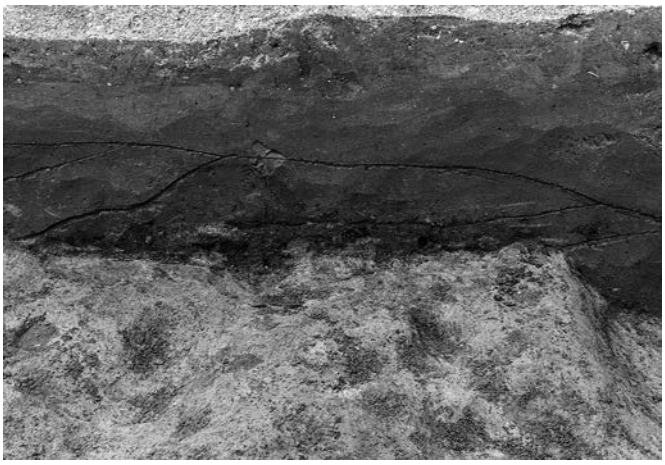
3　1区中央東の土坑群（3）、南西から

1　55号土坑遺物出土状態（１）、東から

2　同・遺物出土状態（２）、西から

3　同・遺物出土状態（３）、東から

4　同・完掘状態、東から



5　同・土層堆積状態、南から

1　105号土坑全景、東から

2　107号土坑全景、西から

3　56号土坑全景、東から

4　85号土坑全景、南から

5　14号土坑全景、南から

6　35号土坑全景、南から

7　５号土坑全景、東から

8　68号土坑全景、北から

1　33号ピット全景、北から

2　51号ピット全景、北から

3　52号ピット全景、北から

4　63号ピット全景、北から

5　51号ピット土層堆積状態、南から

6　52号ピット土層堆積状態、南から

7　１区調査風景、東から

8　２区調査風景、南から

9　館林市教育長視察、南西から

10　館林特別支援学校教職員視察、西から

PL.16

1 号竪穴建物

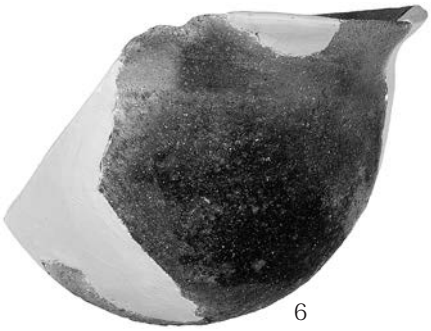
1

2

3

4

5


6

7

8

9

10

11

2号竪穴建物

3号竪穴建物

4号竪穴建物

2号溝

3号溝

5号溝

18号溝

19号溝

19号土坑

6号土坑

28号土坑

36号土坑

40号土坑

64号土坑

77号土坑

82号土坑

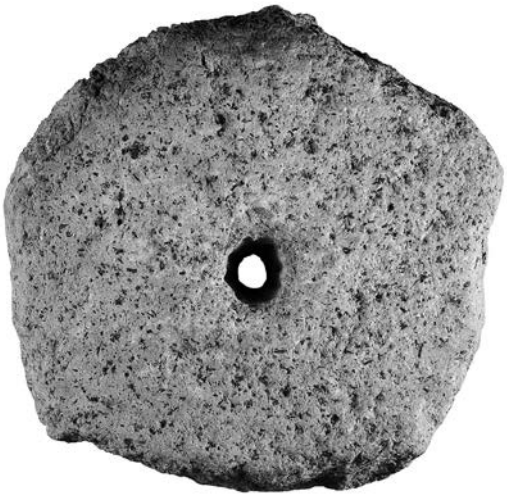
107号土坑

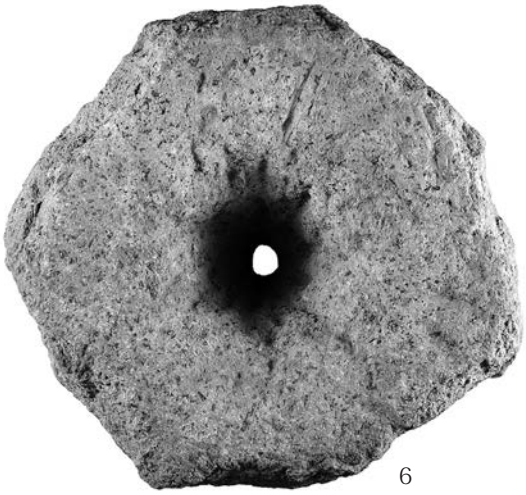
PL.18

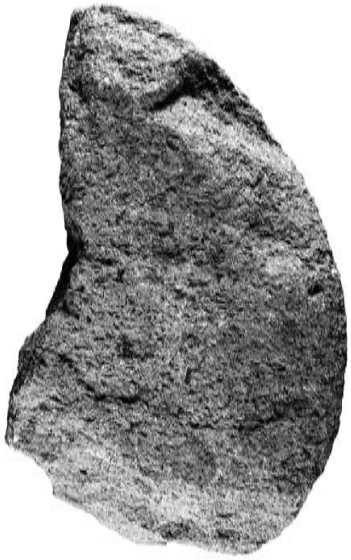
55号土坑

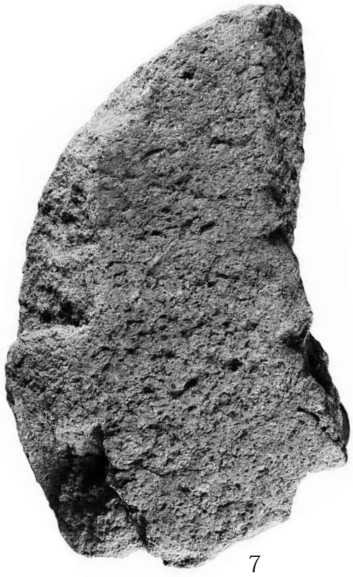
4

5




6




7

8

44号ピット

1

62号ピット

1

78号ピット

1

1－①

1－②

1－③

2

包含層

1

2

3

6

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	だいいせき
書　　名	台遺跡
副　書　名	県立学校施設整備事業(館林特別支援学校改築整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	654
編著者名	岩﨑泰一、藤巻幸男、間庭　稔、飯森康弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20190320
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	だいいせき
遺　跡　名	台遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたてばやししかみみばやしまち
遺跡所在地	群馬県館林市上三林町
市町村コード	10207
遺跡番号	0089
北緯(世界測地系)	361307.2
東経(世界測地系)	1401051.7
調査期間	20160701-20160731
調査面積	998㎡
調査原因	学校施設改築
種　　別	集落
主な時代	古墳、中・近世
遺跡概要	集落－古墳－竪穴建物5＋平地建物1＋土坑1／集落－中近世－掘立柱建物2＋火葬土坑1＋溝19＋井戸4＋土坑108＋ピット122
特記事項	
要　　約	本報告書は、平成28年度館林特別支援学校改築事業に伴い発掘された台遺跡の発掘調査報告である。本遺跡からは古墳時代後期の竪穴建物および平地建物が発見されたほか、16世紀から17世紀にかけての集落の一部が確認されている。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第654集

台　遺　跡

県立学校施設整備事業(館林特別支援学校改築整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成31(2019)年3月13日　印刷
平成31(2019)年3月20日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／ジャーナル印刷株式会社